324
399

始

324-392

帝國圖書館藏

教行信證講義

赤沼智善
山邊習學 共著

第三卷 眞の卷 化の卷

東京 無我山房發行

大正
5. 7. 12
内交

教行信證講義

自序

眞實の宗教は、理想と現實の靈的抱合でなければなりませぬ。卽ち歸依と讃詠と法悅の極みなきとゝもに、更に綿細なる觀察と現實的批判を要するのであります。我聖人の宗教を知らんとする人々は、此消息を理解せねばなりませぬ。

土の中から花卉が生ずるやうに、凡ての理想は現實より生れるものでありますが、吾々は稍もすれば、其理想の芳薰に醉ひて、更に現實の批判を忘れんとするのであります。あらゆる宗教上の沈滯と迷信とは此魔境から生れてくる。是は靈海に棹す者の一樣に遭遇する危難であると思ひます。

良や理想に奔れば高踏的な貴族主義に陷り現實に專注すれば、往々にして冷酷な自然主義に沈みて、共に靈を失ひます。道に進む者の最も難關とする所であります。

けれども眞實の宗教は、常に此兩者を不可思議に調和して限りなく進展するのであります。我聖人は、本典の前五卷に於いて、高遠なる靈界の光景を說示せられましたが、此『化卷』に來りて、眞僞邪正の分齊を決判し、進んで正道に至る心靈的歷程を開示し、更に信疑雜心の細微に分け入りて、明快なる批判を施された。而も夫は冷酷な理智的批判ではなくして、慈愛に裏づけられた涙ある告白であります。斯して此『化卷』は前五卷を裏書して理想を現實化せしめ、そして限りなき人類を攝受し敎化する力を體現せられたのであります。是は良に靈界の驚異であると思ひます。我有緣の讀者が、深く此機微に觸れんことを望むや切であります。

顧みれば、私共不肖をもつて本典講述の筆を執りましてから茲に四星霜、此間時代思潮の推移、敎界の變遷等樣々の障礙は、私共の身邊を襲うたことでありますが、幸に佛天の冥祐と先輩師友の提撕によりまして、こゝに本講を完成することを得ましたのは、私共の感激措く能はざる所であります。茲に謹んで感謝の意を表する次第であります。

今や本講を結ぶに當りまして、既往を省みれば、當初期する所の半ばにも達することが出來ず、徒に無上の聖典を瀆し奉りしの思ひ溢れて、只管慚愧に堪へぬ次第であります。只今後の努力が、此缺陷の幾分にても滿すことが出來まするならば、私共の至幸であると思ひます。

大正四年十月六日

渡印の途上、香港沖の宮崎丸にて

著者　識

教行信證講義第三卷（眞佛土卷 化身土卷）目次

眞佛土卷

序講

第一章　眞佛土卷の來由……一

本講

第一編　眞佛土（眞佛土卷）……七
第一章　解題……七
第一節　題號と選號……七
第二章　標擧……一〇
第三章　眞佛土……一七

第一節　略顯……一七
第一項　身土略標……一七
第二項　報の意義……二〇
第三項　十二、十三願名……二三
第二節　經文證……二四
第一項　『大無量壽經』の文……二四
第一科　本願文……二四
第二科　成就文……二五
第二項　『如來會』の文……三一
第三項　『平等覺經』の文……三三
第四項　『大阿彌陀經』の文……三四
第五項　『不空羂索經』の文……四一

第六項　『涅槃經』の文……四一
第一科　四相品の文……四一
第二科　四依品の文……四二
第三科　聖行品の文……五三
第四科　梵行品の文……五四
第五科　德王品の三文……五八
第六科　迦葉品の二文……六一
第七科　梵行品の文……七一
第八科　迦葉品の二文……九三
第九科　獅子吼品の文……九三
第三節　論文證……一〇〇
第一項　淨土論の文……一〇五
第四節　釋文證……一〇五
……一一〇

第一項　曇鸞大師の釋文……一一〇
第一科　『論註』の文……一一〇
清淨功德の文――性功德の文――大義門功德の文――不思議力釋――
自利々他釋――不虛作住持釋
第二科　『讚阿彌陀偈』の文……一二七
第二項　善導大師の釋文……一四一
第一科　『玄義分』の文……一四一
第二科　『序分義』の文……一四二
第三科　『定善義』の文……一六六
第四科　『法事讚』の文……一六九
第三項　憬興師の釋文……一七一
第五節　結釋……一七三
第一項　眞實報土の結釋……一七六
第二項　得證辨……一七八
第一科　正明……一七八
第二科　『起信論』の文……一八〇
第三項　眞假分判……一八六
第一科　報土の總釋……一八七
第二科　報土の別釋……一八七
眞佛――眞土――往生
第三科　假土を示す……一九〇
第四項　結釋勸信……一九二

化身土卷

序講

第一章　化身土卷來由……一九四

本講

第一編　化身化土（化身土卷）……二二四
第一章　題號と選號……二二四
第二章　標　舉……二二七
第三章　略　顯……二二三
第一節　化　身……二二三
第二節　化　土……二三七
第四章　第十九願開說『觀經』の意……二三六
第一節　第十九願の大旨……二三六
第一項　所化の機類……二三六
第二項　二尊の能化……二三八
第三項　第十九願名……二三九
第四項　異名布列……二四〇

第二節　經文證……二四一
第一項　因願文……二四一
第一科　『大無量壽經』の文……二四一
第二科　『悲華經』の文……二四六
第二項　成就文指示……二四八
第三項　化身土の證文……二四八
第一科　『大經』道樹講堂の文……二四九
第二科　『大經』『如來會』の疑城胎宮の文……二五一
第三科　『大經』『如來會』の不可稱計の文……二六〇
第三節　釋文證……二六一
第一項　善導大師の釋文……二六一
第二項　憬興大師の釋文……二六一

第三項　源信和尚の釋文……二六三
第一科　引文……二六三
第二科　私釋……二六六
第五章　問答廣釋……二七〇
第一節　大觀兩經の融會……二七〇
第一項　問……二七一
第二項　隱顯略答……二七一
第一科　標舉……二七一
第二科　隱顯釋義……二七二
第三科　結文……二九〇
第三項　引文……二九一
第一科　善導大師の釋文……二九一
序題門文——宗旨門文——證信序文——顯行緣文——三心釋文——示

觀緣文——顯行緣文——後序文——『禮讚』前序文——雜修失文——護念緣文——如來出現文——萬劫修劫文——定散俱廻文
第二科　曇鸞大師の釋文……三三四
第三科　道綽禪師の釋文……三三五
第二節　私釋の一(三經通顯)……三三七
第一項　三經隱顯……三三七
第二項　觀經隱顯……三四一
第一科　方便門……三四一
第二科　眞實門……三五〇
第三項　機相廣述……三五一
第一科　引文……三五二
第二科　正明……三五二
第三科　文釋……三五五

第三節　私釋の二(聖淨對顯)……三五五
第一項　聖道門……三五五
第二項　淨土門……三五九
第一科　釋名と總標……三五九
第二科　所行體……三六〇
横出(正、助、雜)——横超(眞實行)
第三科　能行相……三六二
簡濫釋——雜行相——助正相
第四節　異名結釋……三七四
第五節　大觀兩經結釋……三八〇
第六節　三經融會問答……三八一
第一項　問……三八一
第二項　方便相の總答……三八二

第三項　隱顯義の別答……三八七
第一科　標　擧……三八七
第二科　顯義解釋……三八八
第三科　隱義解釋……三九〇
正明——釋成
第四項　三經一致結釋……三九五
第六章　第廿願開說『小經』の意……三九九
第一節　第廿願大意……四〇〇
第一項　所機の勸勵……四〇〇
第二項　方便眞門……四〇〇
第一科　標……四〇〇
第二科　雜心釋……四〇一
第三科　專心釋……四〇五

第四科　善本釋……四〇六
第五科　德本釋……四〇七
第三項　二尊能化……四〇七
第四項　第廿願名……四〇八
第五項　第廿願異名……四〇九
第二節　善本、經文證……四一〇
第一項　『大無量壽經』の文……四一一
第一科　因願文……四一一
第二科　成就文……
第三科　三十行偈文……四一五
第二項　『如來會』の文……四一九
第三項　『平等覺經』の文……四二〇
第四項　『觀無量壽經』の文……四二一

第五項　『阿彌陀經』の文……四二二
第三節　善本、釋文證……四二三
第一項　善導大師の釋文……四二三
第一科　『定善義』の文……四二三
第二科　『散善義』の三文……四二五
第三科　『法事讃』の三文……四三二
第四科　『般舟讃』の文……四三四
第五科　『往生禮讃』の文……四三六
第二項　大智律師の釋文……四三六
第三項　智圓法師の釋文……四三九
第四節　勸信經文證……四四〇
第一項　『大無量壽經』の文……四四〇
第二項　『涅槃經』の文……四四三

第一科　迦葉品の二文……四四三
第二科　德王品の文……四五三
第三項　『華嚴經』の文……四五七
第一科　善知識の文……四五七
第二科　如來大恩の文……四五八
第五節　勸信釋文證……四五九
第一項　『般舟讚』の文……四五九
第二項　『往生禮讚』の文……四六〇
第三項　『法事讚』の文……四六一
第四項　『法事讚』後序の文……四六三
第六節　私釋……四六四
第一項　機情の失……四六四

第二項　悲嘆自督……四六五
第三項　自力誡誨……四六七
第七章　方便開示と入眞勸發……四六九
第一節　三願轉入の自督……四六九
第二節　仰信の自督……四七九
第三編　聖淨二道判と眞僞決判……四八一
第一章　略明……四八一
第一節　聖淨二門を擧げて時機を判ず……四八一
第二節　五說、四依を擧げて眞僞を決す……四八四
第一項　五說……四八四
第二項　四依……四八六
第二章　廣明總標……四九〇

第三章　二道判と時代觀……四九一
第一節　『安樂集』の時代判四文……四九一
第二節　時代勘決……四九九
第一項　正明……四九九
第二項　『末法燈明記』の文……五〇〇
第一科　總說……五〇〇
第二科　正像末を決す……五一〇
第三科　破持僧の事を彰はす（四重問答）……五一七
第一問答（破戒無戒比丘）――第二問答（名字比丘は末世の眞寶）――第三問答（異文通釋）――第四問答（『涅槃經』の制戒に就いて、『涅槃經』第七の文、『同經』第六標擧、『十輪經』の二文。『大集經』等の三の文、『大悲經』の文）――結釋
第四科　擧敎比例……五二四

第四章　眞僞決判と異執誡誨……五五七
第一節　總標……五五八
第二節　經文證……五五八
第一項　『涅槃經』の文……五五八
第二項　『般舟三昧經』の二文……五六二
第三項　『日藏經』の文……五六五
第一科　星宿品の文……五六五
置星分時――四天王配置――未來記
第二科　念佛品の文……五七五
魔女歸佛――魔女說偈――眷屬發心――魔王瞋憂――魔女重偈――魔王怖怖――聞法得益――觀察方執
第三科　護塔品……五八一
魔王歸佛――魔王說偈――魔王重說――世尊印可――魔王生淨心

第四項　『月藏經』の文……五八四
第一科　諸惡鬼神得敬品上の文……五八四
離邪の益
第二科　諸惡鬼神得敬品下の文……五八八
十平等——惡鬼因
第三科　諸天王護持品の一（問答）……五九〇
世尊問——梵王答——空居四天護養——地居四天護養——宿曜天童護
養——四天闍浮別護——梵王請護——佛印可、說偈
第四科　諸天王護持品の二（付囑）……六〇三
告命——四佛付囑——佛梵問答——佛印可——佛敕護養——梵王受
領——佛德讚嘆——世尊重偈
第五科　諸魔得敬信品……六一五
諸魔發願——四佛護法——諸天發願
第六科　提頭賴吒天王護持品……六一八

佛敕護持——諸天受領
第七科　忍辱品二文……六三〇
第八科　同品（或云『莊嚴經』の文）……六三四
第五項　『首楞嚴經』の文……六三四
第六項　『灌頂經』の文……六三七
第七項　『十輪經』の文……六三八
第八項　『集一切福德三昧經』の文……六四〇
第九項　『藥師經』の文……六四〇
第十項　『菩薩戒經』の文……六四三
第十一項　『佛本行集經』の文……六四五
第三節　論文證……六四八
第一項　『起信論』の文……六四八

第四節　釋文證……六五三
第一項　『辨正論』……六五三
第一科　總標……六五四
第二科　十喩篇第五……六五五
一異一喩——四異四喩——六異六喩——七異七喩
第三科　十喩篇第五殘文……六七〇
標章——第一異喩——第三喩——第十異喩
第四科　九箴篇第六……六八三
周世無機——像塔建造（外論の末細註文內箴文）——內敎爲治本
第五科　氣爲道本第七……六九六
第六科　出道僞謬篇第十……六九七
第七科　歸心有地篇第十二……七〇〇
第二項　『法事讚』の文……七〇三
第三項　『法界次第』の文……七〇四
第四項　『往生畧傳』の文……七〇六
第五項　『四敎儀』の文……七〇七
第六項　『四敎儀集解』の文……七〇八
第七項　『孟蘭盆經新記』の文……七一〇
第八項　『觀經扶新論』の文……七一一
第九項　『往生要集』の文……七一三
第五節　外典……七一四
第一項　『論語』……七一四
第四編　流通分……七一七
第一章　黑谷障難……七一七
第一節　緇素昏迷……七一七

第二節　師弟障難……七一九
第三節　空師の歸洛入滅……七二
第二章　聖人の入宗と稟教……七三
第一節　入宗稟教……七三
第二節　本典製作の因由……七七

『眞佛土卷』の組織

- 諸文引證
  - 論文—『淨土論』文
  - 曇鸞大師釋文
    - 『論註』文
    - 『讚阿彌陀偈文』
      - 清淨功德文
      - 性功德文
      - 大義門功德文
      - 不思議力釋
      - 自利々他釋
      - 不虛作住持釋
  - 釋文
    - 善導大師釋文
      - 『玄義分文』
      - 『序分義文』
      - 『定善義文』
      - 『法事讚文』
    - 憬興師釋
- 結釋
  - 眞實報土結釋
    - 正明
      - 引證—『起信論』文
      - 總明報土
    - 得證辨
    - 別解釋
      - 標擧
      - 眞實釋
        - 因
        - 果
          - 眞佛
          - 眞土
          - 往生
      - 解釋
        - 化土釋
  - 眞假分別
  - 結釋勸信

教行信證講義卷三

山邊習學
赤沼智善 共著

序講

第一章　眞佛土卷來由

一。親鸞聖人は、その畢生の心血をしぼり、その高潮の信仰を吐き盡して『敎行信證』六軸を製作なされた。『敎行信證』は、古來の佛敎に一時期を劃すると共に、永遠に亘りて變るとない生の宗敎を樹立し給うたものである。人間のあらゆる粉裝を脫却し放下せしめて、赤裸々の生そのものに返して、この上に溢るゝ許りの法悅と歡喜とを得せしめ給ふのが、我が親鸞聖人の宗敎であり、永遠に變るとなき生の宗敎である。

親鸞聖人が、『眞敎眞宗是也』と仰せられ、敎といふは本願圓頓一乘の敎のみであると

絶對的判釋を以て仰せられるやうに、古來宗教は一である。少なくとも、その本質に於て一である、一であるべき筈である。我々は平常、大抵、自分の粉裝に欺かれて、自己の本眞を見得ないと共に、往々にして宗教の粉裝に欺かれて、宗教の本眞を見失ふのである。親鸞聖人御出生當時は、所謂この外部の粉裝に欺かれて、宗教の本眞を見失うた時である聖人は、自己の本眞を掴むと共に、宗教の本眞を掴まれた。而して、これをその儘眞教眞宗これ也と宣傳なされたのである。

二。教行信證四法の綱格のことについては、已に第一卷に詳述した通りである。今茲に更に語を加へる必要は見ないが、一寸側面的に觀察すると、次の樣にいへるのである。而して往々この側面的觀察に、實際の眞理が握られることが多いのである。

教といふは、我々の粉裝を脫して、永遠の本眞に歸さしめやうといふ教主の慈悲である行といふは、その教に依つて詮顯された永遠の本眞・本體である。

信は、「自然に歸つた時に宗教がある」といふ西哲の語のやうに、教主に依つて、一切の粉裝を脫却せしめられた時に、赤裸々の生に湧く他力自然の確信である。力である。

證は、その本眞に歸つたものゝみの上に顯はるゝ永遠の神秘である。

この見方は、餘りに大體な大掴みな觀察であるが、自己及び世界を極端に單純化せられた我が永生の聖人には最も相應しい觀察ではなからうかと思ふ。『優波尼殺土』にこういふ語がある。「世界を複雜に見る人は滅亡に行く人である」。ところが、あらゆる人は、世界を悉く混沌としたものと見てゐる。山川草木蟲魚雜然としてゐて何等の統一のないものに考へてゐる。天體の運行に音樂をきく耳は持たない。それだからして、その因として、又その果として、精神の統一もなく、自己はいくつにも分裂して、みじめな生活をしてゐるのである。信とは雜多の中に統一を見出すことである。天體の運行に諧調の音樂をきゝ、無邊に廣い大地の中に、一貫した全一を見出すことである。我が親鸞聖人は、佛凡一體、機法一體といふ極端な單純化を身證體現なされた方である。

三。教行信證の四法は、かく宇宙を單化し靈化（單純化は靈化でなければならない。靈の眼のない人は、到底單化をなし得るものではない。）した親鸞聖人の四法である。それだから、聖人の四法は、語據語例が前にいふやうに昔の人の上にあるにもせよ、餘程異なつた一點から、見得る眼がなくては、到底その眞髓を掴めるものではない。

それで、教行信證の四法は、極端な單純化を成し遂げ得られた我が聖人の靈の終始で

ある。同時に、我等生あるもの一切の靈の終始である。我等は宇宙一切に磅礴する敎命に耳傾けねばならぬ、而してその敎命に詮顯された大法界の本源を了會し、その本源と我等の生の一體を身證せねばならぬ、證はその身證者體現者の靈の生活である。その生活の表現である。『敎行信證』六軸の前四卷『證卷』までを熟讀なされた方は、這般の意味を充分に會得して下されたことゝ思ふ。

四。 かくの如く『敎行信證』前四卷を見來る時には、これからの『眞佛土卷』、『化眞土卷』の來由が明かに知れて來やうと思ふ。

古來、『眞佛土卷』は、『證卷』から開出せられたもの、『化身土卷』も同じく『證卷』から流出したもの、『眞佛土卷』は、『證卷』から開出せられて、上に向つては、上來前四卷が能歸の機に約して、衆生往生の因果を明したるに對し、所歸の身土を示し、下『化身土卷』に對しては要弘對、眞弘對を以て、眞化の義を詮明し給うたものとしてゐる。この中にも、細かい點に至つては隨分種々の異論があるが大抵はこういふことになつてゐる。

今この『眞佛土卷』に就いて、上來の四卷が能歸の機に約し、本卷が所歸の眞土を明すといふは、『六要鈔』主の指南であつて、正當な分科であると思ふ。『樹心錄』では語を換へて、上來所化の始終を明し、この卷は能化の身土を明すというてゐる。

五。 『身佛土卷』が『證卷』から開出せられたことゝはいふまでもない。衆生の所證は畢竟能化者の所證であつて、衆生の所證を說き畢つて、その體を一にする能化者の所證を說明するといふは最も自然であるからである。弘願一乘敎の妙味は玆に存してゐるのである。けれども、『眞佛土卷』を以て、只『證卷』から開出されたものとして、それで片付けて置くことは、少しく義を盡さないやうに思ふ。私共が『敎行信證』前四卷を知れば、『眞佛土卷』の來由も自ら知れるといふたのは玆のことである。私共は、『眞佛土卷』を『行卷』に關係せしめて見たいのである。

行とは何か、南無阿彌陀佛である。南無阿彌陀佛は何か。これを以て單に彌陀如來の名號と見るは未だ義を得ない。名體不二の南無阿彌陀佛は、その儘法界の本源本眞である。我等の所歸歸信である。彌陀如來と南無阿彌陀佛と義を分けていへば、體と名號であるが我々の上に頂いた南無阿彌陀佛は力である。壽である。この力と壽を認めた上から名體不二といふ靈感があるのである。南無阿彌陀佛に力と壽とを認めない人は、南無阿彌陀佛を殺してゐる人である。もしさうだとすれば、信者の主觀的靈與の上には、一南無阿彌陀佛

が、大法界の本源本眞となるのである。

扨て『眞佛土卷』は、所歸の眞土を明してある。佛は不可思議光如來、土は無量光明土が當卷の書出しである。不可思議光如來といふは、體である。法界の本源本眞である。してみると、『眞佛土卷』と『行卷』とは餘程密接の關係を持つて來るのである。古來この兩卷の關係に就いて餘り研究せられてないのは、遺憾の至りである。

私共から見ると、『行卷』は本眞本體の動的發動を說き明されたもの、『眞佛土卷』は、その本眞本體の靜的方面を述べられたものと思ふ。「我が彌陀は名を以て物を攝す」。體は發動して名となつた、名は空名でなくて、力である。一切衆生を攝取し包容する力である。この本體の發動方面、力としての名號は說明され讚嘆し盡された、今玆には改めて、その我等所歸の本體を靜的に見て讚嘆なさらうとするのである。『佛者卽是不可思議光如來、土者亦是無量光明土也。』所歸の身土を並べ明して、力の發動する原由を究盡し、讚嘆せられるのである。

六。『化身土卷』のことは、これまでの所說に對照して見ると、明かに知れて來るのであるが、そのことは、下に至つて述べることとする。

眞佛土卷の標意

本講

第一編　眞佛土（眞佛土卷）

第一章　解題

第一節　題號と選號

顯淨土眞佛土文類五　愚禿釋親鸞集

【講義】　淨土眞宗の眞佛土を顯はす文類。

【字解】　一。愚禿釋親鸞。親鸞聖人自選の號。本願の實機を示すと、もに、自ら慚愧の自書を表し給ふ。本書第一卷（一五一頁）第二卷（二十五頁）詳述。

【餘義】　一。玆には『眞佛土卷』といふである、もしこれを上四卷『眞實何々卷』とあるに對すれば、『眞實佛土卷』と標すべきであり、次の『方便化身土卷』に對すれば『眞實眞佛土卷』と標すべきであらうと思はれる。然るに單に『眞佛土卷』と標するは、卷名相望の

上に不備の點があるではないか。

この疑難は一應成程と思はれるが『敎行信證』六軸を互に相對せしめて、その位置を知る時には、聖人が、單に『眞佛土卷』となされたところに、一字をも苟もなさらない面影が偲ばれるのである。何故ならば、前四卷に『眞實何々卷』とあるは、要門眞門の淨土の方便を簡ぶので、『方便化身土卷』の方便に對するのである。今當卷の『眞佛土卷』は正しく『化身土卷』に對して、化身土を簡ぶのである。『方便化身土卷』からいへば、方便を以て前四卷に對し、化を以て『眞佛土卷』に對するのである。

眞實（前四卷）……方便
眞（佛土卷）……化（身土卷）

二。次に、もしこの題號が次卷の化身土に對するとすれば、語をそろへる上からは『眞身土』と標する方が妥當でなからうか。『化卷』には化身土といひ、當卷には眞佛土といふは何等の意味があるのであらうか。

佛、身二字の使ひわけには、何等の意味があるのではない。これが所謂影略互顯と稱するもので、互に通ずる意味を持てゐるのである。只用語上、佛土と稱する方が、比較的依正不二の義が顯はれ易く、身土と稱する時は、依正差別の義が勝るから、眞佛眞土を說く『當卷』に佛の字を用ひ、化佛化土を說く『化卷』に身の字を用ひたのである。

第二章　標　擧

【大意】『眞佛土卷』全體に亘りて說き明すべき光壽二無量の願を標し給ふ。この十二字、『御草本』、『御眞本』、『高田本』ともに、本文標題の前、表紙の裏にあり。

光明無量之願　壽命無量之願

【字解】一。光明無量之願『大無量壽經』に說かれたる四十八願中の第十二願。得勝光明願。又は佛光無邊願と名けらる。如來の智慧光の無量なることを誓うた願である。

二。壽命無量之願『大無量壽經』に說かれたる四十八願中の第十三願。得壽久住願、又は佛壽無量願と名けらる。如來の壽命の無量なることを誓うた願である。光明は用、壽命は體、卽ち佛身の無量の諸德をこの體用の二つに總括して明し玉ふものである。

眞佛眞土の關係

【文科】『眞佛土卷』全部に說き明す本尊の體用を標擧する一段。

【講義】この一卷に明す所の佛身は、この十二、十三の二願によりて成就せられたるものに外ならぬ、卽ち上四卷の綱格に從ひてこの二願を標擧し給ふ。眞佛土の如來は其體壽命無量にして竪に三世を貫き。其用は光明無量にして橫に十方の衆生を攝化し給ふと測りなし。眞報身の彌陀如來の勝德は限りなけれども、この光壽の二德をあぐれば、他の德相は盡く是に收め盡されるのである。

【餘義】一。今茲に十二、十三の兩願が擧げてある。兩願は、攝法身、攝淨土、攝衆生の三を以て四十八願を類聚する時の攝法身の願に收まるものである。而してこの『眞佛土卷』は、その名にも示されてある通り、眞佛眞土の兩方を說くものである。然らば何故、攝法身の願だけ標擧して、攝淨土の願を標擧しないのであらうか。

四十八願中、攝淨土の願といふと、三十一の國土徹照の願と、三十二の國土嚴飾の願である。この兩願は、眞報土の一相を顯はしてあるだけで、廣大究竟の報土の眞相を說き盡すものではない。それで限られた一相を示す兩願を標擧するよりは、佛身を擧げて、その佛身のみ給ふ淨土は佛身に準じて知るべきものとなし給うたのである。依正はもとより不二であるから、正報の佛身を示せば、依報の土は自然に其處に顯はさるゝのである。「佛者則是不可思議光如來、土者亦是無量光明土也、」不可思議光如來の御座所は無量光明土であるといふが我が聖人の顯はし方である。それ故に『眞佛土卷』に於て、證成の經文を出し給ふに就ても、佛身の證文を多く出して、佛土の證文は『平等覺經』の「無量光明土」の

文がある丈けである。化土は差別の相が明かであるから、この差別限局の相を示さんために、『化身土卷』に於ては、化土の證文を多く出して、佛身の證文は「眞身觀佛是也」とある丈けである。この顯し方の相違に依つても、眞佛眞土と化佛化土の差別を明かに看取することが出來るのである。

右の理由に依つて、今聖人は、攝法身の二願を標擧して、攝淨土の願を出し給はなんだのである。

第七願不擧の理由

二。次に、攝法身の願といふは、第十二の光明無量願、第十三の壽命無量願、第十七の名號成就の願である。今この三願の中、第十二と第十三とを出して、第十七願を出し給はぬはいかなる理由かといふに、第十七願は勿論攝法身の願には相違ないけれども、その特殊の任務は名號成就であつて、名號は行に攝屬するものであるから、今茲に標出しないのである。

光壽二德に就いて

三。扨て茲に問題の起つて來るのは、光明と壽命といふことについてゞある。阿彌陀佛に於て殊に著しい特長であるが、佛陀といふはあらゆる德をすべて具へ給うた方であるのに、いつも、特にこの光明と壽命の二德を擧げて貰くのは何故であらうか。源へ還つていへば、彌陀如來は攝法身の願に於て何故にこの光明壽命の二無量を特別に誓はれたのであらうか。このことについては古來いろ〳〵に說明を下してゐる。一說を出してみると『光融錄』には、下の六義を立てゝ、佛德は無量であつても、光壽二無量の二德で攝め盡して仕舞ふからというてある。

一。二德を大悲の本とする。卽ち二德を以て名を成じ、名を以て物を攝する。

二。壽命は法身常住の體、光は佛智現照の用。

三。壽命は福報、光明は智果。

四。壽命は竪に三際を利し、光明は橫に十方を益する。

五。衆生の所欲に適するため、卽ち衆生はたゝ長壽と明智とを欲するから。

六。現在に光照を蒙むり、當來に長壽を得る。

義の擧げ方や、その數に相違はあるが、要するに光壽無量の二德を以て、一切の德を攝めることが出來るからといふには、諸說すべて一致してゐる。さうして更にこれを約めて、最も適切にいへば、宗敎的であるからといふことになる。あらゆる宗敎は衆生の要求を根本とする、大悲の働きかけて下さるのは、その衆生の要求をめがけてゞある。本願の光壽

二無量の成就は、衆生の要求の具體化である。複雜な我々の本能的要求を單純化して見れば、生命と明るさである、我々の宗教的であるといふことは、この複雜な我々の本能的要求を單純化することが出來るといふことである。卽ち根柢的な要求を突きつめることが出來るといふことである。さうしてその單純化された根柢的な要求は、生きたいといふことと明みへ出たいといふことである、この根柢的な要求に應へて顯はれ給うたのが、本願の光明壽命の二無量である。『和讃』に、「光明壽命の誓願を、大悲の本としたまへり」とあるは、親鸞聖人が、この衆生の要求の機微を捕へ給うた偉大な宗教的天才であることを示してゐるのである。してみれば、彌陀如來の攝法身は衆生の根本的要求に應ずべきこの光壽二無量の成就であることはいふまでもないことである。今玆にこの二無量の兩願を標舉し給うたのは最も當を得、しかあるべきことゝ云はねばならぬ。

末燈鈔の本尊觀との關係

四。 所が更に問題が起つて來る、それは外ではないが、親鸞聖人は『唯信鈔文意』『十八願』に

この誓願のなかに、光明無量の本願、壽命無量の弘誓をあらはしたまへる御かたちを世親菩薩は尋十方無碍光如來となづけたてまつりたまへり。この如來すなはち誓願の業因にむくひたまひて、報身如來とまうすなり。

と宣ひ、『末燈鈔』『六』には

第十八の本願成就のゆゑに、阿彌陀如來とならせ給ひて、不可思議の利益きはまりましまさぬ御かたちを天親菩薩は盡十方無礙光如來とあらはしたまへり。

と宣うてある。『唯信鈔文意』の文は、今この『眞佛土卷』の二願標擧の義意と同じいが、『末燈鈔』にはこれに反して、第十八願に依つて覺體成就をいうてある。この相違をいかに會するかといふ問題である。これについて『樹心錄』は體用を以て會し

佛は本、光壽二德を以て名となし、名を以て物を攝す。故に光壽兩願を以て體となす。念佛往生の願を用となす。體用一源、唯是れ大悲、各一義に據つて光壽相違せず、

といひ、皆往院師は自利利他を以て會し、

『當卷』、『唯信鈔文意』は攝法身の義にして先づは佛の自利門に約し、『末燈鈔』は攝衆生の義に約す、これ佛の利他門に當れり、所詮佛は自利々他成就する二利滿足の彌陀なり。然れば義門の差別にして格別の異義にあらず。

というてゐられる。私共から見ても、この邊の處かと思うが、一言加へていへば、覺體成就の側からいへば、十二十三兩願成就して彌陀如來となり給うたといふべきであり、し

かも彌陀如來の彌陀如來たるは、一切衆生攝取にあるから、この側からいへば、十八願成就のゆゑに彌陀とならせ給うたと云はねばならぬと思ふ。しかも、覺體の成就は、その儘發動して衆生引攝となるのであり、衆生引攝の力の源は覺體成就にあるのであるから、この邊のことはわけてわけられないものと云はねばならぬ。こちらの主觀的の宗教的感情に依つて右をいひ、左を云はねばならぬやうにせしめられるのである。

四。光明と壽命の次第に就ては、體と用といふ方からいへば、壽命が體であつて光明がその用であるから、壽光といふ次第にせねばならぬのであるが、今は宗教的に最も大切な攝化といふことを本とするから、先づ光明を以て照して壽命を與ふるといふ次第で光壽としたものである。今の願文の次第にせよ、『阿彌陀經』の得名段にせよ、皆この攝化の側から次第したものである。

第三章　眞佛土

第一節　略顯

【大意】　是より正しく眞佛土を說示せらる。初めに其大略を述べるがこの一段である。第一項に身土を略標し、第二項に報身報土の報の意義を說き、第三項に願名を標し給ふ。

第一項　身土略標

謹按眞佛土者佛者則是不可思議光如來土者亦是無量光明土也。

【讀方】　謹んで眞佛土を按ずれば、佛ばすなはちこれ不可思議光如來なり。土ばまたこれ無量光明土なり。

【字解】　一。眞佛土　化身土の對。眞佛と眞土の意。即ち眞報身の佛と、その佛のをり給ふ眞實報土を指す。

二。不可思議光如來　阿彌陀佛の異名、下三一頁に引く『如來會』の十五光佛（又一說には十三光佛）の一。『大無量壽經』の十二光にあつれば、雜思光佛と無稱光佛である。

略標の佛身佛土の名義

三。無量光明土　阿彌陀如來の淨土をいふ。下三三頁に引く所の『平等覺經』の文に依る。絶對絶妙の淨土をこの名にて表はし給ふのである。

【文科】吾等の歸依すべき眞實の身土を略標する一段。

【講義】謹んで淨土眞宗に建つる所の眞實の佛土を考へて見まするに、その佛とは吾等凡夫の心も言葉も絶え果てた不可思議光如來にてまします。又その佛の居給ふ土は、限りなき光明の國である。

【餘義】一。先きに本卷の標擧として、光明無量、壽命無量の兩願を出しながら、今この兩標段へ來つて、佛は不可思議光如來、土は無量光明土と、身土共に光明を以て顯はし給うた理由は何であらうか。

このことに就ては、先きにも曰つた樣に、この『敎行信證』六軸が、學問の書や、論議の書と違つて、信仰の書、讃仰の書であることを忘れてはならぬ、信仰の書は、高潮した自己の宗敎的感情を直情に吐露して、其の儘、渾然たる讃仰となるものである。今この「佛者則是不可思議光如來、土者亦是無量光明土」といふも、玆に先づ聖人の燃ゆるが如き宗敎的感情を讀まねばならぬ。聖人は法悅と感激の心榮から、救主の如來に對して、この讃仰の二十字を捧げ奉られたのである。してみると、この廿字については、聖人の法悅と感激の情とを頂かねばならぬのであるが、何故に一方を閑却して、一方だけ云はれたものかと問ひつめるべきものではないのである。何故なら、冷靜な思考の上の語でないから、冷靜な分析的質問は許されない譯であるからである。

すると、先きに提出した質問は撤回せねばならぬことになるが、私共を以てすると、この質問を冷靜な分析的なものとせず、聖人の讃仰がかういふ形式を以て顯はれるに至つた內的の理由を知らうとすることになるのである。

これ丈けの準備を以てすると、この質問はさらりと解けて來る。光明を擧げられたのは大悲攝化の例を重視せられたから。如來の大悲攝化に就いて、殊に法悅と歡喜を有せられたから。それで壽命の德は光明の德に收めて不可思議光如來云々と讃仰せられたのである。この不可思議光如來は下に出て來る、『如來會』に依り、『無量光明土』は同じく下に引かれてゐる『平等覺經』に依られたことは申すまでもない。

二。光明の尊號の中にも、平生用ひ給ふ盡十方無礙光如來と不可思議光如來の二名がある。盡十方無礙光如來は、近く『淨土論』に出でゝ、最も親しいみ名であるのに、何故に

不可思議光如來のみ名を用ひ給ふたか。

この理由としては、どうも徹底して伺はれないが、我が聖人の御心持では、先づ第一には、經文に依つて、眞佛眞土の名を立てるおつもりで、眞佛については『如來會』に依つて不可思議光如來と讃し、眞土については『平等覺經』に依つて無量光明土と讃し給うたものではあるまいか。次には、大谷派の雲澍院神興師が、『化身土卷』に對し、眞身觀所見の數量可思議の佛に對して、眞佛を顯はさんため遮情門に依つて、不可思議光如來と宣うたものと云はれてあるのが尤もとうけがはれる。雲澍院師の考では、十二光佛の中、前十一光は所喩、第十二光は能喩であり、所喩の中、前九光は表德にて、十の難思光と十一の無稱光は遮情である。而してこの難思光は『如來會』に於ては不可思議光である。それで今、表德門の盡十方無礙光如來を用ひず、遮情門の不可思議光如來を以て、眞佛を讃嘆なされたといふのである。

第二項　報の意義

然則酬報大悲誓願故曰眞報佛土

【讀方】　然ればすなはち大悲の誓願に酬報す。かるがゆへに眞の報佛土といふ。

【文科】　簡潔に「報」の意義を示して、報佛報土の何たるかを決判し給ふ一段。

【講義】　そして此眞佛眞土は、決して偶然に顯現はれたものではなく、全く如來大悲の因位の誓願に酬報ひ現はれたものである、これは因果の大法に從づて眞實にそして自然に現はれたものであるから眞の果報たる佛土といふのである。

【餘義】　一。「大悲の誓願に酬報するが故に、眞の報佛土と曰ふ。」大悲の誓願といふは、茲では無論十二十三の兩願を指してゐるのである。四十八願の中に攝淨土の願があるのに攝法身の願たる光壽二無量の兩願に依つて眞の報土を酬報したといふことは、少しく理を外れてゐるやうであるが、このことは既に前に說明した通りである。

大悲願に就いて

一體報身報土の酬報を談ずるについては、四十八願についていふと、十八願についていふと、十二十三の兩願についていふとの三種がある。このことについても前一五頁に少しく述べてあるが、場所の上からいひ盡さない所があるから茲に補つて置くのである。

此の三種の莊嚴成就は、本と四十八願等の淸淨願心の莊嚴せる所なるに依つて、因淨なるが故に果淨なり……『論註』下二十三丁

此は彌陀の本國四十八願なることを明す。願々皆增上の勝因を發す。因に依つて勝行を起す。行に依つて勝果を感ず。果に依つて勝報を感成す。報に依つて極樂を感成す。

『序分義』二十六丁

四十八願の莊嚴して起すところ、諸佛の刹に超えて、最も勝となす。……『法事讃』

以上の三文は明かに四十八願全體から報身報土を酬報するといふことを示してゐるものである。我が聖人はこれを受けて、『眞佛土卷』の終りに、「夫れ報を案ずれば、如來の願海に由つて果成の土を酬報し給へり」と宣ひ、『帖外和讃』には更に明に、「四十八願成就して正覺の阿彌陀となりたまふ」と記されたのである。然しこの四十八願酬報といふは、所謂總論で、我が聖人は、身土に眞化を分ち、四十八願にも、眞實方便とわけて別論し給ふのである。それで『眞佛土卷』の前文に引きつゞいて、「佛土に就いて眞あり假あり、選擇本願の正因に依つて、眞佛土を成就せり」と宣うたのである。四十八願酬報は總論である。十八願酬報、十二十三兩願酬報は別論である。十八願酬報、十二十三兩願酬報については前一五、一六頁に云つてある。

二。大悲願といふについては、本書第一卷二百九十二頁に詳說して置いたが、如來の大悲心から流れ出でた本願といふ義であるから、總じては四十八願を指し、別しては第十七願を指す願名である。今茲に大悲願と云はれたのは、所謂言總意別で、十二、十三の兩願は、もとより光明壽命の攝法身の願ではあるけれども、彌陀の成佛は衆生の救濟のためで、攝法身そのまゝが大悲、自利そのまゝが利他であるから大悲誓願と宣うたものである語の使ひ方からいへば、攝法身の願に酬報するが故にとあつた方が却つて適切であり至當である樣に思はれるが、特に「大悲の誓願に酬報するが故に眞の報佛土といふ」と云はれたところに、一段の宗敎的妙味を味はれるのである。この一句に依つて、彌陀の成佛、彌陀の存在が、根柢的に、衆生救濟のためであることが知られるのである。

第三項　十二、十三願名

既而有願卽光明壽命之願是也

【讀方】すでにして願います。すなはち光明壽命の願これなり。

【文科】光壽の二願を標示して、報佛報土の根源を顯はす一段。

【講義】卽ち既にこの果報を生むべき本願がまします。夫は四十八願中の第十二光明無

量の願、第十三壽命無量の願がこれである。

第二節　經文證

【大意】　上に眞佛土の要義を略標し了つたから、以下經釋の文を引いて、眞佛土を證明し讃嘆せらる。

以下『大經』及び其異譯、『不空羂索經』を引き、終りに『涅槃經』を廣引して眞佛土の內面を表現し給ふ。

第一項　『大無量壽經』の文

第一科　本願文

大經言、設我得佛、光明有能限量、下至不照百千億那由他諸佛、國者不取正覺、又願言、設我得佛、壽命有能限量、下至百千億那由他劫者不取正覺。

【讀方】　大經にのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、光明よく限量ありて、しも百千億那由他の諸佛の國を照さゞるにいたらば、正覺をとらじと。また願にのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、壽命よく限量ありて、しも百千億那由他劫にいたらば、正覺をとらじと。

【文科】　初めに正依の願文を引いて眞佛土を證し給ふ。

【字解】　一。那由他　印度の數名。梵音ナユタ(Nayuta)。萬億、千億、又は數千萬等と譯す。

【講義】　大無量壽經の第十二願に宣給はく、

設我れ佛となるであらう時、その威神光明に限量があつて、下百千億萬、あらゆる諸佛國を照すことが出來ないならば、決して正覺を開かぬであらう。

更に第十三願に宣給はく、

設我れ佛となるであらう時、その壽命に限量があつて、爾後、百千億萬劫にして終るやうならば、正覺を開かぬであらう。

第二科　成就文

願成就文言、佛告阿難、無量壽佛、威神光明最尊第一、諸佛光明所不能及、乃至是故無量壽佛號無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、無稱王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思

光佛無稱光佛超日月光佛。其有衆生遇斯光者。三垢消滅身意柔輭歡喜踊躍善心生焉若在三塗勤苦之處見此光明皆得休息無復苦惱壽終之後皆蒙解脫無量壽佛光明顯赫照耀十方諸佛國土莫不聞焉不但我今稱其光明一切諸佛聲聞緣覺諸菩薩衆咸共嘆譽亦復如是若有衆生聞其光明威神功德日夜稱說至心不斷隨意所願得生其國爲諸菩薩聲聞大衆所共嘆譽稱其功德至其然後得佛道時普爲十方諸佛菩薩嘆其光明亦如今也佛言我說無量壽佛光明威神巍巍殊妙晝夜一劫尚未能盡佛語阿難無量壽佛壽命長久不可勝計汝寧知乎假使十方世界無量衆生皆得人身悉令成就聲聞緣覺都共集會禪思一心竭其智力於百千萬劫悉共推算計其壽命長遠之數不能窮盡知其限極抄出

【讃方】願成就の文にのたまはく、佛、阿難につげたまはく、無量壽佛の威神光明、最尊第一にして、諸佛の光明の及ぶことあたはざるところなり。乃至このゆへに無量壽佛なり、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號す。それ衆生ありてこの光にまうあふものは、三垢消滅し、身意柔輭なり。歡喜踊躍して善心こゝに生ず。もし三塗勤苦のところにありても、この光明をみれば、みな休息をえてまた苦惱なし命終での後にみな解脫をかうふる、無量壽佛は光明顯赫にして十方を照耀す。諸佛の國土にきこえざることなし。但我いまその光明を稱するのみにあらず。一切の諸佛聲聞緣覺、もろ〳〵の菩薩衆、こと〴〵くともに、嘆譽するこまたかくのごとし。もし衆生ありてその光明の威神功德をきゝて、日夜に稱說して至心不斷なれば、こゝろの所願にしたがひて、その國に生ずることをえて、もろ〳〵の菩薩聲聞大衆のためにともに、嘆譽し、その功德を稱せられん。それ而うしてのち、佛道をうる時にいたりて、あまねく十方諸佛菩薩のためにその光明を歎られんこと、また今のごとくならん。佛のたまはく、われ無量壽佛の光明威神巍巍殊妙なるを說くこと、晝夜一劫すともなほ未つくすことあたはじと。佛、阿難にかたりたまはく、無量壽佛は壽命長久にして勝計すべからず。汝むしろ知れりや、たとひ十方世界の無量の衆生、みな人身をえて、ことごとく聲聞緣覺を成就せしめて、都ともに集會し、思をもはらにし、心を一にして、その智力をつくして、百千萬劫において、ことゝくくともに推算して、その壽命長遠の數をはからんに、窮盡してその限極を知ることあたはじと。抄

【字解】一。三垢　三毒のこと。貪欲、瞋恚、愚痴の煩惱のこと。

二。聲聞　二乘、三乘、五乘の一。梵語シュラーヴカ（Śrāvaka）の譯。佛の教への聲を聞いて證る人といふ

意。四諦の理を觀じて現身に證りを獲、又は三生六十劫の修行を經て阿羅漢を證する聖者をいふ。

三。緣覺　二乘、三乘、五乘の一。梵語プラトエーカ、ブッドハ(Pratyeka-Buddha)の譯。獨覺、又因緣覺ともいふ。師によらずして、飛花落葉等を觀じて證を開くから獨覺といひ、又十二因緣を觀じて證を開くから緣覺といふのである。これに二類あり、一は、初めに部衆と雜り住する聲聞で第四果を得るときに獨證するもので、是を部行獨覺といふ。二は初めから無師獨悟するもので、是を麟角喩獨角といふ。ともに四生(極速)又は百劫(極遲)にして證果を得。

四。菩薩　菩提薩埵の略。梵音ボードヒサットヴ(Bodhisattva)、覺有情、大士、大心衆生等と譯せらる。菩提は覺、薩埵は有情である。三乘、五乘の一。大心を發して佛道に入りたる人をいふ。卽ち四弘誓願を發し、六度の行を修め、上菩提を求め、下衆生を化す。五十一位、三祇百大劫の修行を經て、佛果を證る。これに頓悟、漸悟の差別がある。

五。劫　梵音カルパ(Kalpa)。劫波、劫簸、羯臘波ともいふ。非常に長い時間のこと。方高四十里の城に芥子粒を滿し、三年毎に一粒を取りて、遂に取り盡すに至る間を一劫とす。是を芥子劫といふ。又方高四十里の石を、天人が三年に一度、重さ三銖の天衣をもつて拂拭し盡す間を一劫とす。是を拂石劫といふ。

以上の劫は小劫である。中劫は方高八十里、大劫は百二十里の城と石をもつて比擬せらる。

又、人壽八萬四千歲の時より、百年毎に一歲を減じて、人壽十歲に至り、更に百年毎に一歲を增して人壽八萬四千歲の時に至る。この一增一減の間を一小劫といひ、二十小劫を一中劫、四中劫を一大劫と名ける。

【文科】　十二、十三願成就文を引いて光壽無量の佛身を證し給ふ。

【講義】　大經願成就の文に言く。

佛、阿難尊者に仰せらるゝやう、阿難よ、無量壽佛の威神光明は、尊嚴なること第一に位して、如何なる諸佛の光明も能く及ぶ所ではない。乃至、それであるから無量壽佛を ば無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、燄王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號け奉る。

もし此光明に逢ひ奉る者あらば、貪瞋痴、三毒の垢は朝日に溶ける霜のやうに消え失せ煩惱のために硬つた身體も意も柔軟となる。靈の歡喜びに心踊躍りて、眞實の善き心は自と生れてくる、よしや又三途(三惡道)の限りない苦しみの底にありても、一度この光明に逢ひ奉るならば、皆な大悲の隱家に憩ひ休むことが出來て、復の苦惱みはないであらう。その處の壽終へての後は、皆な苦しみから解脫ることが出來る。

かやうに無量壽佛の光明は、太陽の如く朗かに赫いて、十方の諸佛の國々を照耀して行き亙らぬ處なく、その名の聞えざる處はない。但この土の佛たる私丈がかの御佛の光明を稱讚するばかりでなく、一切の諸佛、一切の聲聞、緣覺、又は一切の諸菩薩も、咸な聲

を揃へて嘆稱することは、私と異ることはない。

故に若し衆生ありて、その光明、威神、功德利益の廣大なるを聞いて、夜も日も隔てなく其功德を稱讚し奉り、心を一つにして止むことなければ、心の所願通りに無量壽國に生れることが出來る。卽ち佛道を開いた後に、諸の菩薩、聲聞等の大衆をはじめ、普く十方の諸佛達の爲めに、その光明功德を稱讚せらるゝこと、今無量壽佛の讚嘆せらるゝやうである。

佛、重ねて仰せらるゝやう、

我、無量壽佛の光明威神の巍々として高山に聳えるやうな殊妙德を說示さんとするならば晝夜の分ちなく一劫の時を盡しても、その全分を說くことは出來ぬであらう。

佛、阿難に語り給ふやう。

阿難よ、無量壽佛の光明の威德は上に述べたやうであるが、その壽命も亦長久にして、あげて計へることは出來ない。阿難よ、知らずや、よしや十方世界の限りない衆生が、皆な人間と生れて、悉く聲聞緣覺の智慧を得、そして皆なが一つに集りて、思を禪かにし、心を一つにして、其あらん限り、智力を盡して、百千萬劫の長い間、理を推し、數を數へて無量壽佛の長遠なる壽命を測り奉つても、到底その限極を窮め盡すことは出來ないのである。

第二項『如來會』の文

無量壽如來會言、阿難以是義故無量壽佛復有異名謂無量光
無邊光無著光無礙光光照王端嚴光愛光喜光可觀光不思議
光無等光不可稱量光映蔽日光映蔽月光掩奪日月光彼之光
明淸淨廣大普令衆生身心悅樂復令一切餘佛刹中天龍夜叉
阿修羅等皆得歡悅已上

【讀方】无量壽如來會にのたまはく、阿難この義をもてのゆへに、无量壽佛はまた異名まします。いはく无量光、无邊光、无著光、无礙光、光照王、端嚴光、愛光、喜光、可觀光、不思議光、无等光、不可稱量光、映蔽日光、映蔽月光、掩奪日月光なり。かの光明、淸淨廣大にしてあまねく、衆生をして身心悅樂せしむ。また一切餘の佛刹中の天、龍、夜叉、阿修羅等みな歡悅をえしむと已上。

【字解】一。『無量壽如來會』　『大無量壽經』の異譯。唐の菩提流支の譯。『大寶積經』四十九會百二十

教行信證講義

卷中の第五會に收められて其十七卷、十八卷となつてゐる。（第一卷）一九一頁、大經異譯對顯なみよ）

二。天　八部衆の一。梵天、帝釋、四天王等の天部の總稱。

三。龍　八部衆の一。龍神及び其眷族の總稱。難陀龍王、跋難陀龍王等を指す。

四。夜叉　八部衆の一。梵音ヤクシャ（Yakṣa）藥叉閱叉と音譯す。勇健、暴惡等と譯す。能く虛空を飛行する故に捷疾鬼とも稱せらる。天夜叉、虛空夜叉、地夜叉の三種あり。地夜叉は飛行することが出來ないといふ。

五。阿修羅　梵音アスラ（Asura）。阿素羅、阿素洛、阿須倫と音譯し、略して修羅といふ。非天、非類、不端正と譯す。十界、六道の一。常に三十三天と戰ふと『長阿含經』に見ゆ。

【文科】異譯三文の中第一に『如來會』願成就文を引いて正依を助顯し給ふ。

【講義】『無量壽如來會』に曰く、阿難よ、是の義をもつて無量壽佛に復異名がまします、無量光、無邊光、無著光、無礙光、光照王、端嚴光、愛光、喜光、可觀光、不思議光、無等光、不可稱量光、映蔽日光、映蔽月光、掩奪日月光である。

この佛の光明は清淨にして、廣く大にして一切に行き亙り光りに觸るゝ衆生をして、身も心も悅樂を覺えしめる。復あらゆる餘の佛國中の天、人、龍神、夜叉、阿修羅等をして皆な法の歡悅を得せしむる。

【餘義】一。これより先き『大經』の十二二十三の兩願文、及び成就文を引いて、光明壽命の三無量の義は充分に顯はしてあるが、更に、『大經』の異譯の經典を引いて助顯し給ふのである。異譯の經は、『如來會』と『平等覺經』と『大阿彌陀經』である。

『如來會』を引き給ふのは、いふまでもなく、「佛者則是不可思議光如來」のみ名の出所を示し給ふものである。

『平等覺經』を引き給ふは「土者亦是無量光明土也」の報土の名目の出所を示し給ふものである。

『大阿彌陀經』を引き給ふは、その報身報土が超勝獨妙の眞佛眞土にして、諸佛の身土に超過してゐるといふ相が、該經に充分に示されてゐるから、特に其の經文を引いてその義を顯はし給うたのである。

第三項　『平等覺經』の文

無量清淨平等覺經言速疾超便可ニ到ニ安樂國之世界ニ至ニ無量光明土ニ供ニ養於無數佛ニ上已

【讀方】无量清淨平等覺經にのたまはく。（帛延譯）。速疾にこえて、すなはち安樂國の世界にいたる

べし。無量光明土にいたりて、无數の佛を供養すと。已上

【文科】　吳譯助顯の第二、『平等覺經』の文

【講義】『無量清淨平等覺經』(帛延譯)に言く、長い修行の時間も要せず、速疾に惡道を超越えて、光明世界たる安樂國に到ることが出來る、卽ち無量光明の國に至りて、數限りない諸佛を供養し奉るのである。

第四項　『大阿彌陀經』の文

佛說諸佛阿彌陀三那三佛薩樓佛檀過度人道經支謙譯言、佛言、阿彌陀佛、光明最尊第一、無比諸佛、光明皆所不及也八方上下無央數諸佛中有佛頂中、光明照二七丈有佛頂中、光明照二一里乃至有佛頂中、光明照二百萬佛國、佛言、諸八方上下無央數、佛頂中、光明、所焰照皆如是也阿彌陀佛、頂中、光明、所焰照千萬佛國所以諸佛、光明、所照有近遠者何本其前世、宿命求道、爲菩薩時所願、功德各自有大小至其然後作佛時各自得之是故令光明

轉不同等諸佛、威神同等耳自在意、所欲作爲不豫計阿彌陀佛、光明、所照最大諸佛、光明皆所不能及也佛稱譽阿彌陀佛、光明、極善阿彌陀佛、光明極善善中、明好甚快無比絕殊無極也阿彌陀佛、光明、清潔無瑕穢無缺減也阿彌陀佛、光明、殊好勝於日月之明百千億萬倍諸佛、光明、中之極明也光明、中之極好也光明、中之極雄傑也光明、中之快善也諸佛、中之王也光明、中之極尊也光明、中之最明無極也炎照諸無數天下、幽冥之處皆常大明諸有、人民蜎飛蠕動之類莫不見阿彌陀佛、光明也見者莫不慈心歡喜者世間諸有、嬈泆瞋怒愚癡、者見阿彌陀佛、光明、莫不作善、也諸、在泥犁禽獸薛荔、考掠勤苦之處見阿彌陀佛、光明至皆休止不復治死後莫不得解脫憂苦者也阿彌陀佛、光明名聞八方上下無窮無極無央數、諸佛、國諸天人民莫不聞知聞知者莫不度脫也佛、言、不獨我稱譽阿彌陀佛、光明也八方上下無央數、佛辟支佛菩薩阿羅漢所稱譽皆如是佛言其有人民善男子善

女人聞二阿彌陀佛一聲一稱二譽光明一朝暮常稱二譽其光明一好一至レ心不二斷
絶一在二心所願一往二生阿彌陀佛國一上已

【讀方】『佛說諸佛阿彌陀三那三佛薩樓佛檀過度人道經』。（支謙譯）にのたまはく、佛のたまはく、阿彌陀佛の光明最尊第一にしてならびなし。諸佛の光明みな及ばざるところなり。八方上下无央數の諸佛のなかに、佛の頂中の光明七丈を照すあり。佛の頂中の光明一里をてらすあり乃至佛の頂中の光明二百萬佛國をてらすあり。佛のたまはく、もろ〳〵の八方上下无央數の佛の頂中の光明、炎照するところ皆かくのごとし。阿彌陀佛の頂中の光明の炎照するところに、近遠あるゆへは何んとなれば、もとそれ前世の宿命に道をもとめて菩薩たりしとき、所願の功德おの〳〵おのづから大小あり。其しかうしてのち作佛するときに至りて、おの〳〵みづからこれを得たり。このゆへに光明うたゝ同等ならざらしむ。諸佛の威神同等なるならくのみ。自在のこゝろの所欲、作爲して豫めばからず。阿彌陀佛の光明の照すところ最大なり。諸佛の光明みな及ぶこと能はざるところなり。佛、阿彌陀佛の光明の極善なることを稱譽したまふ。阿彌陀佛の光明は、極善にして善のなかの明好なり。それ快ことならびなし。絶称無極なり。阿彌陀佛の光明は清潔にして瑕穢なく缺減なし。阿彌陀佛の光明は、殊好にして日月の明よりも勝れたること百千億萬倍なり。諸佛の光明のなかの極明なり。光明のなかの極好なり。光明のなかの極雄傑なり。光明のなかの快善なり。諸佛のなかの王なり。光明のなかの極尊なり。光明のなかの最明無極なり。もろもろの無數天下の幽冥のところを炎照するに、みなつれに大明なり。諸有の人民、蜎飛、蠕動の類、阿彌陀佛の光明をみざることなし。みたてまつるもの、慈心歡喜せざるものなけん。世間諸有の婬泆、憤怒、愚痴のもの、阿彌陀佛の光明をみたてまつりて善をなさゞるはなし。もろ〳〵の泥犂、獵狩、辟惡、考掠、勤苦のところにありて、阿彌陀佛の光明をみたてまつれば、いたりてみな休止してまた治することをえざれども、死してのち憂苦を解脫することをえざるものはなし。阿彌陀佛の光明と名とは八方、上下、無窮、無極、無央數の諸佛國にきかしめたまふ。諸天人民聞知せざることなし、聞知せんものは度脫せざるはなし、佛のたまはく、獨われのみ阿彌陀佛の光明を稱譽せず、八方、上下、無央數の佛、辟支佛、菩薩、阿羅漢、稱譽する所みなかくのごとし。佛のたまはく、それ人民、善男子、善女人ありて、阿彌陀佛の名をきゝて光明を稱譽して、朝暮につねにその光好を稱譽して、至心斷絶せざれば、心の所願にありて阿彌陀佛國に往生すと。已上

【字解】一。『佛說諸佛阿彌陀三那三佛薩樓佛檀過度人道經』『佛說阿彌陀經』（二卷）の內題である。云はゞこの經の別名といふべきである。『大無量壽經』の異譯。五存七欠中、五存の第二。吳の月支國優婆塞、支謙譯は恭明の譯。西曆二百廿三年より二百五十三年に至る間の譯である。（第一卷三一八頁參照）

二。無央數　印度の數名。梵音アサンクフヤ（Asaṃkhya）。阿僧祇、阿僧祇耶と音譯し、無央數、無數等と譯す。華嚴十大數の一。

三。蜎飛　飛びあるくこまかな蟲けらの類。

四。蠕動　うごめいて居る蛆蟲の類。

五。婬泆　婬なること。諸の欲の中、この欲が尤も修道を妨げるから、貪欲の代表としてあげ給ふ。故に廣義に取れば貪欲のことである。

六。瞋恚　瞋恚のこと。腹立つこと。

七。泥梨　梵音ナラカ(Naraka)。那落迦、奈落とも音譯す。地獄と譯す。

八。獵狩　獸。畜類のこと。

九。（辟荔）　餓鬼のこと。

一〇。考拷　拷掠に同じ。拷は打つこと、掠も鞭つこと。互に相爭うて苦むこと。

一一。辟支佛　獨覺の梵語プラトエーカブッドハの音譯。獨覺に同じ上二八頁を見よ。

一二。阿羅漢　梵音アルハット(Arhat)。阿羅詞、阿羅呵等とも音譯す。應供、殺賊、無生、離惡等と譯す。聲聞四果の一。三界の見惑、修惑の煩惱を斷ちて無學位に住し、世の供養を受くるに堪へたる聖者をいふ。

【文科】　異譯助顯の第三『大阿彌陀經』の文。

【講義】『佛說諸佛阿彌陀三那三佛薩樓佛檀過度人道經』(吳の支謙譯)に曰く、

佛宣給はく、阿彌陀佛の光明の勝れて尊いことは、あらゆる光明中第一にして、諸佛の光明の及ぶ所でない、東西南北、四維の八方及び上下に在します無央數諸佛の中には

その頂中の光りが、七丈を照すもの、又はその光りが一里を照すもの、乃至、その佛の頂中の光明が二百萬佛國を照すものがある。佛重ねて仰せらるゝやう。八方上下の諸の無央數佛達の頂中の光明の照し耀す所はこのやうである。然るに阿彌陀佛の頂中の光明は、千萬佛國を照し給ふ。かやうな諸佛の光明の照す範圍に遠近の差別をもつといふことは如何なる譯かと云へば、本前世の宿命に、道を求めて菩薩、(修道者)となつた時、その各〻の所願の功德力に自と大小がある爲めに、其後願が成就して果上の佛となる時に、因相應の果力を各自が得ることになる。それ故に諸佛の光明に不同があるのである。もと諸佛の威神は同等なのであるが、自在意の所欲に隨ひて、行ひに表はし、豫めかうといふ制限や定規を設けないから各の佛達のうる結果がかやうに異るのである。

この中、阿彌陀佛の光明の照す所は最も偉いなるものである。釋迦如來は、阿彌陀佛の光明が善の極みであることを稱譽へ給ひて仰せらるゝやう、阿彌陀佛の光明は善の極みにして、又善の中の尤も明好なるものである。その快いことは他に比べうるものはない。絕殊れて極まる所がない、阿彌陀佛の光明は清潔にして瑕も穢もなく、缺減もない。まるで明玉のやうなものである。阿彌陀佛の光明は、殊好なること日月の明かなるにも勝つ

てゐる、實に百千億萬倍である。あらゆる佛達の光明中の尤も明かなるものである。あらゆる光明中に尤も好きものである、あらゆる光明中に尤も傑出せるものである、光明中の尤も快善ものである。諸佛の王に位するものである。光明中の至極尊である。光明の中に尤も極みなき明かなるものである、それは諸〳〵の無數天下の幽冥界たる地獄の底を照し耀して、いつも暗を拂ふ太陽のやうに明かならしむる。あらゆる人民から蜎飛、蠕動の類にいたるまで、阿彌陀佛の光明を仰がぬものはない。苟もこの光明を見奉るものは、慈愛の念溢れて歡喜びに胸を躍らせぬものはない。世間の諸有姪泆、瞋怒、愚癡の者も、阿彌陀佛の光明を見奉れば、善に赴き、善に蘇き返らぬものはない、地獄、畜生、餓鬼等に墮在して、互に考掠し合ふやうな苦みの處にある者も、阿彌陀佛の光明の照し至るを見奉れば、皆な苦みから脱れて休安むことが出來る。その時全く苦みを脱れて仕舞うことは出來ないが、苦みの果報つきて其生を終れば、憂苦を解脱することを得ないものは一人もない。

又、阿彌陀佛の光明と名とは、八方上下の無窮無極無央數諸佛の國々に轟きわたつてゐるから、諸の天上人間の人々もこの名を聞かぬものはない。そして苟も名の義を聞信するものは、生死の苦みを脱れないものはない。

釋尊重ねて宣給はく、我のみ獨り阿彌陀佛の光明を稱譽へるばかりでない、あらゆる八方上下の無央數佛、辟支佛、菩薩、阿羅漢達の盡く稱譽へ奉ること我と同じである。又宣給はく、もし宿緣厚き善男子、善女人ありて、阿彌陀佛の聲を聞いて、その光明を稱譽へ、朝暮かはらず其光明の妙好なるを稱譽へ、心を一つにして斷絶なければ、心の所願通りに、阿彌陀佛の國に往生することが出來る。

第五項　『不空羂索經』の文

不空羂索神變眞言經言汝當生處是阿彌陀佛清淨報土蓮華化生常見諸佛證諸法忍壽命無量百千劫數直至阿耨多羅三藐三菩提不復退轉我常祐護已上

【讀方】『不空羂索神變眞言經』にのたまはく、なんぢ當生のところは、これ阿彌陀佛清淨報土なり、蓮華より化生してつねに諸佛をみたてまつる、もろ〳〵の法忍を證せん。壽命無量百千劫數ならん。直に阿耨多羅三藐三菩提にいたる。また退轉せず。われつねに祐護すと。已上

【字解】一。『不空羂索神變眞言經』三十卷。唐の菩提流志譯。觀世音菩薩の陀羅尼の功德を說く。不空羂索は七觀音の一、多くは三面八臂にして手に蓮花、錫杖羂索をもつ。不空は心願空しからざる意、羂索は彼此折縛して成就せしむる義、生死の大海に妙法蓮華の餌を蒔き、心念不空の索をもつて衆生を釣り上げ、涅槃の岸に至らしむると云ふのが、この觀世音菩薩の意義である。本經は、此菩薩が九十一劫昔に世間自在王如來より授つた上述の意味をもつて「不空羂索陀羅尼」を廣說したものである。

【文科】他經助顯中の第一『不空羂索經』の文。

【講義】『不空羂索神變眞言經』に曰く、汝等の生るべき處は阿彌陀佛の淸淨なる報土であるが、そは彌陀如來の身內證の表象たる蓮華より化生れて、いつも諸佛世尊を見奉る。そして諸〳〵の證忍を得るであらう。其壽命は長遠にして無量百千劫の數ならむ。

かやうに現生に於いて無上正眞道の因を得るに定れば、決して退轉することはない。我はこの行者を常に影の形に添ふ如く祐護るであらう。

第六項　『涅槃經』の文

第一科　四相品の文

涅槃經言、又解脫者名曰虛無、虛無、卽是解脫、解脫、卽是如來、如來、卽是虛無、非作、所作、乃至眞解脫者不生不滅、是、故、解脫、卽是如來如來亦爾、不生不滅不老不死不破不壞、非有爲法、以是義故、名曰如來入大涅槃、乃至又解脫者名無上上、乃至無上上者卽眞解脫眞解脫者卽是如來、乃至若得成於阿耨多羅三藐三菩提已、無愛無疑、無愛無疑、卽眞解脫、眞解脫者卽是如來、乃至如來者卽是涅槃涅槃者卽是無盡、無盡者卽是佛性、佛性者卽是決定、決定者卽是阿耨多羅三藐三菩提、迦葉菩薩白佛言、世尊若涅槃佛性、決定、如來、是一義者云何、說言有三歸依佛告迦葉善男子一切衆生怖畏生死、故求三歸、以三歸、故則知佛性、決定、涅槃、善男子有法名一義異有法名義俱異名一義異者佛常法常比丘僧常涅槃虛空皆亦是常是名名一義異名義俱異者佛名爲覺法名不覺僧名和合涅槃名解脫虛空名非善亦名無礙是爲名義俱異善男子三歸依者亦復如是、抄出

【讀方】涅槃經にのたまはく、また解脫はなづけて虛無といふ。虛無はすなはちこれ解脫、解脫はすなはちこれ

如來なり。如來はすなはちこれ虚無なり。非作の所作なり。(乃至)眞解脱は不生不滅なり。このゆへに解脱すなはちこれ如來なり。如來なり。如來またしかなり。不生、不滅、不老、不死、不破、不壞にして有無の法にあらず。この義なもてのゆへに、なづけて如來入大涅槃といふ。(乃至)また解脱は無上上となづく。(乃至)無上上はすなはち眞解脱なり、眞解脱はすなはちこれ如來なり。(乃至)もし阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たはりて、無愛無疑なり。無愛無疑はすなはち眞解脱なり。眞解脱はすなはちこれ如來なり。(乃至)如來は卽これ涅槃なり。涅槃は卽これ無盡なり。無盡は卽これ佛性なり。佛性は卽これ決定なり。決定は卽これ阿耨多羅三藐三菩提なりと。迦葉菩薩、佛にまふしてまさく、世尊、もし涅槃と佛性と決定と、如來と、これ一義なちば、いかんぞときて三歸依ありとのたまへるや。佛、迦葉に告たまはく、善男子一切衆生生死を怖畏するがゆへに三歸をもとむ。三歸をもての故に卽ち佛性と決定と涅槃とを知るなり。善男子、法の名一義異なるあり。法の名義俱異なるあり。名一義異といふは、佛常、法常、比丘僧常なり。涅槃虚空みなまたこれ常なり。これを名一義異となづく、名義俱異といふは、佛を名けて覺となし、法を不覺と名け、僧を和合となづけ、涅槃を解脱となづけ、虚空を非善となづけ、また無碍となづく。これを名義俱異とす。善男子、三歸依といふはまた〳〵かくのごとしと。略出

【字解】一。『涅槃經』　具には『大般涅槃經』釋尊入涅槃、並に其際説かれたる説法を記載す。二本あり、一は北本、四十卷。北涼の曇無讖の譯。二は南本、三十六卷。劉宋の慧觀、慧嚴、謝靈運の三人が、法顯譯の小乘の『涅槃經』を參酌して、北本を再治校合したものである。

二。有爲　爲とは爲作造作の義。故に有爲とはこの爲を有することである。因緣により生じた諸現象をいふ。俱舍の七十五法（一切諸法を攝めたる名目）のうち、三無爲を除き、唯識の百法（同上）にては、六無爲を除いた他の諸法を指す。無爲の對。

三。阿耨多羅三藐三菩提　又は阿耨三菩提、阿耨菩提、梵音アヌッタラ、サムヤク、サンボードヒ（Anuttara-Samyak-Sambodhi）、無上正徧知、無上正等正覺と譯す。佛の覺智をいふ。佛は平等の眞理を覺り世に無上なる故にこの名がある。

四。三歸　三歸依のこと。佛法僧の三寶に歸依することをいふ。

【文科】四相品の文によりて解脱、如來、涅槃の意義を述べ給ふ。

【講義】『大般涅槃經』に曰く、又解脱を虚無と名ける。折り返して云へば虚無そのまゝが解脱である。そして、解脱は如來に外ならぬ故に、如來は卽ち虚無であると云はねばならぬ。なぜかやうに解脱又は如來を虚無と名けるのであるかと云へば、それは自然法爾（非作）の運行（所作）であるからである。人爲の小賢しい煩はしい思慮分別からの活動でなく、是等の計度を離れた大自然の進展であるから虚無といふたのである。唯の無といふことでない。非作の作をいふのである。（乃至）

眞解脱とは、生せず、滅せずの謂ひである。それであるから、解脱はその儘如來である。

誠に如來は其通りである。生せず、滅せず、老いず、死せず、破れず、壞れず、これ如來の意義である。生滅老死の法は有爲の法である。如來は實にこの有爲の法を遠離して、是等の煩はす所とはならぬ。是義をもつて如來を指して入大涅槃といふのである。即ち不生不滅の大涅槃に證入したる人を如來と名けるのである。

又解脫とは無上の上とも名ける。乃至無上々は眞解脫である。そして眞解脫は即ち如來である。これは解脫を、世に超えるものはない、といふ方面の德から云ひ表はしたものである。乃至若し無上正眞道を圓に成就し已れば、無愛無疑となる。即ち穢れた愛著や疑念なき心となる。是は凡夫の能くする所でない。この無愛無疑こそ眞の解脫である。是れ即ち如來である。眞實報土に於ける證りの內容である。乃至

如來はそのまゝ涅槃である。涅槃は斷滅とか無とかといふものではなく、無盡といふことである。即ち永遠といふことである。この無盡永遠は是れ佛性に外ならぬ。そしてこの佛性は決定である。決定とは不安、不定、動搖を離れた確固不拔の意義である。この決定は即ち無上正眞道である。即ち證りの內的意義である。

この時、迦葉菩薩、釋迦牟尼佛に白すやう、世尊よ、若し仰せの如く涅槃と佛性と決定と如來と同一義の名であるとならば、何故に三歸依の差別を御說きになつたのでありますか、三歸依も矢張り上の如く同一義と云はれることでありませう。佛宣給く、三歸依を說いた所以は、衆生が生死を畏怖れるからである。その衆生は生死を怖れて三歸依の隱家を求める。この佛法僧の三歸依によりて、始めて佛性と決定と涅槃の意義を知るのである。

善男子よ、法の名は同一で、其意義の異るのと、法も名も俱に異るものとの二つがある。第一の名一義異とは、佛も常住、法も常住、比丘僧も常住、涅槃、虛空も常住といふのが夫である。是等は皆な常住の名に於いては同一であるが、併しその各の表はす意義は異つてゐる。是を名一義異といふ。第二の名義俱異といふは、佛を覺と名ける。覺とは迷へる者が覺つたといふ意味である。そこには人格的の響きがある。然るに之に對して法を不覺と名ける。法は佛が證りの意義を言說に表彰したのであるから迷から醒めて覺るといふやうな意味はない。故に之を無意識的の意味に於いて不覺と名ける。そして僧とは和合といふこと、涅槃は生死の苦から脫れるといふ意味で解脫と名ける。又虛空は善惡の標準を超えてゐるから非善といふ、亦礙へられることはないから無礙と名ける。是を名も義も異るといふのである。善男子よ、三歸依とは亦實にかやうな意味を有してをるのである。

【餘義】一。我が親鸞聖人は、『行卷』の一乘海の下、『信卷』の信樂釋の下に、『涅槃經』と『華嚴經』を引用なされたことは讀者と共に私共の既に熟知したことである。何故淨土他力門の正依の經典でない、『涅槃經』や『華嚴經』を引用し給うたかといふことは、前に說明し了つたことであるが、要するに、聖人の眼中には、他宗の敎典もなく、又他宗もなく、釋尊一代の敎典悉く、彌陀他力の弘願の行信を闡明するにあるので、聖人は釋尊成道最初の經典たる『華嚴經』と、入涅槃時の經典たる『涅槃經』とを以て佛一代の敎典を核攝し、一代經みなかくの如く彌陀の弘願の行信を開闡し給ふと示しなされたのである。

二。今、この『眞佛土卷』に於てもその如く、我が聖人は、これまで、正依の『大經』と其の異譯の經典を引用し終つて、茲に、普通他宗の敎典と見られてゐる『不空羂索神變眞言經』と『涅槃經』とを引用なされるのである。引用の御思召は、『行卷』、『信卷』に於けるが如く、この兩經を以て、佛一代の經典を總括せしめ、一代經、悉く彌陀如來の身土を說き明すにあることを證明せられるのである。吳れ〴〵もいふが、我が聖人の眼中には、自宗とか他宗とかの區別はない。從つて、『神變眞言經』にせよ、『涅槃經』にせよ、初めから他宗の經典だなどとは思つてゐられないので、文相の上にこそ、直接には顯はれて居らないにしても、意を潛めて、紙背の精神を讀む時は、何れの經典の如何なる文字でも、彌陀法の讚仰と宣傳でないものはないのである。『一實圓滿の眞敎眞宗これなり』。信仰とは宇宙の一つの心、一の生命を讀むことである。この流れ輝やく生命を讀み得た崇い尊い境地にどうして自他宗などといふ小さな區別があらう。淨土宗といふは聖道門の諸宗に對する宗旨であるかも知れぬ、然し淨土眞宗は、眞の一字があるために對待のない唯一無二の宗敎である。我が聖人が眞の一字を特に用ひられた意味は茲に至つて千鈞の重みがある。この味を徹底的に會得が出來れば、我が聖人が所謂他宗の敎典を引用なされる思召がありありと伺はれるのである。

三。『華嚴經』と『涅槃經』とが、最初の經と最後の經といふ意味で、一代經を代表した樣に、今茲では、『不空羂索神變眞言經』は密敎の經典、『涅槃經』は顯敎の敎典、顯密兩敎で佛一代の敎を總括する意味で、この兩經典が矢張り一代經を代表してゐるのである。

四。然らば何故、數多い密敎經典の中から特にこの『羂索經』が擇び出されたか。又この『羂索經』がかくして擇び出されて引用せられた上は、どういふ詮表の使命をさづけられてゐるのか。これが次に考へねばならぬ問題である。

數多い密敎經典の中から、この『絹索經』が擇び出された理由は、不空羂索尊といふが、彌陀如來二脇士の一たる觀音菩薩の異名であつて、その觀音菩薩が、持咒の行者に授け給うた語であるといふこと、そしてその語がいかにも明かに彌陀敎の報土のすがたを顯はしてゐるからといふことで盡きやう。それはともあれ、我が聖人は數多い巖經が悉く、こういふ具合に、同じ一つ呼吸に呼吸してゐるのを御覽なされてどれ程の喜悅を感じなされたであらうか。この喜は天地に滿つる一つにしてすべての生命を感得した信仰の人の特權である。

第二に『不空羂索經』の使命は、密經の書としては文面に驚くべき程明白に顯はれてゐる清淨報土のすがたを示すことである。

『涅槃經』の引意

五。『涅槃經』の御引用の御思召は、一口にいへば、報身のすがたを示すことであるが、文が多いのと、義が複雜なのとで、一見してはつきりと御引用の旨意を捕捉することは出來ない。然し聖人は、かく諸經論を引用し終つて、最後に、「爾者如來眞說、宗師釋義、明二知顯一安養淨刹眞報土惑染衆生於レ此不レ能レ見レ性所レ覆二煩惱一故」と宣うてある。この御言葉から振り返つて、『涅槃經』の引用文を見直して見ると、髣髴として聖人の御覺召のこの邊にあつたであらうといふことが知られるのである。

六。一口に『涅槃經』といふてゐるが茲には、『涅槃經』から十三文引いてある。この內前七文は表詮ともいふべく、佛身のすがたを積極的に內容的に示し、後六文は遮詮ともいふべく、消極的に、惑染の衆生は佛身涅槃のすがたを現身に見ることは出來ない。往生極樂の後に、內體の囹圄を脫した後に證見するものであることを示すのである。表詮の七文の中、又二つに分れて、第一、第二文は壽命無量、光明無量の義を示し、第三、第四、第五、第六、第七の五文は、常樂我淨の四德を出して、彌陀報身の內容は、この四德圓滿の妙果なることを顯はすのである。

- 第一　四相品文——壽命無量
- 第二　四依品文——光明無量
- 第三　聖行品文——常德
- 第四　梵行品文——常德
- 第五　德王品文——樂德
- 第六　德王品文——淨德
- 光壽二無量の報身なることを示す
- 淨樂我淨の四德の妙果なるを示す
- 表詮、積極的に佛身の內容を示す。

第七　德王品文――淨德――
第八　迦葉品文――未來得見佛性――
第九　迦葉品文――衆生根性不決定――
第十　梵行品文――上の文の第一義とあるを助顯する也――遮詮、消極的に佛身の尊貴を示す。
第十一　迦葉品文――衆生不解我意――
第十二　迦葉品文――十住菩薩小見佛性――
第十三　獅子吼品文――眼見聞見――

こういふ風に見て行くといふことは、或は無理なものかも知れない。一體『涅槃經』の文は、『羂索經』の文の樣に、文の當相が直接彌陀如來に關係してゐるのでなく、釋尊御自身の涅槃の果德を示してゐるのだから文字の裡に祕められた意義こそ味得することは出來るけれども、これを顯はに文に當つて說明することは出來ないのである、然し潛心、聖人の意底を思ひ、靜かに『涅槃經』の引文を拜讀する時、髣髴として或る種のものを會得することが出來るのである。

第一『四相品』、第二『四依品』の文が壽光二無量を顯はしてゐることは明かである。

第三『聖行品』の文が常德を、第五『德王品』の文が樂德を、第六第七『德王品』の文が淨德を顯はしてゐることも明かである。たゞ第四梵行品の文は一見すれば、たゞ常德を示してゐるやうであるが、私共はその文の終りの方の、「如衆生心」以下が我德を示してゐる樣に見えたのである。

第八『迦葉品』の文以下には、全體として、現在に於て見得べからざる佛性涅槃も、遂に彼岸に到達して見得ることを顯はしてある。

七。最後に云はねばならぬ、かくの如き見方は餘り狹すぎる感じがあるが、これはたゞ大體の見當をつけたまでのことで、これにくゝられて、外を見ることが出來ないやうでは『涅槃經』の生命ある文字を殺して仕舞ふこととなる。さうして同時に聖人の御引用の御思召をも失なつて仕舞ふこととなる。

拜讀者は一々の文字に一一の生命ある響をきくことが最も大切なのである。

第二科　四依品の文

又言光明者名二不羸劣一不羸劣者名曰二如來一又光明者名爲二智慧一

【讃方】又のたまはく、光明は不羸劣になづく。不羸劣といふは、なづけて如來といふ。また光明とは、な

づけて、智慧とすと。上已

【文科】四依品の文によりて光明の意義を説示せらる。

【講義】又言く、光明といふことは、羸劣くないといふことである。卽ち不變といふとこの羸劣くないことは卽ち如來である。如來を除いては、皆な羸劣もの、衰へ易いものである。又光明は智慧、智慧卽光明である。

第三科　聖行品の文

又言、善男子一切有爲皆是無常虛空無爲是、故爲常佛性無爲是、故爲常虛空者卽是佛性佛性者卽是如來如來者卽是無爲無爲者卽是常常者卽是法法者卽是僧僧卽無爲無爲者卽是常乃至善男子譬如從牛出乳從乳出酪從酪出生蘇從生蘇出熟蘇從熟蘇出醍醐醍醐最上若有服者衆病皆除所有諸藥悉入其中善男子佛亦如是從佛出十二部經從十二部經出修多羅從修多羅出方等經從方等經出般若波羅蜜從般若波羅蜜出大涅槃猶如醍醐言醍醐者喩於佛性佛性者卽是如來善男子

以是義故說言如來所有功德無量無邊不可稱計。抄出

【讀方】またのたまはく、善男子、一切有爲はみなこれ無常なり。虛空は無爲なり。このゆへに常とす。虛空はすなはちこれ佛性、佛性はすなはちこれ如來、如來はすなはちこれ無爲、無爲はすなはちこれ常、常はすなはちこれ法、法はすなはちこれ僧、僧はすなはち無爲、無爲はすなはちこれ常なり。乃至善男子、たとへば牛より乳をいだす、乳より酪をいだす。酪より生蘇をいだす。生蘇より熟蘇をいだす。熟蘇より醍醐をいだす。醍醐最上なり。もし服することあるものは、衆病みなのぞこる。所有のもろ〳〵の藥は、こと〴〵くその中にいるがごとし。善男子、佛もまたかくのごとし。佛より十二部經をいだす。十二部經より修多羅をいだす。修多羅より方等經をいだす。方等經より般若波羅蜜をいだす。般若波羅蜜より大涅槃をいだす。なをし醍醐のごとし。醍醐といふは佛性にたとふ。佛性はすなはちこれ如來なり。善男子かくのごときの義のゆへに、ときて、如來所有の功德、無量無邊不可稱計とのたまへり。抄出

【字解】一。酪　牛乳を精製したるもの。
二。生蘇　酪を更に精製したるもの。
三。熟蘇　蘇を更に精製したるもの。
四。醍醐　熟蘇を更に精製したるもの。
五。十二部經　佛の說法の體裁に十二通ある故に、經文を總稱して十二部經といふ。(一)長行說、法門義

理を散文的に說かるゝこと。(二)重頌說、長行を韻文的に說かるゝこと。(三)授記說、佛が衆生の爲めに、其未來の證悟を豫言したまふこと。(四)孤起說、單獨に韻文をもつて說法せらるゝこと。伽陀のこと。(五)無問自說、對手の尋ねざるに說きたまふこと。(六)因緣說、種々の因緣によりて說きたまふこと。(七)譬喩說、譬喩をもつて法を說きたまふこと。(八)本事說、因位の時のことを說きたまふこと。(九)本生說、過去世の苦行等を說きたまふこと。(一〇)方廣說、義廣く、理ゆたかに說きたまふこと。(一一)未曾有說、不思議のことを說きたまふこと。(一二)論議說、義理を論議し問答したまふことをいふのである。

六。修多羅　梵音スートラ(Sūtra)、經と義譯す。正しくは線と譯し、線が花を貫いて花環を作るやうに、佛の說かれた義理を貫いて散り亂れぬやうにしてゐる語を修多羅といふ。支那に聖人の語錄を經といふ故に、此字をもつて譯したのである。

圖の如く三藏の一なる經を總修多羅といひ、十二部經の一なる長行說を別修多羅と稱す。(『第一卷』四三四頁參照)。

七。方等經　方は方廣にして橫に十方にあまねきをいひ、等は平等にして、竪に凡聖を該ねるをいふ。卽ち普遍平等なる眞如實相の妙理を方等といふのである。この妙理を說ける大乘經典を總稱して方等經といふ。

八。般若波羅蜜　般若は梵音プラヂュニャー(Prajñā)。智慧。波羅蜜は梵音パーラミター(Pāramitā)到彼岸。菩薩がこの智慧により一切諸法を照し、涅槃の彼岸に到る意である。

【文科】聖行　聖によりて如來の無爲常住を明し給ふ。

【講義】又『涅槃經』に言く、善男子よ、一切有爲の法は皆常なきものである。然るに虛空は因果の法則に左右せらるゝことはないから無爲自然の法である。故に常住の法である、佛性は亦無爲である。故に常住である。變るといふことはない。卽ち上にあげた虛空は佛性である。ともに無爲自然にして常住であるからである。そして佛性は三寶の中の如來、如來は卽ち無爲自然である、卽ち無爲は常住の義、この常住は法寶の外ならず、この法が人格的に表はれた所が僧であるから、法はその儘僧である、僧は亦爲無である。卽ち小さい自我の計ひを離れて、無爲自然の大道を體現したものが僧である。そしてこの眞實の僧寶は卽ち時に移さるゝことのない永久の人格である。卽ち常住そのものである。乃

善男子よ、一例をあげて云へば、牛から乳をいだす、乳から酪、酪から生蘇、生蘇から熟蘇、熟蘇から醍醐をいだす、この醍醐が牛乳の尤も最上に精製せられたものである。若しこの醍醐を服用すれば、あらゆる病氣は皆な治ることが出來る。そは一切藥が殘らずこの醍醐の中に含まれてゐるからである。善男子よ、如來も亦このやうである。佛より十二部經卽ち『華嚴經』を出す、是は佛最初に說き給ふ所である、次に『華嚴經』から『修多羅經』卽ち『阿含經』を出す。『阿含經』から『方等部』の經典を出す。『方等部』の經典から『般若波羅蜜多經』を出す、そして是より『大涅槃經』を出すと、ちやうど熟蘇から醍醐の妙藥を出すやうなものである。この醍醐は卽ち佛性に譬へるのである。そしてこの因位の佛性が果上に開顯せられたのが如來であるから佛性卽ち如來である。

善男子よ、かやうな義があるから、如來に具はる功德は量なく、邊なく、思ひ計ることの出來ないものであると說くのである。

第四科『梵行品』の文

又言、善男子道有二種一、一者常二者無常菩提之相亦有二種一、一者常二者無常涅槃亦爾外道道者名爲無常內道道者名之爲常聲聞緣覺所有菩提名爲無常菩薩諸佛所有菩提名之爲常外解脫者名爲無常內解脫者名之爲常善男子道與菩提及以涅槃悉名爲常一切衆生常爲無量煩惱所覆無慧眼故不能得見而諸衆生爲欲見故修戒定慧以修行故見道菩提及以涅槃是名菩薩得道菩提涅槃道之性相實不生滅以是義故不可捉持乃至道者雖無色像可見稱量可知而實有用乃至如衆生心雖

是非色非長非短非麤非細非縛非解非是見法而亦是有。抄出

【讀方】またのたまはく、善男子、道に二種あり、一には常、二には無常なり。涅槃もまたしかなり。外道の道をなづけて無常とす。內道の道をば、之をなづけて常とす、聲聞、緣覺、所有の菩提をなづけて無常とす。菩薩諸佛の所有の菩提これをなづけて常とす。外の解脫をなづけて無常とす。內の解脫はこれをなづけて常とすと。善男子、道と菩提および涅槃と、ことごとくなづけて常とす。一切衆生は、つねに無量の煩惱のために、おほはれて、慧眼なきがゆへに、見ることを得ることを能はず。もろ〳〵の衆生、見んと欲うがために、戒定慧を修す。修行をもてのゆへに、道と菩提とおよ

び涅槃とをみる、これを菩薩得道菩提涅槃となづく。道の性相、實に不生滅なり。この義をもてのゆへに提持すべからず。(乃至)道は色像のみつべく、稱量して知るべきことなしと雖も、しかも、實に用あり。(乃至)衆生の心のごときはこれ色にあらず、長にあらず、短にあらず、麁にあらず、細にあらず、縛にあらず、解にあらず、これ見にあらずといへども、法としてまたこれ有なりと。

【文科】　梵行品によりて涅槃、菩提(道)の意義を闡明し給ふ。

【講義】　又『涅槃經』に曰く、善男子よ、證りを獲る智慧、卽ち因道に二種ある。一は常住にして變易することのない智慧、二は移り變る不定の智慧である。因の智慧に二種あるやうに、果の智慧たる菩提の相にも、常住と無常の二種がある。そして又涅槃の上にもこの常、無常の二つがある。

佛敎以外の異敎の道は無常にして宛にならぬものである。是に對して佛の敎は常住不變の道である。更に佛敎の內部に就て見るに、聲聞緣覺等の小乘敎徒の得る所の菩提(智慧)は無常、大乘菩薩並びに諸佛の得る所の智慧は常住不變である。そして外道のいふ所の解脫は無常、內道卽ち佛敎の敎ふる所の解脫は常住と名ける。

善男子よ、因の智慧(道)と果の智慧(菩提)とそして涅槃の三法は悉く常住であるが、

智慧の意義

一切衆生はいつも量なき煩惱の爲めに智慧の眼を覆はれて、この常住の法を見ることが出來ない。然るに諸〳〵の衆生はこの常住を見たい爲めに戒定慧の三學を修める。この修行の功によりて道と菩提と涅槃を見る。是を菩薩(修道者)が、上の道、菩提、涅槃の三法を得るといふのである。

そも道(智慧)の本性も相も不生不滅であるから、是を觀念や概念をもつて捉持へておくことは出來ない。これを把住すれば、もう道は脫れて仕舞うのである。(乃至)

智慧は色像の見るべきもの、稱量りて知るべきものはないが、而も實際上惑ひを斷つといふ功用がある。(乃至)

衆生の心の如きも物質でないから、長いといふでもなく、短いといふでもなく、麁いとか細いとかといふべきでなく、縛ることも解くことも出來ないから、見るべきものではないが、而もその功用ある法としては嚴然として存在してをるのである。

第五科　德王品の文

又言善男子有二大樂一故名二大涅槃一涅槃無樂以二四樂一故名二大涅槃一何等爲レ四一者斷二諸樂一故不レ斷レ樂者則名爲レ苦若有レ苦者不レ名二大

樂ニ以レ斷レ樂故ニ則無有レ苦無苦無樂乃名ニ大樂ト涅槃之性ハ無苦無樂
是故ニ涅槃ヲ名ヲ爲ニ大樂ト以ニ是義ヲ故ニ名ニ大涅槃ト復次ニ善男子樂ニ有ニ二種ー
一ニハ者凡夫二ニハ者諸佛凡夫之樂ハ無常敗壞是故ニ無樂諸佛ハ常樂無レ
有ニ變易ニ故ニ名ニ大樂ト復次ニ善男子有ニ三種受ー一ニハ者苦受二ニハ者樂受三ニハ
者不苦不樂受不苦不樂是亦爲レ苦涅槃雖レ同ニ不苦不樂ニ然名ニ大
樂ト以ニ大樂ヲ故ニ名ニ大涅槃ト二ニハ者大寂靜故名ヲ爲ニ大樂ト涅槃之性ハ是大
寂靜何以故遠ニ離一切憒鬧法ヲ故以ニ大寂ヲ故名ニ大涅槃ト三ニハ者一切
知故名ヲ爲ニ大樂ト非ニ一切知ニ不レ名ニ大樂ト諸佛如來ハ一切知故名ヲ爲ニ大
樂ニ以ニ大樂ヲ故ニ名ニ大涅槃ト四ニハ者身不壞故名ヲ爲ニ大樂ト身若可レ壞則不レ
名レ樂如來之身金剛無レ壞非ニ煩惱無常之身ー故名ニ大樂ト以ニ大樂ヲ故
名ニ大涅槃ト上已

【讀方】またのたまはく、善男子、大樂あるがゆへに大涅槃となづく、涅槃は無樂なり。四樂をもての故に大涅槃となづく。何等をか四とする。一には諸樂を斷ずるがゆへに、樂を斷ぜざるは、則なづけて苦とす。もし苦あらば大樂となづけず。樂を斷ずるを以ての故にすなはち苦あることなけん。無苦無樂をいまし大樂となづく。涅槃の性は苦無樂なり。このゆへに涅槃をなづけて大樂とす。この義を以ての故に大涅槃となづく。またつぎに善男子、樂に二種あり。一には凡夫、二には諸佛なり。凡夫の樂は無常敗壞なり。このゆへに無樂なり。諸佛は常樂なり。變易あることなきがゆへに大樂となづく。復つぎに善男子、三種の受あり。一には苦受、二には樂受、三には不苦不樂受なり。不苦不樂これまた苦とす。涅槃も不苦不樂におなじといへども、しかも大樂となづく。大樂を以ての故に大涅槃となづく。二には大寂靜のゆへに名けて大樂とす。涅槃の性これ大寂靜なり。なにをもてのゆへに、一切憒鬧の法を遠離ぜるゆへに。大寂を以ての故に大涅槃となづく。三には一切智のゆへに名て大樂とす。一切智にあらざるを以てのゆへに大涅槃となづく。四には身不壞の故に名て大樂とす。身もし壞ずべきはすなはち樂となづけず。如來の身は金剛にして壞なし。煩惱の身無常の身にあらず。故へに大樂となづく。大樂をもてのゆへに大涅槃となづく。上已

【字解】一。受　心所の名、根、境、識の三者和合して生じたる觸を領納れると。卽ち感覺のこと。

二。憒鬧法　憒は騷しいこと。鬧は囂しいこと。紛然雜然たる逃ひの法をいふ。

【文科】德王品の第一文によりて大涅槃の意義を明す一段である。

【講義】又曰く、善男子よ、大なる樂があるから大涅槃と名ける、單に涅槃と云へば樂みが無いことである。左の四樂を具へてをるから大涅槃と名ける。その四樂とは何んで

あるか。

一は諸の不純の樂を斷じてゐるといふこと。五官の樂みをはじめ凡て世間的の樂みを斷滅せなければ、それは苦みと名けざるを得ない。苦みのあるものならば、大樂と名けることは出來ない。是等の地上の快樂を斷つてをるから苦といふものはない。この苦みなく樂みなしといふのが、乃ち大樂たる所以である。大體涅槃の本性は苦なく樂なしといふことである。地上の苦樂を拂ひ除けた所に自と湧き上る樂みを大樂といふ、是が卽ち涅槃である。この義をもつて大涅槃と名ける。復善男子よ。上來樂みといふことを度々いうたが、この樂みに二種ある。一は凡夫の樂み、二は諸佛の樂みである。凡夫の樂みは無常にして敗壞れるものである。夫であるから眞の意味から云へば樂みなしと云ふべきである。然るに諸佛は常に樂んでをられる。その樂みに變易はない。夫であるから諸佛の樂みを大樂といふのである。復善男子よ、樂みといふことに連關して三受を說かねばならぬ。一は苦受二は樂受、三は不苦不樂受である。受は感覺の謂にして我々には以上三種の感覺をもつてゐる。この中不苦不樂受は捨受とも名けられるが、是は苦樂二受のやうに一括して云へば矢張り苦みの中に入る。凡夫のあらゆる感覺は迷ひにして苦みであるからである。然るに涅槃は不苦不樂と名けられてあるけれども、それは普通にいふ苦樂でないといふ意味で消極的に云ひ表はした丈で、凡夫のもつ所の三受中の不苦不樂受とは違うのである。だから積極的に云へば涅槃を大樂といふ。故に大涅槃と名ける。

二には、涅槃は大寂靜の意義を有す、夫であるから大樂といふのである。涅槃の性としてこの大寂靜を有するのである。それは一切憒鬧い虛僞の法を遠離けてをるからである。故に大寂を涅槃の別名とするのである。

三には、涅槃は一切智の謂ひである、夫故に大樂と名ける。眞實の一切智慧をもつてゐるものでなければ大樂とは名けることは出來ない。諸佛如來は一切智者であるから大樂と名ける。大樂は卽ち大涅槃である。

四には、身が壞はれないといふことから大樂と名ける、身が壞れるといふならば大樂とは名けられない、如來の眞身は金剛の堅固をもつてゐるから壞れることはない。煩惱の身でない、無常の身でない。だから大樂と名ける。卽ち凡夫の樂みはこの壞はれる肉身によりて獲る所であるから大樂と名けられない。この身不壞から得る樂みを大樂と名け、是を大涅槃と名ける。

又言、不可稱量不可思議故得名爲大般涅槃以純淨故名大涅槃云何純淨淨有四種何等爲四一者二十五有名爲不淨能永斷故得名爲淨淨卽涅槃如是涅槃亦得名有而是涅槃實非是有諸佛如來隨世俗故說涅槃有譬如世人非父言父非母言母實非父母而言父母涅槃亦爾隨世俗故說言諸佛有大涅槃二者業清淨故一切凡夫業不清淨故無涅槃諸佛如來業清淨故故名大淨以大淨故名大涅槃三者身清淨故身若無常則名不淨如來身常故名大淨以大淨故名大涅槃四者心清淨故心若有漏名曰不淨佛心無漏故名大淨以大淨故名大涅槃善男子是名善男子善女人抄出

【讀方】又のたまはく、不可稱量、不可思議なるが故に、なづけて大般涅槃とすることなう。純淨を以ての故に大涅槃となづく。いかんが純淨なる。淨に四種あり。何等なか四とする。一には二十五有なづけて不淨とす。能くながく斷ずるがゆへに名て淨とすることなう。淨すなはち涅槃なり。かくのごときの涅槃、また有にしてこれ涅槃と名くることなう。實にこれ有にあらず。諸佛如來、世俗にしたがふがゆへに涅槃有なりと說きたまへり。たとへば世人父にあらざるを父といひ、母にあらざるを母といふ。實に父母にあらざるを父母と言ふがごとし。涅槃もまたしかなり。世俗に隨ふがゆへに、ときて諸佛に大涅槃ありとのたまへり。二には業清淨のゆへに、一切凡夫の業は不清淨のゆへに涅槃なし、諸佛如來は業清淨のゆへに、かるがゆへに大淨と名く。大淨をもての故に大涅槃となづく。三には身清淨のゆへに。身もし無常なるをすなはち不淨となづく。如來の身は常なるがゆへに大淨となづく。大淨をもてのゆへに大涅槃となづく。四には心清淨のゆへに心もし有漏なるを名けて不淨といふ。佛心は無漏なるがゆへに大淨となづく。大淨をもての故に大涅槃となづく。善男子、これを善男子善女人と名づくと。抄出

【字解】一。二十五有　迷妄の世界の總稱。四洲(四有)、四惡趣(四有)、六欲天(六有)、梵天(一有)、無想天(一有)、五那含天(一有)、四禪天(四有)、四空處天(四有)の稱。

二。業　身口意に作す所のすべてをいふ。業は梵語カルマ(Karma)の譯、事、所作、作法など同意である。

三。有漏　無漏の對。煩惱の異名。漏は漏泄又は缺漏の義。煩惱は膿血のやうに、外に漏るゝから有漏といふ。

四。無漏　有漏の對。漏は煩惱。煩惱を增上せしめざる智慧をいふ。

【文科】德王品の第二文によりて四種の涅槃を述べ玉ふ。

【講義】又曰く、量をもつて稱ることも出來ず、思ひ謀ることの出來ないと言ふ方面から、大涅槃と名けることが出來る。又純一淸淨といふことをもつても大涅槃と名づける

涅槃の四種

純浄とはどういふことであるか、是れに四種あり。四種とは何に。

一には、迷の衆生の得る所の三界、二十五有の世界は不浄である。是は穢れた煩悩の因から生れた果實であるから矢張り穢れてをる。是等の不浄の果を永く斷ち切つてをるから浄といふのである。この意味に於いて浄即ち涅槃である。迷の穢れた有(存在)に對して涅槃を云ふ時には、涅槃も亦悟りの清浄なる有(存在)といふことが出來る。併し涅槃は決して普通にいふ所の存在ではない、諸佛如來は暫く世俗の人々の概念に隨うて涅槃は有であると說かれたのである。譬へて云へば、世間の人達が、父でないのを父と云ひ、母でないのを母といひ、眞實の父母でないものを父母といふやうなものである。是は暫く世上の約束に應じてかやうに云ふのである。涅槃も亦さうである。世俗でいふ有(存在)と涅槃の有とは、全く其内容を異にしてゐるけれども、唯世俗になぞらへて有といふ文字を使ふのである。斯の如く世俗に隨うて諸佛には大涅槃があるといふのである。

二には、業清浄の義である。上に果の清浄について明したのであるが、こゝは因の清浄についていふ。一切凡夫のなす所の業作は、皆な煩悩の穢れをもつてゐる。だから涅槃はない。卽ち清浄はない。然るに諸佛如來の業作は少しも穢れはない。故に之を大

善男子善女人の意義

浄と名ける。大浄であるから大涅槃と名けるのである。

三には、身清浄といふ所から大浄と名ける。身が清浄なるには無常では駄目である。この意味に於いて無常と不浄とは同一義である。如來の身は常住にして變易がないから大浄と名ける。大浄であるから大涅槃と名けるのである。

四には、心清浄の義である。心にもし有漏(煩悩)があるならば不浄といふ。佛心は無漏(無煩悩)であるから大浄と名ける。大浄であるから大涅槃と名ける。善男子よ、この大涅槃を開發すべき因を得たる人を善男子、善女人と名けるのである。已上 抄出

又言、善男子諸佛如來、煩悩不レ起、是名二涅槃一、所有智慧於レ法無礙、是爲二如來一、如來非是凡夫聲聞緣覺菩薩一、是名二佛性一、如來身心智慧偏二滿一、無量無邊阿僧祇土一、無レ所二障礙一、是名二虛空一、如來常住無レ有二變易一、名曰二實相一、以二是義一故、如來實不二畢竟涅槃一、是名二菩薩一。已上

【讀方】又のたまはく、善男子、諸佛如來は煩悩おこらず。これを涅槃となづく。所有の智慧法において無礙なり。これを如來とす。如來はこれ凡夫、聲聞、緣覺、菩薩にあらず。これを佛性となづく。如來は身心、智慧、無量、無邊、阿僧祇の土に遍滿したまふ。障礙するところなし。これを虛空となづく。如來は常住にし

て變易あることなければ、なづけて實相といふ。この義をもてのゆへに如來は實に畢竟涅槃にあらず。これを菩薩となづく。已上

【字解】一。阿僧祇　梵音アサンクヒヤ（Asaṃkhya）。印度の大數の名。無數、無央數等と譯す。

【文科】總王品の第二科によりて、如來の意義を述べ至ふ。

【講義】又曰く、善男子よ、諸佛如來、迷ひを離れてをるから煩惱は起らぬ。是を涅槃と名ける。如來の具へ給ふ智慧は、單なる思辨や概念と違ひ、活きてゐる力であるから、一切の法に接觸しても滯る所なく、礙へられることはない。是を指して如來といふのである。如來は實に凡夫、聲聞、緣覺、菩薩のやうな未開發の心をもつてゐる方ではない。凡て圓滿に完成された方である。是を佛性と名く。こゝにいふ佛は所謂至德果佛性にして果上に開顯せられた佛性である。如來の心も身も智慧も徧く無量無邊阿僧祇國土に滿ち亙つてをる。そして少しも滯り礙へられることはない。この意味に於いて虛空と名けるのである。如來の法身は常住にして變易といふことはない。これを名けて實相といふのである。かくして如來は遂に畢竟涅槃し給ふことはない。常に生々潑溂として、進展し活動しつゝあり。如來は亦この意味に於いて菩薩にてまします。果上後の普賢大悲の行は、如來の

この方面をいふのである。已上

第六科　迦葉品の文

又言迦葉菩薩言、世尊佛性者、常猶如虛空、何故如來說言未來一切衆生、有三種、身所謂過去未來現在衆生未來、具足莊嚴清淨之身、而得見佛性、是故我言佛性未來、善男子我爲衆生、或時說因爲果、或時說果爲因、是故經中說命爲食、見色名觸、未來身淨、故說佛性、世尊如佛所說、義如是者、何故說言一切衆生悉有佛性、善男子衆生、佛性雖現在無、不可言無、如虛空、性雖無現在不得言無一切衆生、雖復無常、而是佛性常住無變、是故我於此經中說衆生、佛性非內非外、獨如虛空、非內非外、如其虛空有內外者、虛空不名爲一、爲常亦不得言一切處有、虛空雖復非內非外、而

諸衆生悉皆有之衆生佛性亦復如是如汝所言一闡提輩有善法者是義不然何以故一闡提輩若有身業口業意業取業求業施業解業如是等業悉是邪業何以故不求因果故善男子如迦葉菩薩薩婆若多一闡提業亦復如是

【讀方】又のたまはく、迦葉菩薩いはく、世尊、佛性は、常なり。なを虛空のごとし。なんがゆへぞ如來ときて未來とのたまふやと。如來もし一闡提の輩善法なしとのたまはゞ一闡提のともがら、それ同學、同師、父母、親族、妻子において豈まさに愛念の心を生ぜざるべきや。もしそれ生ぜばこれ善にあらずやと。佛のたまはく、善哉、善哉、善男子こゝろよくこの問を發せり。佛性はなを虛空のごとし。過去にあらず、未來にあらず。現在にあらず。一切衆生に三種の身あり。いはゆる過去未來現在なり。衆生未來に莊嚴清淨の身を具足して、佛性をみることをえん。この故にわれ佛性未來といへりと。善男子、あるひは衆生のために或時は因をときて果とす。あるときは果をときて因とす。このゆへに經の中に、命をときて食とす。色をみるを觸となづく。未來の身淨なるがゆへに佛性ととく。世尊佛の所說の義のごとし。是の如きもの何か故ぞときて一切衆生悉有佛性とのたまへると。善男子、衆生の佛性は現在に無なりといへども、無といふべからず。虛空の性は現在に無なりといへども、無といふことをえざるが如し。一切衆生また無常なりといへども而もこれ佛性は常住にして變なし。是ゆへにわれこの經の中において、衆生の佛性は非內非外にして、なを虛空の非內非外なるが如しと說く。如しそれ虛空に內外あらば、虛空は名けて一とし常とせず。また一切處有いふことをえず。虛空はまた內にあらず外にあらずといへども、而ももろ〳〵の衆生ことゞく皆これあり。衆生の佛性またかくのごとし。汝がいふところの一闡提の輩のごとき、もし身業、口業、意業、取業、求業、施業、解業、あらば、是の如きらの業は、ことゞくこれ邪業なり。何を以てのゆへに因果をもとめざるがゆへに。善男子、調梨勒の葉根莖枝葉華實、ことゞく苦きがごとし。一闡提の業も、また〳〵かくのごとし。已上

【字解】一。一闡提　梵音イッチャンティカ(Icchantika)一闡提伽、一闡底柯、一顚迦とも音譯す。何處までも求めて滿足しない義。裏から云へば、道の深さに達することが出來ない爲めに、從つて滿足することが出來ない性分の人をいふのであらうと思ふ。みみの絕え果てたもの、意、信不具足、又は斷善根と譯してある。到底成佛の出來ない性を有する人のことであるが、今は慚愧の心のない貪欲一善の凡夫をさしていふのである。

二。色　色法、または色蘊の略。自體に變化を起し、互に相障へる事物の總稱、こゝでは物質といふ程の意。

三。取業　ものを取る心の働き。卽ち慾のこと。

四。求業　心に分別思惟して求める働き。願望のこと。

五。施業　布施する心の働き。慈善心のこと。

六。解業　事理を了解する働き。智慧のこと。

七。訶梨勒果　梵音ハリレキ（Harītakī）、呵唎勒、呵羅勒、賀唎怛嚧等と音譯せらるゝ樹の實。此の樹は印度、緬甸等の國に產し。幹の高さ八丈より十八丈に達す。葉は楕圓にして長さ三四寸、花は白色にして少く、果は卵形にして長さ六分乃至一寸。乾せば五穀となり藥用に供せらる。

【文科】迦葉品の第一文によりて佛性常住等の要義を示し給ふ。

【講義】又曰く、迦葉菩薩、世尊に申して言く、世尊よ佛性は、常住にして變易ることなく、悟も虛空のやうであるとならば、何故に如來は「未來」といふやうなことを仰せらるゝのでありますか。佛性常住といふならば時間といふことは成立ないことではありませぬか。次に如來は、一闡提の輩には、少しも善法がないと仰せられてあるが、併し彼等でも其同學の友や、同學の師匠や、父母、親族、妻子等を愛念心を起すことと存じまする。若しその心を起すといふならば、それは善心ではありませぬか。

佛宣給はく、善哉々々、善男子よ、快もこの問ひを起して呉れた。成程、佛性は虛空の如く過去でもなく、未來でも現在でもないのである。所が現に一切衆生を見るに三種の身をもつてゐる。所謂過去、未來、現在の身である。衆生は現在にはもつてはをらぬが、未來には清淨に莊嚴したる身を具へ、佛性を見ることが出來る。夫故に我は衆生の佛性は未來であると說いたのである。善男子よ、我は衆生の爲に或時は因のことを果と說き、又或時は果を因と說くこともある。卽ち經の中には、命は食を取つた結果であるけれども、命を食と說いたこともあり、色（物質）は觸（接觸）によつて認められた結果であるけれども、色のことを觸と說いたこともある。かやうに衆生にありても、未來の結果は身清淨に至ることが出來る點に就いて、佛性と說いたのである。

迦葉菩薩、この時問うて曰く、世尊の御說通り衆生の佛性が單に未來に屬するといふ義ならば、世尊は何故に先に一切の衆生は悉く佛性ありと說かれたのでありますか。

佛答へて、善男子よ、衆生の佛性は前說の通り現在には無いけれども、之を一概に無いと斷じ去る譯には行かぬ。ちやうど虛空といふものは、現にこれといふ作用はないけれども、而も虛空はないと云ふことが、出來ないやうなものである。一切の衆生も其相の上では無常であるけれども、而も其性の上から云へば、佛性は常住にして變はることはない。是故に我この經の中に、衆生の佛性は、精神內にあるのでもなく、精神の外にあるのでもない。ちやうど虛空のやうなもので、內界にあらず、外界にあらずと說いたのである。もしも虛空に內外の差別があるならば、虛空でありながら一といふことも出來ず、常住不變

といふことも出來ないであらう。亦もしかやうに內外の相違があるならば、一切の處に虛空があるとも言ふことが出來ないのである。然るに虛空の性として內とか、外とか限ることは出來ないものであるが、而も諸の衆生は悉く皆虛空を有してをるのである。佛性も亦この虛空と同じもので、衆生にありては、今は何も其作用がないけれども、本より法爾に具へてをるのである。

次に汝が尋ねた所の一闡提の輩に就いては、元より彼等とても自分の周圍の者に對して愛念を起すこともあらう。卽ち身口意の三業を起し、取業、求業、施業、解業を起すであらうが、併し夫等は凡て邪しまの見解から起つた業作である。何故かと云へば、因果の道理を求めることを忘れてをるからである。凡て因果を信せないものは邪業の徒である。善男子よ。あの訶梨勒果がまだ熟せない時は、根も莖も枝葉も、華も實も悉く苦いやうなものである。一闡提もこれと同じく、彼等の身口意の三業は悉くみな邪まなるものである。已上

又言善男子如來具足知諸根力是故善能分別衆生上中下根能知是人轉中作上能知是人轉上作中能知是人轉中作下是故當知衆生根性無有決定以無定故或斷善根斷已還生若諸衆生根性定者終不先斷斷已復生亦不應說一闡提輩墮於地獄壽命一劫善男子是故如來說一切法無有定相迦葉菩薩白佛言世尊如來具足知諸根力定知善星當斷善根以何因緣聽其出家佛言善男子我於往昔初出家時吾弟難陀從弟阿難達婆達多子羅睺羅如是等輩皆悉隨我出家修道我若不聽善星出家其人次當得紹王位其力自在當壞佛法以是因緣我便聽其出家修道善男子善星比丘若不出家亦斷善根於無量世都無利益今出家已雖斷善根受持戒供養恭敬耆舊長宿有德之人修習初禪乃至四禪是名善因如是善因能生善法善法既生能脩習道道既修習道當得阿耨多羅三藐三菩提是故我聽善星出家善男子若我不聽善星比丘出家受戒則不得稱我爲如來具足十力善男子如來善知衆生如是上中下根是故稱佛具知根力迦葉菩薩白佛言世尊如來具足知

知根力ヲ是故ニ能知一切衆生上中下根利鈍差別ニ隨人ニ隨意ニ隨時
故名ニ如來ヲ知諸根力ニ乃至或有説言ニ犯四重禁作五逆罪一闡提等
皆有ニ佛性ニ乃至

【讃方】又のたまはく、善男子、如來は知諸根力を具足したまへり。是ゆへによく衆生の上中下根をさとり分別してよく是人下を轉じて中となると知り、よく是人中を轉じて上となると知り、よく是人上を轉じて中となると知り、よく是人中を轉じて下となると知りたまふ。この故にまさにしるべし。衆生の根性に決定あることなし。定なきをもてのゆへにあるひは善根を斷ず。斷じをはりてかへりて生ず。もしもろ〳〵の衆生の根性、定ならば、つねに先に斷じて、斷じをはりてまた生ぜざらん。また一闡提のともがら、地獄に墮して壽命一劫なりと説くべからずと。善男子、このゆへに如來、一切の法は定相あることなしと説きたまへり。迦葉菩薩、佛にまふしてまふさく、世尊、如來は知諸根力を具足して、さだめて善星まさに善根を斷ずべしとしるしめさん。なんの因緣をもてその出家をゆるしたまふと。佛のたまはく、善男子、われ往昔のそのかみにおいて出家のとき、わが弟難陀、從弟阿難、提婆達多、子羅睺羅、かくの如きの輩、皆ことごとく我にしたがひて出家修道す。われもし善星が出家をゆるさずば、その人つぎにまさに王位を紹ぐことを得べし。その力自在にしてまさに佛法を壞すべし。この因緣をもて我ずなはちその出家修道をゆるす。善男子、善星比丘もし出家せずば、また善根を斷ぜん。無量世においてすべて利益なけん。いま出家しをはりて善根を斷ずといへども、よく戒を受持して書誦長宿有德のひとを供養恭敬し、初禪乃至四禪を修習せん。これを善因となづく。是のごときの善因よく善法を生ず。善法を生ぜばよく道を修習せん。すでに道を修習せば、まさに阿耨多羅三藐三菩提をうべし。この故にわれ善星が出家をゆるす。善男子、もしそれ善星比丘が出家をゆるし戒をうけしめずば、すなはち我を稱して如來具足十力とすることをえざらんと。(乃至)善男子、如來よく衆生の是の如きの上中下根をしろしめす。このゆへに佛を具知根力と稱す。迦葉菩薩、佛にまふしてまふさく。世尊如來はこの知根力を具足したまへり。このゆへによく一切衆生の上中下根利鈍の差別をしろしめして、人にしたがひ意にしたがひ、時にしたがふがゆへに、如來、知諸根力となづけたてまつる。(乃至)あるひはときて犯四重禁、作五逆罪、一闡提等、みな佛性ありと言ふことありと。(乃至)

【字解】一。善星　釋尊の子、羅睺羅の異母兄と稱せらる。釋尊の弟子となつたが、邪見を起した爲めに、尼連禪河の邊りに於いて、大地割れて生きながら阿鼻獄に墮ちたと傳ふ。

二。難陀　釋尊の異母弟。

三。阿難、提婆達多　は兄弟にして釋尊の從弟。

四。羅睺羅　釋尊の子。以上四人の傳記は山邊著『佛弟子傳』に委し。

五。初禪乃至四禪　四靜慮のこと。色界の四禪定のこと。初禪は有尋有伺定、(定中尚ほ麤觀あり)二禪は無尋唯伺定(麤の尋はないが、細の伺がある)三禪は無尋無伺定(尋伺ともになくなり、勝妙の樂、身に滿つる定)四禪は捨念淨事定(二禪の喜、三禪の樂をすて、心に憎愛なく一念平等清淨なる定)

六。具知根力　衆生の根抵を知り、夫に應じて法を說き給ふ佛の力をいふ。

七。四重禁　具には四重禁戒、略して四重又は重罪といふ。殺生、偸盜、邪婬、妄語の稱。

【文科】迦葉品の第二文によりて如來の知根力等を述べ玉ふ。

衆生の機根論

【講義】又言く、善男子よ、如來は知諸根力を具へてをる。それは衆生の根機を熟知する力である。夫であるから能く衆生の上根、中根、下根を理解し、夫々分別して、是人は下根の機類であるけれども能く中根の機となるといふことを知り、或は此人は中根であるけれども、能く上根となるであらうと知り、或は此人は上根から轉じて中根となることを知り、又は此人は中根から退いて下根となることを知ることが出來るのである。かやうな有樣であるから衆生の根性には、定めてかうだといふ決定性がないものであることを知らねばならぬ。定性がないから或時は一度善根を斷つやうなことがあつても、再び又善根を生ずることがある。若し諸〳〵の衆生の根性が、必然的に定つてをるものならば、一度善根を斷じ已つたものが、もう一度再び生ずる譯はない。隨つて亦一闡提の輩が地獄に墮ちて、その地獄の壽命一劫であるなぞと說くことは出來ない筈である。卽ち一闡提と雖も或時節が來れば其地獄の果報を脫れて、再び求法聞法することが出來るのである。是故に如來は、一切の法（有情、非情を含む）は決定した相はないと說かれたのである。人々は多く過去の經驗や、現在の狀態を觀察して、直ちに一切法に就いてかうだ、あゝだといふ判斷を下すが、是は法の深い自性を覺らず。只表面に眼を注ぐ謬りの致す所である。

善星比丘

時に迦葉菩薩、佛に申すやう。如來世尊は衆生の根機を知り、力を具足へ給ふといふならば、あの善星比丘が、修行を退墮し、善根を斷ずるといふことを前もつて御承知である筈と存じます、然るにどういふ因緣で、あの比丘に出家を御許しになつたのでありまするか。

佛、答へて、善男子よ、我嘗つて初めて出家した時、吾弟の難陀、從弟阿難、提婆達多吾子羅睺羅等の釋氏の子弟が相連れ立ちて、我に隨うて出家して道を修めた。然るに若しあの際に善星の出家を許さなかつたならば、彼は同族の子弟の出家の後を承けて必ず王位を紹ぐであらう。若し彼が王位に登るならば、其王權を自由に振舞うて佛法を破壞するであらう、かやうな恐れがあるから、我は破戒を豫知しながらも出家修道を許したことである。善男子よ、若しあの善星比丘が出家せなんだならば卽ち亦善根を斷つに相違ない。さすれば未來永劫に亘りて、彼に取りて何の利益もない。今出家してよしや善根を斷ち切つ

たとしても、能く戒を受持ち、教團の先輩たる德の高い人々を供養し恭敬の念を捧げ初禪より進んで四禪定を修めたならば、是が卽ち善因である。この修道の善因は能く善法を產む。既に其人の心內に善法が芽ぐんでくれば必ず能く道を修めるに相違ない。かやうに精進に道を修むれば、當に無上正眞道を得るであらう。是故に家は善星の出家を許したことである。善男子よ、かやうな理由であるから、若し我善星比丘が出家受戒を許さなかつたならば、我は十力を具へてをる如來とは云はれまい。乃至

善男子よ、如來は善く衆生の上中下根の機類のことに就いて、かやうに委しく承知してゐるのである。是故に、佛を具知根力と稱することである。

迦葉菩薩、佛に申し上ぐるやう、如來世尊は實に衆生の根機を知す所の具知根力を具へ給ふが故に、能く一切衆生の上根、中根、下根の差別、利根、鈍根の差別を御知りになつて、人に隨ひ、その人の意に相應し、又時機に應じて法を說き給ふ。かくて如來を知諸根力と名け上るのである。乃至或は又如來は、四重禁戒を犯したもの、五逆罪を造つたもの、及び一闡提にても、佛性があるといふ尊い法を御說きになつたことである。乃至

如來世尊爲二國土一故、爲二時節一故、爲二他語一故、爲二人一故、爲二衆根一故、於二一法一中二作二種一說、於二一名一法說二無量名一、於二一義一中說二無量名一、於二無量一義說二無量名一、於二無量一名說二無量一、名猶如二涅槃一、亦名二涅槃一、亦名無生、亦名二無出一、亦名二無作一、亦名二無爲一、亦名二歸依一、亦名二窟宅一、亦名二解脫一、亦名二光明一、亦名二燈明一、亦名二彼岸一、亦名二無畏一、亦名二無退一、亦名二安處一、亦名二寂靜一、亦名二無相一、亦名二無二一、亦名二一行一、亦名二清涼一、亦名二無闇一、亦名二無礙一、亦名二無諍一、亦名二無濁一、亦名二廣大一、亦名二甘露一、亦名二吉祥一、是名二一名一、作二無量一、名云何一義說二無量一、名猶如二帝釋一、乃至云何於二無量一義說二無量名一、如二佛如來一、名爲二如來一、義異名異、亦名二阿羅訶一、義異名異、亦名三藐三佛陀一、義異名異、亦名二船師一、亦名二導師一、亦名二正覺一、亦名二明行足一、亦名二大師子王一、亦名二沙門一、亦名二婆羅門一、亦名二寂靜一、亦名二施主一、亦名二到彼岸一、亦名二大醫王一、亦名二大象王一、亦名二大龍王一、亦名二施眼一、亦名二大力士一、亦名二大無畏一、亦名二寶聚一、亦名二商主一、亦名二得解脫一、亦名二大丈夫一、亦名二天人師一、亦名二大分陀利一、亦名二獨無等侶一、亦名二大福田一、亦名二大智海一、亦名二無相一、亦名二具足八智一、如是一切義異名異善男子是

名無量義、中説無量、名復有一義説無量、名所謂如陰、亦名爲陰、亦名顚倒、亦名爲諦、亦名爲四念處、亦名四食、亦名四識住處、亦名爲有、亦名爲道、亦名爲時、亦名爲衆生、亦名爲世、亦名第一義、亦名三修、謂身戒心、亦名因果、亦名煩惱、亦名解脫、亦名十二因緣、亦名聲聞辟支佛、亦名地獄餓鬼畜生人天、亦名過去現在未來、是名一義、説無量、名善男子、如來世尊、爲衆生故、廣中説略、略中説廣、第一義諦、説爲世諦、説世諦、説爲第一義諦。抄出

【讃方】如來世尊、國土のためのゆゑに、一法の中において二種の説を作す。一名の法に於いて無量の名を説く。一義の中に於て無量のための名を説く。無量の義に於いて、無量の名を説く。云何、一名に無量の名を説くや、猶し涅槃の如し。亦涅槃と名く。亦無生と名く。また無出と名く。亦無作と名く。また無爲となづく。亦歸依と名く。亦窟宅と名く。亦解脫と名く。また光明となづく。また燈明となづく。また彼岸となづく。また無畏と名く。また無退となづくまた安處となづく。また寂靜となづく。また無相となづく。また無二となづく。また一行となづく。また清凉となづく。また無關となづく。また無礙となづく。また無量となづく。また無濁となづく。また廣大となづく。また甘露となづく。また吉祥となづく。これを一名に無量の名をつくるとなづく。いかんが一義に無量の名をとくや。なを帝釋のごとし。(乃至)いかんが無量の義において無量の名をとくやと、佛如來のごとし。名けて如來となす。義異名異とす。また阿羅呵となづく。義異名異なり。また三藐三佛陀となづく。義異名異なり。また船師(一)となづく。また導師となづく。また正覺となづく。また明行足となづく。また大師子王となづく。また沙門となづく。また婆羅門となづく。また寂靜となづく。また施主となづく。また到彼岸となづく。また大無畏となづく。また大力士(二)となづく。また大丈夫となづく。また天人師となづく。また大分陀利となづく、また獨無等倡(五)となづく。また大福田となづく。また大智海となづく。また無相となづく。また具足八智(六)となづく。かくのごとき一切義異名異なり。善男子、これを無量義の中に無量の名をとくことあり。いはゆる陰のごとし。また名けて陰とす。また顚倒となづく。またなづけまた一義に無量の名をとくことあり。いはゆる陰(七)のごとし。また名けて陰とす。また顚倒となづく。またなづけて諦とす。またなづけて四念處とす。また四食となづく。また四識住處となづく。また名けて有とす。またなづけて道とす。またなづけて時とす。またなづけて衆生とす。またなづけて世とす。また第一義となづく。また三修となづく。いはく身戒心なり。また因果となづく。また煩惱となづく。また解脫となづく。また十二因緣(九)となづく。また聲聞辟支佛となづく。佛をまた地獄、餓鬼、畜生、人天となづく。また過去現在未來となづく。これを一義に無量の名をとくとなづく。善男子、如來世尊、衆生のためのゆへに。處のなかに略なとく。略のなかに廣をとく。第一義諦をときて世諦とす。世諦の法をときて第一義諦とす。抄出

【字解】一。阿羅呵　梵語アルハット(Arhat)の音譯。阿羅漢に同じ。應供、殺賊等と譯す。佛十號の一。

二。沙門　又は桑門、沙門那、室囉摩努、梵音シュラマナ（Śramaṇa）。勤息、止息など〻譯す。善法を勤め、惡法を止息するもの〻意。出家の道を修むる人を指す。

三。婆羅門　梵音ブラフマナ（Brāhmaṇa）淨行淨裔と譯す。印度四姓中の最高位に位する種族の名。但しこゝにては、眞理の體得者といふ程の意味で、佛の異名である。

四。施眼　佛の異名。佛因位の菩薩でゐらせられた時、尸毘國に生れて普く布施を行じ、遂に肉身を施さんことを決し。之を試さんとして化れる帝釋の盲目婆羅門に肉眼を與へられた。之によりて施眼を佛名としたことと思はれる。「ジヤータカマーラー」（『菩薩本生鬘論』原本の異本）に出づ。或は亦佛が吾等に智慧の眼を與へ下さるといふ意味に於いての名か。

五。大分陀利　大なる芬陀利華といふこと。梵音プンダリーカ（Pundarīka）白蓮華と譯す。こゝでは佛の異名。

六。具足八智　八智を具足する人の意。佛の異名。八智とは見道位にて得る苦法智、苦類智等の八種の無漏智にて、八恩に對するものであるが、こゝにては、如來の無漏の智慧を意味す。

七。陰　五陰。色受想行識。吾等の心身を分稱す。善法を陰蓋する五陰の意。

八。四念處　四念住ともいふ。三賢位のうち念處位に於いて修する觀法である。吾人は常に身、受（感覺）心、法（事物等）の四法に於いて、淨、樂、常我の四顚倒の妄見を起してゐる。この妄見を破らんが爲めに、智慧をもつて、身は不淨、受は苦、心は無常、法は無我と觀ずるものである。是を四念住といふ。そして別相念住

位にては、四法を別々に觀じ、總相念住位にては、すべて同時に觀ず。

九。十二因緣　十二因生、十二有支、十二緣起ともいふ。三界の迷の因果を十二に分ちて、衆生輪廻のさまを示したるもの。無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死。

無明（癡煩惱）、行（業作）は過去世の二因、之によりて、識（結生の位）名色（入胎中の五位）、六處（入胎中、眼等の根の生ずる位）、觸（出胎後二三歲の間、感覺丈の生活）、受（五六歲以後、境遇の刺戟を受け込む）の現在の五果あり、又愛（十五歲以後、愛欲の盛んなる時）、取（中年の貪煩惱の盛なる時）、有（前の煩惱によりて起したる行業）は現在の三因。生（果報を結ぶ位）、老死（受生以後）は未來の二果に分つのである。是を三世兩重の因果の十二因緣といふ。この外、刹那の十二因緣說、二世一重の十二因緣說あり。

【文科】　迦葉品第二文によりて涅槃の名義を廣說し給ふ一段。

【講義】　此故に如來世尊は法を說くに當りても、決定つてゐる型をもつてすることはない。即ち國にありては其國の風俗習慣に應ずる爲め、又時と場合に相應する爲めに、又は其人の根性や履歷や習慣に應ずる爲めに、又は衆生の根機に應ずる爲めに、一法の中に名と義の二つを說くのである。

さて此の名義に就いて大凡三門あり、第一は一名をもつてゐる法に就いて無量の名を說くこと。第二は一義に就いて無量の名を說くこと。第三は無量の義に就いて無量の名を說

涅槃の意義

くことである。

第一の一名に無量の名を說くとは、一例を擧ぐれば「涅槃」である。是は涅槃にして亦無生と名づける、迷の生を受けない義を表はす。亦無出と名づける。迷の巷に再び出ることはないといふこと。亦無作と名ける、自然の活動であつて故意に業作をせないこと。亦無爲と名づける。迷の努力を超えて無爲自然なること。亦歸依と名づける。畢竟の歸依所であるからである。亦窟宅と名づける。窟の住家のやうな堅固にして靜なること。亦解脫と名づける。煩惱から解脫るからである。亦光明と名づける。智慧明かなるが故である。亦燈明と名づける。自ら闇を破り他の闇を破るからである。亦彼岸と名づける。生死の此岸を超えてゐるからである。亦無畏と名ける。心に畏るゝ所ないからである。亦無退と名く。再び生死界に退轉することはないから。亦安處と名く。老病死等の憂なく畢竟の安穩處であるから。亦寂靜と名く。煩惱の擾鬧を離れてをるから。亦無相と名く。是といふ執ずべき相狀をもつてをらないから。亦無二と名ける。對比すべき何物もないから。亦一行と名く。唯一の業作であるから。亦清涼と名ける。煩惱の熱を離れたる清涼の天地であるから。亦無闇と名ける。恐痴の闇がないから。亦無礙と名ける。何物にも礙げられぬ無障礙の境であるから。亦無諍と名づける。涅槃を外にして一切の生活は諍ひの生活であるが、是は諍ひなき生活であるから。亦無濁と名づける。少しも煩惱惡業の濁りがないから。亦廣大と名づける。竪に永劫の三世を攝め、横に全法界を盡す程の廣大の天地であるから。亦甘露と名づける。法味は津々として甘露の如く微妙の味をもつてをるから。亦吉祥と名づく。世にこれ程の祝福すべきものはないから。之を一名に就いて無量の名を作るといふのである。

帝釋の異名

第二に、一義に就いて無量の名を說くといふのは、帝釋の如き是れである。經によれば帝釋を儒尸迦、婆蹉婆（女殿師と譯す）富蘭陀羅（調伏諸根と譯す）摩佉婆（無勝と譯す）因陀羅（光明と譯す）千眼、舍脂夫（舍脂は阿修羅の妻、帝釋を聟にせんと思うた。故に舍脂の夫といふ）金剛（金剛力士を有する故に）寶頂（須彌寶山の頂きに住する故に）寶憧等と說いてある。これは帝釋といふ一義にいろ〳〵の名を附して其一義の內容を表はしたものである。

如來の名義

第三に、無量義に就いて無量の名を說くといふは佛如來の如き是である。これには無量の義がある。そして又無量の名がある。第一に如來と云へば、上の佛如來とは、義も名も異つてゐる。佛如來は覺者如來の意にして、單に如來と云へば、眞如より來れる者の意。亦阿羅訶と名ける。是は阿羅漢と同じ音譯で、應供と譯す。供養を受くべき德者の意味で

ある。矢張、義も名も異つてゐる。亦三藐三佛陀と名ける。是は無上正眞道の梵語である この上もない正眞道を體得せる者といふ意、義も名も異つてゐる。亦船師と名ける。生死の流を渡す方であるから。亦導師と名ける。衆生を導いて生死を出でしむる師匠であるから。亦正覺と名ける。正しい覺者でゐらせられるから。亦明行足と名ける。明は智慧である。卽ち智慧の目と行の足を具へた方、智行圓備にてましますから。亦大師子王と名ける。獅子の百獸に王たる如く、如來は一切有情の王にてましますから。亦沙門と名ける。沙門は梵語、勤息、止息と譯す。善を勤め惡を息める意である。亦婆羅門と名ける。婆羅門とは淨行の意。如來は淨行の權化にてましますから、亦寂靜と名ける。亦施主と名ける。一切衆生に功德の寶を施し給ふ故に、亦到彼岸と名ける。迷の此岸より證りの彼岸に到り給ふた方であるから。亦大醫王と名ける。一切衆生の煩惱の病を治し給ふ方であるから、亦大象王と名ける。大象が威重をもつて群獸の中を行くが如き威德を具へ給ふ故に。亦大龍王と名く。神變不可思議の威德あることを龍王に譬へたものである。亦施眼と名ける。智慧の眼を施し給ふから。亦大力士と名ける。佛の十力を具へたる眞の意味の力士にてましますから。亦大無畏と名ける。四無畏の德を具へ給ふ故に、亦寶聚と名ける。

功德の寶を聚めたる方であるから。亦商主と名ける。亦得解脫と名ける。生死輪廻の囹圄より解脫した方であるから。亦大丈夫と名ける。勇敢に正道に直進する大丈夫であるから。亦天人師と名ける。人間天上の大導師にてましますから。亦大分陀利と名く。煩惱の淤泥に汚さるゝことはないから。亦獨無等侶と名ける。如來は天上天下に等侶なき獨尊にてましますから。亦大福田と名ける。人天の供養に應じて福を生ずること大福田のやうである。亦大智福と名ける。智慧海の如くにてましますから。亦無相と名ける。虛空が諸の相を離れて而も一切に徧滿して礙へられることのないやうに、如來も亦無相にてまします。亦具足八智と名ける。

上に上げた例の如きは、一切の義異り、名も亦異るものである。善男子よ、是を無量義の中に無量の名を說くといふのである。

復上にあげた第二の一義に無量の名を說くといふ例を擧ぐれば、所謂陰がそれである。陰を亦顚倒と名ける。五陰は眞理に比ぶれば全く倒であるから。亦諦とも名ける。卽ち有漏の五陰の法は苦諦集諦であり、無漏の五陰は道諦であるからである。亦四念處とも名け、亦四食とも名け、四識住とも名ける。亦有とも名ける。五陰は三有、又は二十五有に

攝められるものであるから。亦道と名ける。五陰は六道の攝であるから。亦時と名ける。因果々々と引き續く時間に束縛せられるものであるから。亦衆生と名ける。衆生の心身を組み立てゝゐるものであるから。亦世と名ける。世間とはこの五陰を抽象的に一般化したものであるから。亦第一義と名ける。五陰の相は世間に屬するものであるが、其體は第一義諦であるといふこと。亦三修と名ける。五陰の中、第一の色は身戒と名け、後の受想行識の四は心と名ける。亦因果と名ける。煩惱の因によりてこの五陰の果を得、因果は離すことが出來ないから五陰を因果と名ける。又解脫と名ける。煩惱を離れたる無漏の五陰のこと。又十二因緣と名ける。この五陰は三世に亘りて輪廻する、そして其形式は十二因緣によりて示される。これによりて五陰を十二因緣と名ける。又聲聞、辟支佛、地獄、餓鬼畜生、人天と名ける。是等は五陰假和合の上に其性質によりて命名したものである。五陰の名といふのである。亦過去現在未來と名ける。五陰が三世に移り異る方面に就いて名く。

世諦と第一義

是を一義に無量の名を說くといふのである。善男子よ、如來世尊は衆生の根機に隨ひて廣の中に略を說き、略の中に廣を說き、或は又第一義諦を說いて、是を實際世間のことと なし。又は現實のことを說いて、それを其儘第一義諦とする。卽ち現實を離れて第一義諦を說けば空想となり、第一義諦を離れて現實を談ずれば。點睛なき龍の如く無意味なものとなる。如來の智慧力は此間の消息を自由に傳へることが出來るのである。略出

第七科　梵行品の文

又言、迦葉復言、世尊第一義諦亦名爲レ道亦名二菩提一亦名二涅槃一乃至槃となづく。乃至

【讃方】又のたまはく、迦葉またまふまく、世尊、第一義諦をまた名けて道とす。また菩提となづく。また涅槃となづく。乃至

【文科】梵行品の文によりて、智慧卽涅槃を明し給ふ。

【講義】又曰く、迦葉重ねて申すやう、世尊よ、第一義諦を名けて、道卽ち眞實の智慧と名け、亦梵語にては菩提（道と譯す）と云ひ、又は涅槃と名けます。

第八科　迦葉品の文

又言、善男子我於二經一中一說二如來一身一凡有二二種一一者生身二者法身言二生身一者卽方便應化之身如レ是身者可レ得レ言二是生老病死長短黑白是此是彼是學無學一我諸弟子聞二是說一已不レ解二我意一唱言如來定說二佛身一是有爲法一法身卽是常樂我淨永離二一切生老病死

非白非黑非長非短非此非彼非學非無學若佛出世及不出世
常住不動無有變易善男子我諸弟子聞是說已不解我意唱言
如來定說佛身是無爲法

【讃方】又のたまはく、善男子、われ經のなかに於て如來の身をとくに、おほよそ二種あり。一には生身、二には法身なり。生身といふは卽これ方便應化の身なり。是のごとき身はこれ生老病死長短黑白是此是彼是學無學と言ふことを得べし。我もろ〳〵の弟子、この說を聞きをはりてわが意をさとらざれば、唱ていはく、如來さだめて佛身はこれ有爲の法なりと說かんと、法身はすなはちこれ常樂我淨なり。ながく一切生老病死、非白、非黑、非長、非短、非此、非彼、非學、非無學を離れたまへり。もしは佛の出世および不出世に、つねに動せずして變易あることなけん。善男子、我がもろ〳〵の弟子、この說を聞きをはりて、我が意をさとらざれば唱ていはく、如來さだめて佛身はこれ無爲の法なりと說きたまへりと。

【文科】迦葉品の第一文によりて生身と法身を述べ給ふ。

【講義】又曰く、善男子よ、我經の中に如來の身に凡そ二種あることを說いた。一は生身、二は法身である。生身といふのは、他を化益せんが爲めに方便して示現したもので、是を方便應化身と名ける。この應化身の如きは、生老病死に移され、長短黑白等の相を示し、彼此差別し、是はまだ修道位にあるとか、彼はもう學ぶことを要せぬ完成した無學果の人であるといふやうに批判せられる佛である。故に如來の意を了解することの出來ない我弟子は此說を聞いて、「如來ははつきりと佛身は是れ因果に縛らるゝ有爲法であると說かれた」と云ふであらう。是は佛身の一面を知つて他面を知らぬ言分である。

次に法身は常住にして眞樂、絕對眞我、絕對淸淨である。永へに一切の老病死を離れてをる。白でもなく、黑でもなく、長にあらず、短にあらず、彼此の別ちなく、學、無學等の智識人格の差別はない。そして又佛の出世と不出世に關せず。常に變動することなく變易ることはない。善男子よ、然も此說を聞いて其眞意に觸れることの出來ない我弟子は「如來ははつきりと佛身は無爲自然の活動しない法である」といふであらう。是も佛身の一面を固執してゐるのである。

卽ち生身法身の二つは離すことは出來ないのである。

又言、如我所說十二部經或隨自意說或隨他意說或隨自他意說乃至善男子如我所說十住菩薩少見佛性是名隨他意說何故名少見十住菩薩得首楞嚴等三昧三千法門是故了了自知當

得阿耨多羅三藐三菩提不見一切衆生定得阿耨多羅三藐三菩提是故我説十住菩薩少分見佛性善男子我常宣説一切衆生悉有佛性是名隨自意説一切衆生不斷不滅乃至得阿耨多羅三藐三菩提是名隨自意説一切衆生悉有煩惱覆故不能得見我説如是汝説亦爾是名隨自他意説善男子如來或時爲一法故説無量法抄出

【讀方】またいはく、わが所説の十二部經のごとき、十住の菩薩すこしく佛性をみる、これを隨他意説となづく。何を意説なり。乃至善男子、わが所説のごとき、十住の菩薩は首楞嚴等の三昧、三千の法門を得たり。このゆへに了々に以てのゆへに少見となづくるやも、十住の菩薩たいふ。その中にも今は十地の菩薩全體を指すのではなく、第十地の菩薩をいみづから知りて、まさに阿耨多羅三藐三菩提をうべくとも、一切衆生さだめて阿耨多羅三藐三菩提をえんことをみず。この故に我十住の菩薩、少分佛性をみるととく。善男子、我つねに一切衆生悉有佛性と宣説する。これを隨自意説となづく。一切衆生は不斷不滅にして、乃至阿耨多羅三藐三菩提をうる、これを隨自意説となづく。一切衆生ばことごとく佛性、あれども、煩惱おほへるが故に見ることを得ること能はずと。我説かくのごとし。なんぢが説またしかなり。これを隨自他意説となづく。善男子、如來あるときは一法のためのゆへに無量の法をとくと。抄出

【字解】一。十住菩薩　『瓔珞經』『華嚴經』等の所説によれば十住菩薩は、菩薩五十二位のうち、第十一位より第廿位までの菩薩を指すのであるが、『涅槃經』には菩薩の階級を五十位とし、この十住は五十位中の第四十一位より五十位まで卽ち十地の菩薩たいふ。その中にも今は十地の菩薩全體を指すのではなく、第十地の菩薩をいふので、等覺の菩薩を指すのである。

二。首楞嚴三昧　梵音シューラムガマ、サマードと(Śūraṃ-Gama-Samādhi)勇健定、健相定等と譯す。菩薩この三昧を得れば、諸〻の煩惱魔及び魔人も破壞するとが出來ないといふ。

三。三千法門　三千とは全法界の總稱である。卽ち地獄等の十界の各〻に十界を具へてゐるから、合せて百界、この百界の一々は、凡ての事理に含まれてある十種の普遍性たる十如是(如是相、如是性等)を具へてゐるから千如となる。これに三世間(五陰世間、衆生世間、國土世間)を乘じて三千となる。故に三千の法門とは、一切法界の法門、卽ち一切の法門といふと。

【文科】迦葉品の第二文によりて、悉有佛性の意義を明し給ふ。

【講義】又曰く、我説く所の十二部經の如きは、或は自らの意のまゝに説いた隨自意の説もあり、或は他人の意に隨ひて説いた隨他意の説もあり、或は又この二つを合はせた隨自他意の説もある。乃至

善男子よ、我嘗つて經中に「十住の菩薩は少しく佛性を見る」と説いたのは、是は隨他

意の説である。こゝに何故に「少しく佛性を見る」と説いたかといふに、十住の菩薩は首楞嚴等の三昧、三千の法門を心に會得してをる。夫であるから自ら無上正眞道を得ることが出來るといふことは了々として火を視るより明かなのである。併し自分に就いては左樣に證りを得るの確信を得てゐるけれども、一切衆生が定めて自分と同じやうに無上正眞道を得るといふことを知見することは出來ない。是れでは自分丈の解決であつて他を攝めることは出來ないから、我「十住の菩薩は少分に佛性を見る」といふたのである。是れ隨他意方便説たる所以である。

善男子よ、我常に「一切衆生は悉く佛性を有てをる」と説いた。是を隨自意説と名け る。我知見をもつてすれば一切衆生は斷えることなく滅することなく、乃至必ず無上正眞道を得るのである。是は我自らの知見に隨つて説いたのである。

然るに一切の衆生は悉く佛性はあるが、煩惱に覆ひ隱されてをるから能く佛性を知見することは出來ない。我説もこの通りであるが、汝の説もこの通りであると云ふのが、隨自他意の説で、自分も是でよく、他人も納得することが出來るから此の名がある。

善男子よ、如來は或時には一法を説き明かさんが爲めに、無量の法を説くことがある。抄

【餘義】一。玆に十住の菩薩といふは、【字義】にも出づる通り、等覺の菩薩のことである。普通十住の菩薩といへば十信位、十住位、十行位の十住のことであるが、『涅槃經』では十地の菩薩を十住の菩薩と呼んである。『十住毘婆娑論』、『十住斷結經』の十住と同じいのである。それで十住の菩薩といふと、十地の菩薩のことである。又この處の用語上、總じて十地を指すのではなく第十地の菩薩を指すのである。處が、『涅槃經』では別に等覺位といふものを立てず、第十地の菩薩、等覺後身の菩薩としてあるから、今玆に單に十住の菩薩とあるのも、第十地等覺の菩薩を指したものである。『北本涅槃』三十四、『南本涅槃』三十二に、「後身菩薩佛性有ㇾ六。一常、二淨、三眞、四實、五善、六少見」とあり、等覺最後身の菩薩は自身成佛のことは明了に知るけれども、一切衆生悉く佛性を具することを知ることが出來ない。故に少見佛性といふのである。それで『北本涅槃』二十七、『南本涅槃』二十五には『十住菩薩所見佛性如ㇾ夜見ㇾ色、如來所見如ㇾ晝見ㇾ色』とあるのである。

今我が聖人は、玆にこの經文を引用して他力攝取の行者は、この世に於て、完全に佛身の內容を知る能はず、又自分の證悟を圓かに開くことは出來ないが、他力本願力の回向に依つて、肉體の囹圄を脫して、安樂淨土に生ずる時、完全に佛性を開顯することを示し

給ふのである。それで我が聖人は私釋に入つて、この卷の終りに今一度この經語を引用し給ふてある。

第九科　獅子吼品の文

又言、一切覺者名爲佛性、十住菩薩不得名爲一切覺故、是故雖見而不明了、善男子見有二種、一者眼見、二者聞見、諸佛世尊眼見佛性如於掌中觀阿摩勒、十住菩薩聞見佛性故不了了、十住菩薩雖能自知定得阿耨多羅三藐三菩提、而不能知一切衆生悉有佛性、善男子復有眼見、諸佛如來十住菩薩眼見佛性、復有聞見、一切衆生乃至九地聞見佛性、菩薩若聞一切衆生悉有佛性、心不生信、不名聞見、乃至師子吼菩薩摩訶薩言、世尊一切衆生不能知如來、心相當云何觀而得知耶、善男子一切衆生實不能知如來、心相若欲觀察而得知者有二因緣、一者眼見、二者聞見、若見如來所有、身業當知是則爲如來也、是名眼見、若覺如來所有、口業當知是則爲如來也、是名聞見、若見色貌、一切衆生無與等者當知是則爲如來也、是名眼見、若聞音聲、微妙最勝不同衆生所有、音聲當知是則爲如來也、是名聞見、若見如來所作、神通爲衆生、爲利養、若爲衆生、不爲利養、當知是則爲如來也、是名聞見、略出

是名眼見、若觀如來、以他心智觀衆生時、爲利養、說爲衆生、說若爲衆生、不爲利養、當知是則爲如來也、是名聞見、

【讃方】　又いはく一切覺者をなづけて佛性とす。十住の菩薩は名けて一切覺とすることを得ざるが故に、この故にみるといへども明了ならず。善男子、見に二種あり。一には眼見、二には聞見なり。諸佛世尊はまなこに佛性をみそなはすこと、掌の中において阿摩勒菓をみるがごとし。十住の菩薩、佛性を聞見すれども、ことさらに了々ならず。十住の菩薩たゞよく自さだめて阿耨多羅三藐三菩提を得ることを知りて、一切衆生こと〳〵く佛性ありと知ることあたはず。善男子、また眼見あり。諸佛如來と十住の菩薩とは佛性を眼見す。また聞見することあり。一切衆生乃至九地までは佛性を聞見す。菩薩もし一切衆生こと〳〵く佛性ありときけども心に信を生ぜざれば聞見となづけすと。（乃至）師子吼菩薩摩訶薩まふさく。世尊、一切衆生は如來の心相を知ることを得ることあたはず。まさにいかんが觀じて知ることを得べきや。善男子、一切衆生は實に如來の心相を知ることあたはず。もし觀察して知ることを得んとおもはゞ二の因緣あり。一には眼見、二には聞見なり。もし如來所有の身業をみたてまつらんは、當に知るべし、是すなはち如來とす。これを眼見となづく。もし如來

所有の口業を觀ぜん。まさに知るべし。これすなはち如來とす。これを聞見となづく。もし色貌をみること、一切衆生のともに等しきものなけん。まさに知るべし。これすなはち如來とす。これを眼見となづく。もし音聲をきくに微妙最勝にして、衆生所有の音聲にはおなじからじ。まさに知るべし、これすなはち如來とす。これを聞見となづく。もし如來所有の神通をみたてまつらんに、衆生の爲とやせん、利養の爲とやせん、もし衆生の爲にして利養のためにせず。まさに知るべし。これすなはち如來とす。これを眼見となづく。もし如來を觀ずるは、他心智をもて衆生を觀ずるとき、利養の爲にとき、衆生の爲にとかん。もし衆生の爲にして利養の爲にせざらん。まさに知るべし、これすなはち如來とす。これを聞見となづく。略出

【字解】一。阿摩勒果　梵音アーマラカ(Āmalaka)寶瓶と譯す。阿摩勒樹の果實の稱。餘目子と譯す。マンゴーともいふ。味の美なること、世界の果實中の最上と稱せらる。

【文科】獅子吼品の文によりて、佛性を知見することを述べ給ふ一段である。

佛性智見論

【講義】又曰く、眞に佛性を知見した人を一切覺者と名ける。だから一切覺者を佛性と名けるのである。然るに十住の菩薩は一切覺者とは名けることは出來ない。卽ち十住の菩薩は佛性を知見しても明了ではない。善男子よ、「見る」といふことに就いて二種ある。一は眼見、二は聞見である。諸佛世尊は眼に佛性を見はすこと、例へば掌中にある阿摩勒業を見るやうなものであるが、十住の菩薩は佛性を直ちに知見することは出來ず、唯聞見するのみであるから、了々分明に見ることは出來ない。その內容を云へば、十住の菩薩は唯自身の無上正眞道を得ることに就いては決定心をもつてゐるが、一切衆生悉く佛性を具へてゐると云ふことは知見することは出來ない。かやうに一切衆生の有佛性を知ることの出來ないのは、裏から云へば自身の佛性を明了に知見することが出來ないことを示してゐるのである。

善男子よ、復眼見に就いて云へば、諸佛如來も十住の菩薩も共に佛性を眼見する。復聞見に就いて云へば、一切衆生から、泝つて九地の菩薩までは佛性を聞見する。但し「一切衆生悉く佛性あり」といふことを聞いても、心に信知することがなければ聞見とは名けない。乃至

師子吼菩薩摩訶薩、世尊に申し上げるやう、一切衆生は如來の御心も其相好と共に知見し奉ることは出來ない。いかやうに觀察したならば其心相を知見することが出來るでありませう。

佛答へて、善男子よ、誠に一切の衆生は如來の智慧、相好を知見することが出來ずにをる。若し觀察の方法によりて知りたいと願ふならば、此に二つの方法がある。一は眼見、

二は聞見である。若し如來の具へ給ふ身業の功德を見たてまつるならば、それが則ち如來を見奉つたものである。是を眼見と名ける。眼で身業を見奉つたからである。次に如來の具へ給ふ口業の功德を觀ずるならば、それが卽ち如來を見奉つたのである。是を聞見と名ける。耳で如來の御聲を聞き奉つたからである。

如來の色貌を見奉るに、一切衆生の色貌の何れも及び難い殊妙の相好を觀ずるならば、それは卽ち如來にてゐらせられる。是を眼見と名ける。若し又如來の音聲の微妙に最勝てましますを聞き、一切衆生の音聲の能く及ぶ所でないことを知るならば、夫が則ち如來にてゐらせられる。是を聞見と名ける。

若し又如來の現じ給ふ神通を見奉るに、之は衆生の爲めにし給ふ所であらうか、又は御自身の利養の爲めにし給ふ所であらうかを考へ、若し衆生化益の大慈悲心からであつて、決して利養の爲めなぞではないといふことを信ずるならば、夫が卽ち如來である。如來を見奉つたのである。是を眼見と名ける。卽ち眼で神通を見るとともに其神通の眞意義たる如來心に徹したからである。若し如來の御心を觀じ奉るに、如來が他心智をもつて衆生を觀はして、そして其機に應じて法を說き給ふことを知りて、それは如來御自身の利養の爲めか、又は衆生を化益する爲めかといふことを考へ、若し衆生の爲めにして、決して如來自身の利養の爲めではないといふことを信ずるならば、是が則ち如來である。如來心を知見し、如來心に觸れ奉つたのである。是を聞見と名ける。

第三節　論文證

第一項　『淨土論』の文

【大意】以上經文證了りて『淨土論』の文を引用し給ふ。初めに天親菩薩の自督の文をあげて佛身を示し、次に其歸依の對象たる佛土の相を說く。以下の釋文は全く此文の註脚として、其內容を闡明するに過ぎない。

淨土論曰、世尊我一心歸命盡十方無礙光如來願生安樂國觀彼世界相勝過三界道究竟如虛空廣大無邊際已上

【說方】淨土論にいはく、世尊、われ、一心に盡十方無礙光如來に歸命したてまつりて、安樂國に生ぜんと願ず。かの世界の相をみそなはすに三界の道に勝過せり。究竟して虛空のごとし。廣大にして邊際なしとのたまへり。已上

【字解】一。三界

- 三界
  - 欲界
    - 地獄界
    - 餓鬼界
      - 四王天（持國天王、廣目天王、多聞天王、增長天王）
    - 畜生界
    - 修羅界
      - 忉利天（又は三十三天ともいふ）
      - 夜摩天
    - 人間界
      - 兜率天（又は覩史多天）
    - 六欲天
      - 化樂天（又は樂變化天）
      - 他化自在天
  - 色界（十八天）
    - 初禪天（梵衆天、梵輔天、大梵天）
    - 二禪天（小光天、無量光天、光音天）
    - 三禪天（少淨天、無量淨天、徧淨天）
    - 四禪天（無雲天、福生天、廣果天、無想天、無煩天、無熱天、善見天、善現天、色究竟天）
  - 無色界
    - 空無邊處天
    - 識無邊處天
    - 無所有處天
    - 非想非非想處天

欲界　この界の衆生は地獄より天界まで、有情多く食欲、色欲、眠欲等の諸欲に耽ける故にこの名あり。

色界　この界の衆生は穢しい欲を離れ、清淨の色質を有し、男女の別なく、衣自然にいたり、光明を食とし、言語としてゐる故にこの名あり。

無色界　この界は總て形色なく、唯識丈がある。故に此名あり。色界が色身に縛られて、自由を得ることを得ないのを厭ふて此世界に進み入るのである。

【文科】『淨土論』の文によりて佛身佛土を顯示し給ふ一段。

【講義】『淨土論』に天親菩薩宣給はく、釋迦牟尼世尊よ、我は一心一向に盡十方無礙光如來を念じ奉り、その御國たる安樂淨土に生れんことを願うてをることであります。彼の安樂世界の相を觀たてまつるに、迷の巷たる三界遙に超え勝れ、全法界の際を究めて宛然大虛空のやう、其廣遠にして雄大なること無限絶對にして邊際がありません。

【餘義】一。茲に『淨土論』から二個の文が引かれてある。初めは所謂建章の四句で、三念門の偈である。後は器世間十七種莊嚴の中、莊嚴清淨功德成就と、莊嚴量功德成就との文である。建章の四句は佛身を示し、二種莊嚴の文は佛土を示す文である。

二。この佛身を示す建章の四句について一言せねばならぬ。この四句は天親菩薩が自督

淨土論の佛身佛土

の信仰を告白し給うた偈であつて、我が聖人の最も愛好尊崇し給うた語の一つである。『信卷』序には一心の華文と讃し、『證卷』には廣大無礙の一心とたゝえられてある。他力信仰の最も充實した直截な告白である。しかしてこの文は見樣に依つては、佛身を證示する文ともなり、行を示すものともなり、信を證明するものともなるのであるから、我が聖人は文々を引き給はぬけれども、『行卷』には、『論註』の三念門の釋文に依つて、この文を解し『信卷』には、この文中一心の語に依つて有名なる三一問答を引き起し給うてある。『略本』は行中攝信の明し方の書であるが、その中(四丁左)には、行不離の信の證文として引用し給うてある。又『愚禿鈔』上十二丁にもこの文全體を引用なされてあるが、これは信の證文、行の證文といふ樣に片寄つたのでなく、云はゞこの三義すべての證文としてゞあらう。今茲にこの三念門の偈を引き給ふは前にもいふ通り、佛身の證文であつて、我等の歸崇すべき本佛、信仰の對境を具體的に擧示して下されたのである。聖人は、御手紙にて慶信房に敎へ給ふ中(『末燈鈔』三十六丁)に、

南無阿彌陀佛をとなへてのうへに、無礙光如來とまうすはあしきことなりと候なることゝ、きはまれるひがことゝきこえ候へ。歸命は南無なり。無礙光佛は光明なり、智慧なり、この智慧はすなはち阿彌陀佛なり。阿彌陀佛の御かたちをしらせたまはねば、その御かたちをたしかに〳〵しらせまいらせんとて、世親菩薩御ちからをつくしてあらはしたまへるなり。

と宣うてあるので、聖人の御思召は充分に伺はれるのである。この外、『唯信鈔文意』十八丁、『一念多念證文』二十一丁、『末燈鈔』六丁、みな天親菩薩が我等の如來を無礙光如來と示し給へることを擧げて感謝なされてある。

三。常識的にいへば、歸命盡十方無礙光如來の歸命は梵語南無の譯語で能歸、尋十方無礙光如來は正しく所歸の佛體で十字が二つに分れるものであることは申すまでもないが、我が聖人は、その宗敎的實踐からして、この十字共に彌陀の尊號となされたことは平常いふ通りである。能歸の力も全く佛德佛力だといふ理由に依るのである。かういふ風に力を二つに分けないのが他力敎の妙味で、また宗敎的なところである。幾つにも分析して事を複雜にするのは非宗敎的なので、宗敎は一にして全なる力を見出すことである。十字全體が尊號であるといふ所に、いふ可からざる宗敎的妙味が躍動し來るのである。それで聖人は當卷の終り私釋の中に、「言眞佛者、……論曰三歸命盡十方無礙光如來一也」と宣うてゐら

せられる。

第四節　釋文證

【大意】上に論文を引きしにより、是より以下は釋文である。初めに曇鸞大師の『論註』と『讃阿彌陀偈』の文である。『論註』の六文は淨土の無爲涅槃界の諸德を顯はし、『讃阿彌陀偈』の三文は、龍樹菩薩の讃嘆等あれども、總じて佛身を證成せらる。

次に善導大師の釋文を擧ぐ、『玄義分』『序分義』『定善義』『法事讃』の四文であるが、要するに、彌陀の報身報土を顯示するにある。

終りに憬興師の『述文讃』であるが、矢張り報身報土を助成する文として引用せらる。

第一項　曇鸞大師の釋文

第一科　『論註』の文

註論曰、莊嚴清淨功德成就者、偈言、觀彼世界相勝過三界道、故、此云何不思議有、凡夫人煩惱成就、亦得生、彼淨土、三界繫業畢竟不牽、則是不斷煩惱得涅槃分、焉可思議、

【讀方】註論にいはく、莊嚴清淨功德成就は、偈に觀彼世界相、勝過三界道とのたまへるが故に。これいかんぞ不思議なるや。凡夫人煩惱成就せるありて、またかの淨土に生ずることをうるに、三界の繫業、畢竟して牽ず。すなはちこれ煩惱を斷ぜずして涅槃分をう。いづくんぞ思議すべきや。

【文科】『論註』清淨功德の文によりて、上の論文の內容を表はし給ふ。

【講義】曇鸞大師の『淨土論註』に曰く。『淨土論』に明す所の依報十七種莊嚴の總相たる莊嚴清淨功德成就とは如何なるものかと云ふに、論の偈文に『觀彼世界相、勝過三界道』といふてある。この淨土の莊嚴が何故に不思議の德を具へてゐるといふのかと云へば凡そ阿彌陀佛の本願を信ずる凡夫が、その煩惱を缺目なく具へてをりながら、彼安樂世界へ生ずるに、三界に繫屬けるその惡業が全く力を失ふて生死界へ牽きつけることはない。是が則ち煩惱を斷ち切ることなくして、涅槃證果の分齊を得るといふのである。かやうなことは通常の見解をもつてはどうしても考へることの出來ない不可思議のことでないか。

【餘義】一。これから、曇鸞大師の釋文が引用してある。『論註』から六文、『讃阿彌陀佛

偈』から三文、『論註』の六文はすべて佛土を證成し、『讃阿彌陀佛偈』の三文は佛身を證成するのである。

二。『論註』の六文といふは一、清淨功德の釋、二、性功德釋、三、大義門功德釋、四、不思議力釋、五、自利々他釋、六、不虛作住持釋である。この六文の證成する各の意味については古來多數の異說があるが、六文を一連にしてその證成の意味を探つて見ると、次の樣なことになると思はれる。

卽ち、安樂淨土は清淨無爲の涅槃界であつて（清淨功德の釋）この涅槃界は法性に隨順し、法本に乖かず、法藏菩薩の大願大行の因力から積集せられ、平等一味にして（性功德の釋）女人根缺二乘のものも報土に往生すれば直に皆清淨無爲法身を證得し、（大義門功德の釋）誠に不思議中の不可思議なる報土である（不思議力の釋）。これは彌陀如來の自利利他圓滿の德の顯現であつて、無量の德があるからである（自利々他の釋）。かくの如きは實にその源を探ぬれば、如來の大悲本願力の住持し給ふに依るのである（不虛作住持の釋）。

更に約言すれば、彌陀の淨土は清淨なる報土であると一括し、進んでこの不可思議の報土は法性に隨順するといひ、遂に願力成就の報土であることを證成し給ふたのである。

それで、當卷の終り、私釋に入つて、「由二選擇本願之正因一、成二就眞佛土一」と宣ふたのである。『入出二門偈』の初めに「此中佛土不思議、……大願業力所二成就一」とあるはこれと同じい說き明し方である。

三。淸淨功德の釋を先きに『證卷』會本六の十丁に引かれてある（第二卷七二五頁）。あそこでは、上の諸文を總括つて最後に置かれて、極樂へ往生する人は淸淨にして煩惱を斷ぜずして涅槃を得ると、人に就いて淸淨を示してあるのである。今玆では『論註』引用の六文の總文として最初に引いたのであるが、『證卷』に引用せられた場合と異なり、淨土の土體の淸淨なすがたを證成せられたのである。

四。不虛作住持の釋文も、『行卷』會本三の三十一丁に引用せられてあるが（第一卷七一七頁）、其處では一乘海の釋に備へ、名號の利益の證文として引いてあるのである。今は佛本願力の四字が要用であるので、前にいふ通り、本願力の成就報土であることを示すのである。

『讃彌陀偈』の引用文のことは、其の下の餘義に於いて更にいふであらう。

又言二正道大慈悲出世善根生一此二句名二莊嚴性功德成就一乃性、

是本，義言此淨土ハ隨順法性ニ不乖法本ニ事同華嚴經，寶王如來，性起，義ニ又言積習成性，指法藏菩薩集諸，波羅蜜積習所成亦言性者是聖種性序法藏菩薩於世自在王佛，所悟無生忍爾時，位名聖種性ト於是性，中發四十八大願修起此土即曰安樂淨土是彼，因，所得果中說因故名爲性又言性者是必然，義不改，義如海，性一味，衆流入者，必爲一味，海，味不隨彼改也又如人身，性不淨故，種種，妙好色香美味入身皆爲不淨安樂淨土諸往生者無不淨，色無不淨，心畢竟皆得清淨平等無爲法身以安樂國土，清淨，性成就故正道大慈悲出世，善根生者平等，大道也平等，道所以名爲正道者平等是諸法，體相以諸法平等故發心等發心等，故道等道等故大慈悲等大慈悲是佛道，正因，故言正道大慈悲慈悲有三緣一者衆生緣是小悲二者法緣是中悲三者無緣是大悲大悲，卽是出世，善也安樂淨土從此大悲生故，故謂此大悲爲淨土之根故曰出世善根生。

【讀方】又、正道の大慈悲は出世の善根より生ずといへり。此の二句は莊嚴性功德成就と名づく。乃至性はこれ本の義なり。いふこゝろはこの淨土は法性に隨順して法本にそむかず。事華嚴經の寶王如來の性起の義におなじ。またいふこゝろは積習して性をなす。法藏菩薩をさす。諸波羅蜜をあつめて積習して成ぜるところなり。また性といふはこれ聖種性なり。はじめ法藏菩薩、世自在王佛のみもとにして無生忍をさとる。爾時のくらゐを聖種性となづく。この性の中にして四十八の大願をおこして、この土を修起したまへり。すなはち安樂淨土といふ。これかの因の所得なり。果のなかに因をとく。かるがゆへになづけて性とす。また性といふはこれ必然の義なり。不改の義なり。海の性一味にして、衆流いるものかならず一味となりて、海の味ひ彼にしたがひて改たまらざるがごとし。また人身の性不淨なるがゆへに、種々の妙好色香美味、身にいりぬればみな不淨となるがごとし。安樂淨土はもろ〳〵の往生の者、不淨の色なし。不淨の心なし。畢竟してみな清淨平等無爲法身をえしむ。安樂國土清淨の性成就したまへるをもての故なり。正道の大慈悲は出世の善根より生ずといふは、平等の大道なり。平等の道をなづけて正道とするゆへは、平等はこれ諸法の體相なり。諸法平等なるを以ての故に發心ひとしきがゆへに道ひとし。道ひとしきがゆへに大慈悲ひとし。大慈悲はこれ佛道の正因なるがゆへに。正道大慈悲といへり。慈悲に三緣あり。一には衆生緣、これ小悲なり。二には法緣、これ中悲なり。三には無緣、是れ大悲なり。大悲はすなはちこれ出世の善なり。安樂淨土はこの大悲より生ずるが故なればなり。故にこの大悲をいひて淨土の根とす。かるがゆへに出世善根生といふなり。

【字解】一。法性　諸法の體性。眞如のこと。

二。法本　諸法の根本。

三。『華嚴經』寶王如來性起義　舊譯『華嚴經』第三十四卷に寶王如來性起品あり。一切萬衆の性起を說いてある。「寶」は摩尼寶珠、寶を出すこと自在であるから「王」の字を添ふ。「王」字に自在の義があるからである。萬有が性より顯はれるのもこのやうであるから、「寶王」をとつて喩としたのである。「性」と「如」とは眞理、「起」と「來」とはその用である。故に如來と性起と全く同一である。彌陀の淨土の性起の義は之と同じであるといふのである。

四。諸波羅蜜　布施、持戒等の六波羅蜜等の功德行をいふ。

五。聖種性　菩薩十地の位を指すのであるが、今は十地中の初地を云ふ。卽ち修道位の方面からこの性を釋したのである。

【文科】『論註』性功德の文によりて安樂淨土の性功德を顯示し給ふ。

【講義】又曰く、「正道の大慈悲は、出世の善根より生ず」といふ此二句は莊嚴性功德成就と名ける。乃至

この中「性」とは根本といふ義である。安樂淨土は眞如法性の理に隨順し、法の根本に乖かない。卽ち諸法の玄底に觸れて自と性起した佛土である。『華嚴經』第三十四卷（舊譯）に說

かれたる寶王如來性起の義と同じいのである。彼處には萬有の性起が說かれてある、寶の王たる如來寶珠が自然に一切の寶を生むが如く眞理の玄底から萬有の性起することを明すその性起が卽ち如來である。これ法の自性たる眞理の活躍する光景であるからである。今安樂淨土はこの法性から性起したことを表はして性功德成就といふたのである。

又性といふは積習の義である。それは法藏菩薩を指す。菩薩は諸〳〵の因行の功德たる六波羅蜜を集めて、この淨土を建立せられた。この意味に於いて性は修行によりて積みたる功德の謂ひとなる。

性は法性性起の義とは法の不變絕對なる先天性に就いて表はし、今の積習の義とは努力によりて起つた後天的の功德力を指す。但し是は兩面より述べたるもので一體の兩面とも云ふべく、離すことは出來ない。

又性といふは聖種性のことである。卽ち菩薩初地の位を指す。これは法藏菩薩が最初、世自在王佛の所にありて無生忍の證を得たが、それは初地の位であつた。この初地の聖種性の中に四十八の大願を發して、此安樂淨土を修行によりて建立せられたのであるから、この淨土は實に彼因位の聖種性の生んだ結果である。今この建立せられた淨土といふ果

から眺めて見ると、この聖種性は因である。夫故にその因を性と名けたのである。

又性は必然の義である。不改の義である。例へて云へば海の性としてどれ程澤山な河が注いでも、一度海に入れば皆な一味鹹水となつて仕舞う。かやうに海水が自然に衆流を呑んで一味となし、決して衆流によつて其性を變へないといふ所が性の性たる特質である。又人身の性はもと不淨なものであるから、どれ程妙好に香ばしい種々の美味でも、一度人體の中へ入ると皆な不淨となるやうなものである。

これと同樣に安樂世界は、諸の往生する人達はいかなる不淨な人でも、一度往生すれば不淨の身もなく、不淨の心もない。すつかり清淨にして平等なる無爲法身を成就せしむる。安樂國土が清淨の性を成就してをるといふのは、是をいふのである。

「正道の大慈悲は、出世の善根より生ず」といふのは、平等の大道といふことである。平等の道を正道と名くる所以は、この平等といふことは單に差別を離れてゐるといふ意味ではなく、是は一切諸法の本體の相を云ひ表はしたのである。諸法の表面は千差萬別であるが、その根本に探り入ると普通平等の一味相を知見することが出來るのである。如來は實にこの諸法の根本たる平等に順じて大願を起されたものであるから、其發願は亦平等である。この因位の發願が平等であるから、それによりて得たる菩提の智慧も亦平等である

この智慧が平等であるからそれから起る大慈悲心も亦無緣平等の大慈悲である。そして此大慈悲は佛道に至るの正因である。夫故に正道の大慈悲と云はれたのである。

抑も慈悲に三緣の慈悲がある。一は衆生緣、是は衆生を緣じて起す慈悲で、凡夫及び有學の二乘（聲聞、緣覺）の人達が起す小悲である。二は法緣、是は無學果の二乘、及び初地の位に入らぬ菩薩の起す慈悲で、衆生といふ假名の上ではなく、その衆生を組み立てゝゐる心身たる五蘊（色、受、想、行、識）を緣じて起すので、是を中悲と名ける。三は無緣、是は地上の菩薩が空理を觀じて起す慈悲である。更に佛の自然に現ずる大慈悲を指す是を大悲と名ける。この大悲が迷の世界を超越する善根である。安樂淨土は如來の大慈悲心より生れたものであるから、此大悲を指して淨土の根本となすのである。故に偈に「出生善根生」といふたのである。

又云問曰尋二法藏菩薩，本願力及龍樹菩薩，所讃一皆似下以二彼，國聲聞衆多一爲奇上此有二何，義一答曰聲聞，以二實際一爲一證，計不レ應三更能生二佛道，根芽一而佛以二本願不可思議，神力一攝令レ生レ彼必當レ復以二神力一生

其無上道心譬如鴆鳥入水魚蚌咸死犀牛觸之死者皆活如此不應生而生所以可奇然五不思議中佛法最不可思議佛能使聲聞復生無上道心眞不可思議之至也

【讀方】　またいはく問ていはく、法藏菩薩の本願力および龍樹菩薩の所讃をたづぬるに、皆かの國に聲聞は衆多なるをもて奇とするにあらず。答へていはく、聲聞は實際をもて證とす。計るにさらによく佛道の根芽を生ずべからず。しかるを佛本願の不可思議の神力をもて、攝してかしこに生ぜしむるに、必ずまさにまた神力をもて、それをして無上道心を生ぜしむべし。たとへば鴆鳥水にいれば、魚蚌ことごとく死す。犀牛これにふれば、死するもの皆よみがへるがごとし。此の如く生ずべからずして生ぜしむ。このゆへに奇とす。しかれば五不思議のなかに、佛法もつとも不可思議なり。佛よく聲聞をしてまた無上道心を生ぜしめたまふ。まことに不可思議のいたりなり。

【字解】　一。龍樹菩薩　梵語ナーガルジュナ(Nāgārjuna)龍猛とも意譯す。紀元二世紀に南印度に生れ、大に大乘佛教を宣揚し、『大智度論』百卷、『十住毗婆沙論』十七卷、『中論』四卷等を著はし、又『十二門論』『易行品』等に彌陀本願を宣べられた(『第二卷』七五三頁に委し。)

二。鴆鳥　一種の毒鳥。蛇を食とすといふ。この鳥の羽をもつて酒に浸せば毒酒となる。

【文科】　『論註』大義門功德の文によりて如來の威神功德を願はし給ふ。

願力生彼の文

【講義】　又曰く、問ふ、法藏菩薩の本願力卽ち聲聞無數の願と及び龍樹菩薩の易行品に讃嘆せらるゝ所によりて調べて見るに、彼安樂國土には聲聞の數が甚だ多いのは奇態な現象と云はねばならぬ。此にはどういふ義があるのであるか。

答ふ。誠に聲聞は自利一方の灰身滅智の證りに墮して、再び自利々他滿足の佛道を生むことはないのであるが、阿彌陀佛は不可思議の威神力を現はして彼等聲聞を攝め取りて、極樂に生ぜしめ、そして復神力をもつて無上菩提心を起さしめ下さるのである。例へば鴆といふ毒鳥が水の中へ入ると、魚や蚌等が悉くその毒に中りて死ぬが、犀牛がそれに觸れると、死んだものが皆な活き返るやうなものである。かやうな大乘涅槃界の極樂へはどうしても生れることの出來ない聲聞を生れしめるのは、實に淨土の奇特相である。所が五つの不思議の中に、佛法が最も不思議である。それであるから、阿彌陀佛が聲聞をして大菩提心を起さしむるので、眞に不可思議の至極である。

【餘義】　一。「佛以本願不可思議神力攝令生彼、必當復以神力生其無上道心」の文について、二つの解釋がある。

一は、初めの「本願不可思議神力」といふを第十九願にとり、「令生彼」の彼を方便化土と

なし後の「神力」を第十八願にするので、先づ第十九の願力を以て方便化土に生せしめて、然る後に第十八の願力を以て無上道心を起さしめて報土に引生せしめるといふのである。

二は、初めの「本願不可思議」の神力も後の「神力」も第十八願にとり、「令生彼」の彼を報土となし、第十八の願力を以て眞實報土に往生せしめ給ふ。その報土に往生せしめ給ふについては、必ず現生に於て、横超他力の菩提心を獲さしめ給ふと解するのである。この時の復は願力を以て報土に往生せしめ給ふが、その上に復往生の正因たる信心まで他力廻向と與へて下されるのであるといふのである。

この二解の中、後解の正しいことはいふまでもない。何故なら曇鸞大師の所謂大義門功德といふは、眞實報土の功德であるからである。その上に我が聖人はこの文の御點を「攝して彼に生せしむるに必ず」となし給うてあるからである。

又云不可思議力者總指彼佛國土十七種莊嚴功德力不可得思議也諸經說言有五種不可思議一者衆生多少不可思議二者業力不可思議三者龍力不可思議四者禪定力不可思議五者佛法力不可思議此中佛土不可思議有二種力一者業力謂法藏菩薩出世善根大願業力所成二者正覺阿彌陀法王善住持力所攝

【讀方】　またいはく、不可思議力といふは、すべてかの佛國土の十七種莊嚴功德力不可得思議なるとなさす。諸經にときてのたまはく、五種の不可思議あり。一には衆生多少不可思議、二には業力不可思議、三には龍力不可思議、四には禪定力不可思議、五には佛法力不可思議なり。このなかに佛土不可思議に二種の力あり一には業力、いはく法藏菩薩の出世の善根と大願業力の所成なり。二には正覺の阿彌陀法王のよく住持力をもて攝したまふ所なり。

【文科】『論註』不思議力の文によりて淨土の不思議力を釋成し給ふ一段。

【講義】　又曰く、不可思議力とは、總じて彼の安樂淨土の依報十七種莊嚴の功德力が、思慮分別を超えてゐることを指すのである。この不思議に就いて、『華嚴經』等の經中に五種の不可思議を說いてある。一は衆生多少不可思議、衆生無邊にして成佛するも成佛せずとも增減なきとの不可思議をいふ。二は業力不可思議衆生の複雜多樣なるは皆な業力の然らしむる所で、不可思議であるといふと。三は龍力不可思議、龍が一滴の水をもつて四天下に雨ふらすことの不可思議なること。四は禪定力不可思議、禪定により數百年も肉身を

維持し又は神通を現ずる等の不可思議なること。五は佛法力不可思議、諸佛の證りの境界智慧、德相の深遠廣大なるその不可思議なること。

この第五の不可思議の中の佛土の不可思議に二種の力がある。一は業力、是は法藏菩薩が因位に起したる無漏の功德善根、卽ち四十八の大願業力によりて成就つた佛土であること。二は其願成就して正覺を得た阿彌陀法王の神力によりてよく住持ち給ふ力の攝むる佛土であるといふこと。卽ち安樂淨土は分けて云へば因果二力、合せて云へば如來の大威神力によりて住持せらるゝ佛土であるといふのである。

又云示二現自利利他一者略說二彼阿彌陀佛國土十七種莊嚴功德成就一示二現如來自身利益大功德力成就利益他功德成就一故言レ略者彰二彼淨土功德無量一唯十七種上也夫須彌之入二芥子一毛孔一之納二大海一豈山海之神乎毛芥之力乎能神者神之耳

【讀方】またいはく、自利々他を示現すといふは、略してかの阿彌陀佛の國土の十七種の莊嚴功德成就をときて、如來の自身利益大功德力成就と、利益他功德成就とを示現したまへるがゆへにとのたまへり。略といふは、かの淨土の功德無量にしてたゞ十七種のみに非ざることをあらはす。それ須彌を芥子にいれ毛孔に大海なをさむ。あに山海の神ならんや。毛芥のちからならんや。能神の人の神ならくのみと。

【文科】『論註』自利々他の文によりて、如來の自利々他の意義を顯示し給ふ。

【講義】又曰く、阿彌陀如來が自利と利他の相を示現すといふことに就いて、彼安樂淨土の依報十七種莊嚴の功德が成就せられてあることが說かれてある。是は阿彌陀如來御自身を利する所の所謂自利の功德力が成就せられてあることと、衆生化益の利他の功德力が成就せられてあることが示されてあるからである。卽ち此の依報十七種莊嚴は、如來の自利々他の表現である。故にこの莊嚴の意義を知るといふことは、如來の自利々他を知ることである。

こゝに「略」といふたのは、淨土の功德無量にして決して十七種丈ではないといふことを彰はすのである。併し之を裏から云へば、この略して擧げた十七種莊嚴の中に、あらゆる淨土の莊嚴が攝められてあることを意味するのである。あの經文に說かれてある大須彌山が芥子粒の中に入るとか、毛孔の中に大海を納めるといふことが夫で、あれは山や海に左樣な神力があるのでもなければ、又は毛や芥子粒に力用があるのでもない。全く威神不可思議境に通達したる佛菩薩の威神解脫力のいたす所である。かやうに、無量の淨土の功德

莊嚴は十七種莊嚴に攝まり、十七種莊嚴は如來の自利々他の德に結歸するのである。

又云何者莊嚴不虛作住持功德成就偈言ニ觀佛本願力遇無空過者能令速滿足功德大寶海ニ故不虛作住持功德成就者蓋是阿彌陀如來本願力也乃至所レ言不虛作住持者依ニ本法藏菩薩四十八願ト今日阿彌陀如來自在神力ニ願以成レ力力以就レ願願不ニ徒然ニ力不ニ虛設ニ力願相符畢竟不レ差ヘ故曰ニ成就ト抄出

【讀方】また云はく、なにものか莊嚴不虛作住持功德成就、偈に佛の本願力を觀ばすに、遇ふてむなしくすぐるものなし。よく功德大寶海を滿足せしむるがゆへにとのたまへり。不虛作住持功德成就といふは、けだしこれ阿彌陀如來の本願力なり。（乃至）いふところの不虛作住持は、もと法藏菩薩の四十八願と、今日の阿彌陀如來の自在神力とによりてなり。願もて力を成ず。力もて願につく。願徒然ならず。力虛設ならず。力願あひかなうて畢竟してたがはず。かるがゆへに成就といふ。抄出

【文科】『論註』不虛作住持功德の文によりて、如來の願力の虛しからざることを釋成し給ふ。

【講義】又云く、不虛作住持功德成就といふ莊嚴はどういふものであるか、夫は『淨土論』の偈文に、「佛の本願力を見奉れば、遇うて空しく過ぐる者なし、能く速に功德の大寶海を滿足せしむるが故に」というてある。彌陀如來が不虛作住持の功德を成就せられたといふことは是の意味である。卽ち虛作ならず、金剛の堅さをもつてしっかりと吾々を懷き取つて下さるといふことは、阿彌陀如來の本願力を指すのである。

いふ所の虛作ではなく、確乎と大地のやうに我々を住持へて下さることは、彌陀如來の因位に於ける四十八の誓願と、今日その願圓に成就した無礙自在の威神力とに依るのである。我々を救濟けずばおかぬといふ因位の誓願によりて、果上の大威神力が成就り、果上の威神力によりて又因位の誓願の空しからぬことが表はれるのである。故に其誓願も徒然でない、其威神力も虛設でない。果上の威神力と因位の誓願とは、まるで割符を合せたやうにピタリと相應して少しも差ふことはない。本願の廣大なることを知れば、果上の威神力の不可思議なることが理解り、その威神力の廣大なることによりて、因位の誓願の不可思議なることが知らるゝのである。この力は二にして一つ、一にして而も二、兩々相俟つて如來の威神力が表現れる。因と果が圓現せられあるから成就といふのである。抄出

第二科『讚阿彌陀偈』の文

讚阿彌陀佛偈曰、曇鸞和南無阿彌陀佛釋名無量壽經亦曰安養成佛已來、

寶海を滿足せしむるが故に」というてある。彌陀如來が不虛作住持の功德を成就せられたといふことは是の意味である。卽ち虛作ならず、金剛の堅さをもつてしっかりと吾々を懷き取つて下さるといふことは、阿彌陀如來の本願力を指すのである。

いふ所の虛作ではなく、確乎と大地のやうに我々を住持へて下さることは、彌陀如來の因位に於ける四十八の誓願と、今日その願圓に成就した無礙自在の威神力とに依るのである。我々を救濟けずばおかぬといふ因位の誓願によりて、果上の大威神力が成就り、果上の威神力によりて又因位の誓願の空しからぬことが表はれるのである。故に其誓願も徒然でない、其威神力も虛設でない。果上の威神力と因位の誓願とは、まるで割符を合せたやうにピタリと相應して少しも差ふことはない。本願の廣大なることを知れば、果上の威神力の不可思議なることが理解り、その威神力の廣大なることによりて、因位の誓願の不可思議なることが知らるゝのである。この力は二にして一つ、一にして而も二、兩々相俟つて如來の威神力が表現れる。因と果が圓現せられあるから成就といふのである。抄出

第二科『讚阿彌陀偈』の文

讚阿彌陀佛偈曰、曇鸞和南無阿彌陀佛釋名無量壽經亦曰安養成佛已來、

歴二十劫一壽命方將無レ有レ量法身光輪徧二法界一照二世盲冥一故頂禮智慧光明不レ可レ量故佛又號二無量光一有量諸相蒙二光曉一是故稽二首眞實明一解脱光輪無二限齊一故佛又號二無邊光一蒙二光觸一者離二有無一是故稽二首平等覺一光雲無礙如二虛空一故佛又號二無礙光一一切有礙蒙二光澤一是故頂二禮難思議一清淨光明無レ有レ對故佛又號二無對光一遇二斯光一者業繫除是故稽二首畢竟依一佛光照耀最第一故佛又號二光炎王一三塗黑闇蒙二光啓一是故頂二禮大應供一道光明朗色超絶故佛又號二清淨光一一蒙二光照一罪垢除皆得二解脱一故頂禮慈光遐被施二安樂一故佛又號二歡喜光一光所レ至處得二法喜一稽二首頂二禮大安慰一佛光能破無明闇一故佛又號二智慧光一一切諸佛三乘衆咸共嘆譽故稽首光明一切時普照故佛又號二不斷光一聞光力故心不レ斷皆得二往生一故頂禮其光除レ佛莫二能測一故佛又號二難思光一十方諸佛嘆二往生一稱二其功德一故稽首神光離レ相不レ可レ名故佛又號二無稱光一因レ光成佛光赫然諸佛所嘆故頂禮光明照曜過二日月一故佛號二超日月光一釋迦佛嘆

尙不レ盡故我稽二首無等等一乃

【讃方】讃阿彌陀佛偈にいはく、（曇鸞和尙の造）南無阿彌陀佛（釋して無量壽と名く。經に發てほめたてまつりて亦安養といふ）。成佛よりこのかた十劫をへたまへり。壽命まさにはかりあることなけん。法身の光輪法界に徧して、世の盲冥なるをてらす。かるがゆへに頂禮したてまつる。智慧の光明はかるべからず。かるがゆへに眞實明を稽首したてまつる。解脱の光輪限齊なし。かるがゆへに佛をまた無量光と號す。有量の諸相光曉をかうふるもの有無をはなる。このゆへに平等覺を稽首したてまつる。光雲のごとくにして、無礙なること虛空のごとし。かるがゆへに佛をまた無礙光と號す。一切の有礙光澤をかうふる。このゆへに難思議を頂禮したてまつる。清淨光明對あることなし。かるがゆへに佛をまた無對光と號す。この光に遇ふものは衆縁のぞこる。このゆへに畢竟依を稽首したてまつる。佛光照耀して最第一なり。佛をまた光炎王と號す。三塗の黑闇光啓をかうふる。このゆへに大應供を頂禮したてまつる。道光明朗にして色超絶したまへり。かるがゆへに佛をまた清淨光と號す。ひとたび光照をかうふるに罪垢のぞこり、みな解脱をえしむ。かるがゆへに頂禮したてまつる。慈光はるかにかぶらしめ、安樂を施す。かるがゆへに佛を歡喜光と號す。光の至る所の處に法喜をえしむ。大安慰を稽首頂禮したてまつる。佛光よく無明の闇を破す。かるがゆへに佛をまた智慧光と號す。一切諸佛三乘衆、ことごとくともに嘆譽す。かるがゆへに稽首したてまつる。光明一切のとき普くてらす、かるがゆへに佛をまた不斷光と號す。聞光力のゆへに心不斷にてみな往生をえしむ。かるがゆへに頂禮したてまつる。その光佛かのぞきては

よく慟ることなけん。かるがゆへに佛をまた雖思光と號す。十方諸佛往生を嘆じ、その功德を稱ぜしむ。かるがゆへに稽首したてまつる。神光は相をはなれたること名くべからず。かるがゆへに佛をまた無稱光と號す。光によりて成佛したまふ。光赫然として諸佛の嘆じたまふことあり。かるがゆへに頂禮したてまつる光明照耀して日月にすぎたり。かるがゆへに佛を超日月光と號す。釋迦佛嘆じたまふことなほつきず。かるがゆへにわれ無等等を稽首したてまつる。乃至

【字解】一。讃阿彌陀佛偈　梁の曇鸞大師の著『大無壽量經』によりて、彌陀の淨土の依正二報、並に主伴莊嚴を讃詠す。凡て百五十五行。光彩迸り、流麗流るゝ如き宗教的讃歌である。

二。安養　極樂、安樂、樂有、等皆須摩提(Sukhāvatī)の譯である。彌陀の淨土をいふ。

三。三塗　火塗(地獄)、血塗(畜生)、刀塗(餓鬼)の稱。三惡趣に同じ。

【文科】『讃阿彌陀佛偈』の文によりて如來の威神光明を讃嘆し給ふ。

【講義】曇鸞和尙の作たる『讃阿彌陀佛偈』に曰く、南無阿彌陀佛（此書を『無量壽傍經』と名ける。それは『大無量壽經』に傍ふ所の云はゞ副經ともいふ意。又淨土の莊嚴を讃じたのであるから『安養偈』ともいふ）。

阿彌陀如來成佛し給ひしよりこのかた十劫の久しきに及び給ふ。そのおん壽命は限りない。法身の光輪は全法界に普く行き亘りていたらぬ隈もなく、心の盲たる人々を照し給ふこの故に彼如來を頂禮し奉る。

如來の智慧光は無限にてましまします。故に無量光佛とも名け奉る。あらゆる有情も一切萬象も、皆な如來の光曉を蒙つて居る。故に我眞實明に稽首き奉る。

迷妄を離れた解脫の光輪はきわみない。故に又この如來を無邊光佛と號け奉る。この光明に觸るゝ人々は自と迷ひの計ひたる有（徒なる肯定）無（徒なる否定）の邪見を離れることが出來る。故に我平等覺に稽首き奉る。

み光りは曉の雲の如く輝き、何物にも礙へられぬことは大虛空のやうである。故に無礙光佛と號け奉る。有情非情の別ちなく、一切の有礙みな光りの恩澤に浴し奉る。是故に我難思議を頂禮し奉る。

清淨の光明は世に對比るものはない。故に無對光佛と號け奉る。この光明に遇ふ者は、あらゆる惡業の繫が除かれる。是故に畢竟依（依所たる如來の歸）に稽首し奉る。

如來の光明の照輝は最尊第一にまします故に光炎王佛と號け奉る。三塗苦惱の黑闇も破れて、光啓は朗かに輝き給ふ。この故に我大應供（佛十號の一、人々の供養を得るに價する有德者の意）を頂禮し奉る。

菩提の光り明朗にして其色一切に超絶れ給ふ。故に又清淨光佛と號け奉る。一度び光照にあづかれば、罪も垢も自然に除かれて、曾な罪業の囚から解脫せられる。故に頂禮し奉る。

慈光はるかに十方の國々にかむらしめて、大安樂を與へ給ふ、故にこの佛けを歡喜光佛と號け奉る。御光りの至る處には、人々みな法の喜びを得て、心身の踴躍を覺える。故に我大安慰を稽首し奉る。

彌陀の光明は能く衆生のあらゆる疑惑無明の闇を破り給ふ故に、智慧光佛と名け奉る。十方の一切諸佛菩薩、聲聞、緣覺の方々は、咸く共に彌陀の光明を歎譽へ給ふ。故に我稽首し奉る。

その光明は亦一切の時に亘りて休みなく照し給ふ故に、不斷光佛と號け奉る。如來の智慧光の力に觸れる者は、その聞信の一念同時に、卽得往生の身に定められる。故に我頂禮し奉る。

その光明は如來を外にしては、能く測り知ることは出來ぬ。故に彌陀佛を又難思光佛と號け奉る。十方の諸佛は、その光明威神力によりて然らしむる衆生の往生を歎へ、彌陀の功德を稱讃し給ふ。故に稽首し奉る。

威神不可思議の光明は、差別の相を離れてをるから、說示することを許さぬ、故に又無稱光佛と號け奉る。光明無量の本願によりて成佛し給ひしことであれば、その光明は赫然として十方を照輝し、一切諸佛の歎稱へ給ふ所である。故に頂禮し奉る。

熾に照し給ふ光明は、日月の光りにも超え勝るゝをもつて超日月光佛と號け奉る。釋尊之を稱歎して百千萬劫を經ても說き盡すことは出來ぬと仰せらるゝ。故に我等しきものなき御佛を稽首し奉る。

【餘義】一。茲に『讃阿彌陀佛偈』の三ケ所の文が引いてある。一は題釋の十九字、二は『同偈』初丁以下三、丁に至る文、三は十五丁龍樹菩薩を讃し、自身の安心を告白なされる文である。三文總じて佛身を證成なされるための御引用であることは前に曰つた通りである。然し茲ではもう少し委しく說明して置かねばならぬことがある。

第一の題釋の十九字の前に曇鸞和尚造の五文字があるが、これは歟人自ら書き入れ給うたものか、或は後人の竄入したものか、一寸解らない。たしか『御草本』では前の『論註』の文の「畢竟不差」から「亦曰安養」といふまでが蟲食みの爲に不明になつてゐる筈であ

る。皆往院師はこの五文字は後人の置く所とはつきり言つてゐられるが強ちにさう許りも曰はれまいと思ふ、現に『和讃』には「讃阿彌陀佛偈曰」としてその下に『曇鸞御造』としてある。それでもしこの五文字が聖人の自ら置き給うたものとすれば、茲にそれだけの特別の意味がなければならぬが、これは、一は讃偈として古くは『十二禮』あり、近くは『往生禮讃』等あり、それらに簡んで曇鸞大師の『讃阿彌陀佛偈』なることを示し、一は、古來この『讃阿彌陀佛偈』について、僞作云々の説があるから聖人は自身眞選なることを信ずる旨を、この五文字に寄せて顯はし給うたものではあるまいか。

二。次に題釋の十九字と次の讃頌は一聯にしてみるべきものである。南無阿彌陀佛の六字は所讃の體を擧げたもの、換言すれば、『讃阿彌陀佛偈』の阿彌陀佛とは、南無阿彌陀佛であると斷つたのである。以下はこの如來の佛身の德を讃嘆したものである。

割註の十三字は解釋に甚だ困難する。一體『讃阿彌陀佛偈』そのものからすれば、「釋して無量壽と名づく。經に傍へて讃し奉る。亦安養と曰ふ」と讀むが至當であらうと思ふ『安樂集』下丁十九「是故曇鸞法師正二意歸レ西故傍二大經一奉讃云々」の指南から見るとどうしてもこうなければならぬ、「亦曰安養」の四文字は『六要鈔』鈔主の云はゝ如く有無諸本に依つて異なるとすれば、寧ろ茲にあるべき文字ではない。一體もとへもどしていふと「釋名無量壽」は阿彌陀の傍註であり、「傍經奉讃」は偈の傍註、「亦曰安養」は安樂國の傍註であつたのを後世誤つてまとめて南無阿彌陀佛の下へ書き入れて仕舞つたのである。或る先輩は、これを「釋して無量壽傍經奉讃と名づく。亦安養(偈)と曰ふ」と讀んで居られるが、矢張り無理である。

釋の字が邪魔になつたり、異名ならば、南無阿彌陀佛の上にあるべきことと思はれるのである。それで『讃阿彌陀佛偈』そのものゝ上について云へば、矢張り『安樂集』の御指南に從ふが當然であると思ふ。然し我が聖人は所謂隨宜轉用で、いか樣にも讀方を書いて自分の思ふ樣に意味までも御改めになるのだから、今茲では聖人の改め給うた樣にして味うて行かねばならぬことは勿論である。

それでは聖人はこれを如何に改め給うたか。前にもいふ樣に不幸にして『御草本』のこの個所が不明になつてゐるのだから甚だ進退に窮する。たゞ『唯信鈔文意』十九丁に「曇鸞大師はほめたてまつりて、安養とまうすとのたまへり」とあるから、こゝの御點も或は現行本の如く「釋して無量壽傍經と名づく。讃め奉りて亦安養と曰ふ」となされたかも知れ

ぬ。然し、『御和讃』の御點は「釋名二無量壽一傍レ經奉レ讃亦曰安養」とあるから、どうもどちらとも斷定がつかない。茲は暫らく缺疑に付して、現行の點讀の樣にして解して、行くより道はない。

それで、「釋して無量壽傍經と名づく」といふは『讃阿彌陀佛偈』の異名を擧げたことなる。讃め奉りて亦安養と曰ふといふは、我が祖の御心持では『唯信鈔文意』にもある通り「讃めて安養と曰ふ」といふ語がうれしく感ぜられたのではなからうか。當卷は『眞佛土卷』である。この眞土を奉讃して安養と云ふのである。こういふ具合に證誠されたものと思ふ。勿論この『讃彌陀偈』の引用文全體は佛身の證文であるが、其處は所謂依正不二で、佛身の證文の中に依報讃嘆の語の加つてある所に妙味があるのである。

三。正しく偈頌の中、初めの四句は總句である。壽命無量 光明無量を讃美し、後の全句は別句であつて十二光を擧げて、光明の德を嘆美なされるのである。

四。『讃阿彌陀佛偈』の引用文中、別讃龍樹の文は次へ至つて余義に更に說明することとする。

本師龍樹摩訶薩誕二形像始一理二頽網一闡二閉邪扉一開二正轍一是閻浮提、一切、眼伏二承尊語一歡喜地歸二阿彌陀一生二安樂一我從二無始一循二三界一爲二虛妄輪一所二廻轉一一念一時所レ造業足繫二六道一滯二三塗一唯願慈光護念我一令二我不レ失二菩提心一我讃二佛慧功德音一願聞二十方諸有緣一欲レ得二往生安樂一者普皆如レ意無障礙一所有功德若大小廻施一切共往生南無不可思議光一心歸命稽首禮十方三世無量慧同乘一如一號二正覺一二智圓滿道平等攝化隨レ緣故若干我歸二阿彌陀淨土一卽是歸二命諸佛國一我以二一心一讃二一佛一願徧二十方無礙人一如是十方無量佛咸各至レ心頭面禮已上抄出

【讃方】本師龍樹摩訶薩、形を像始に誕ず。頽網を理め、邪扉を關閉し、正轍をひらく。これ閻浮提の一切の眼なり。尊語を伏承し、歡喜地にして阿彌陀に歸して安樂に生ず。われ無始より三界にめぐりて、虛妄輪のために廻轉せらる。一念一時に造るところの業足六道につながれ、三塗にとゞまる。やゝれがはくは慈光護念して、我をして菩提心を失ぜざらしめたまへ。われ佛慧功德のこゝろを讃ず。願がはくは十方のもろ〳〵の有緣にきかしめて、安樂に往生することを得しめんと欲ほんもの、普く皆心のごとくして障碍なからしめん。あらゆる功德、もしは大小一切に廻施して、ともに往生せしめん。不可思議光に南無し一心に歸命し、稽首し禮したて

まつる。十方三世の無量壽、おなじく一如に乘じて正覺と號す。二智圓滿して道平等なり。攝化すること緣にしたがふ。まことに若干ならん。われ阿彌陀の淨土に歸するは、すなはちこれ諸佛の國に歸命するなりわれ一心をもて一佛を讃ず。われがはくは十方無碍人に徧ぜん。かくのごとき十方旡量佛、ことゝ〳〵くおの〳〵の心をいたして頭面に禮したてまつるなりと。已上　抄出

【字解】一。閻浮提　梵音ヂャンブ、ドキーパ（Jambudvīpa）、穢州、勝全州等と譯す。須彌四州の一。須彌山の南方に突出して北廣く南狹し。古代印度人が、雪山を理想化して須彌山とし、印度を廓大して南閻浮提として吾等の住む世界としたのである。（『第二卷』七五三頁に委し）

二。六道　六趣に同じ。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。「趣」は業によりて趣き住む處の意にて結果について名を立て、「道」は其處へゆくべき道といふ意にて原因について名を立てたのである。

【文科】『讃阿彌陀偈』の文により龍樹菩薩を讃じ鸞師の自督をあげ給ふ一段

【講義】本師龍樹大菩薩、は形像を像法の始めに示現してさながら願――は音徒同の反、タイ。訓は崩れる、破（波は破と同音の故に）れる、落ちる、纏る――れかゝつて纏り亂れた佛法の綱要を正し理め、邪敎の扇を塞ぎ閉ぢて之を征服し、正法輪の進むべき軌轍――轍は音直刹の反、テツ。訓は通ること、車、跡の意――を開いた。是によりて大法は水の流れるやうに四方に宣傳せらるゝに至つた。この菩薩こそ實に閻浮提（全世界）に於ける一切の人々の眼といふべきである。釋尊が『楞迦經』に懸記せられた豫言の御言葉を承け奉りて、自ら歡喜地の位を證り、阿彌陀如來に歸命して、安樂淨土に往生せられた。

我曇鸞は、無始曠劫の古から三界生死の巷を經循り、車に運ばるゝやうに虛妄の業力に回轉せられ、念々に造る所の業によりて、心の足は六道に繫がれ、三途の闇に釘うたる誠に悲痛の極みである。唯願くば慈光長へに我を護念りて、我胸奥より湧き上る無上菩提の心を失はざらしめ給へ。

我、彌陀如來の智慧と功德の音聲たる名號の謂れを讃嘆へ、普く十方の諸〳〵の有緣の人〳〵に聞かしめたいと願ふことである。この名號の謂れを聞いて安樂淨土に往生せんと欲ふ者は、皆意のまゝにして些の障礙もないであらう、如來廻向のあらゆる大小の功德は、凡て是れを一切の衆生に回施し與へて、諸共に不可思議光佛を念じ、一心一向に歸命し、稽首し奉る。

十方三世の一切諸佛は、同じく皆な眞如の理に乘じて正覺を開かれた。根本、後得の二智圓に備はりてをるから、その智慧德相は平等にして變ることはない。そして又緣に隨ひて衆生を化益することも平等にして不可思議である。

故に我彌陀の淨土に生れんと願ふことは、卽ちその證りを一にし、智慧を一にせる諸佛に歸命し奉ると同じことである。又我一心に彌陀一佛を讃嘆へることは、十方一切の無礙人、卽ち徧く諸佛を讃め奉ることとなる。それであるから是の彌陀如來と證りを一つにせる十方の數限りなき諸佛方に對ひて、咸く心を一つにして稽首き禮し奉ります。

【餘義】一。先づ『讃阿彌陀佛偈』に、龍樹菩薩を讃嘆してあることから解釋して進まう

別說龍樹の意

『讃阿彌陀佛偈』には、ひとり龍樹菩薩のことをのみ讃嘆してあるが、これは曇鸞大師にとつてはいかなる意味を持つてゐるのであらうか。この理由を推考してみると略〻左の二つになるやうである。

一には、龍樹菩薩が、淨土敎の始祖であるから、玆にその相承を示し、鸞師の時代には涅槃宗、三論宗、地論宗などの聖道の敎宗が盛んに行はれてゐる時で鸞師はこの中にあつて他力淨土敎を唱道せられたものであるから、隨分四方から攻難を受けられたが、然し考へてみれば、龍樹菩薩は八宗の祖師と仰がれる人で、身は歡喜地の高位にゐながら、猶自力のたのむ可からざるを知つて西方を願生して御ゐでなされる。してみれば、像法初期の聖者でさへ、猶且つ然りとせば、今日の我々が、自力の無功を知つて本願他力に歸するは自然の理ではないか、徒らに自分の智解にのみ拘つて、根本の出離問題を忘れてはならぬ、自分は遠く龍樹菩薩の化導を仰ぎ、その人格と行持に服して、他力敎を信仰するのであるといふことを示されるのである。鸞師はこういふ理由から常に龍樹菩薩を讃仰してゐられるのである。『論註』に『淨土論』を註釋するに當つて、「謹按龍樹菩薩云々」と書き出してあるのにも、この氣持は充分に伺はれるのである。

二には、この『讃阿彌陀佛偈』は龍樹菩薩の『十二禮』にならつたもので、讃偈の體裁を龍樹菩薩に取られたものであるから、その事を示すために、別して龍樹菩薩を讃嘆なされたものである。

二。さて然らば、この文全體は何を證誠せんが爲めに玆に引用せられたものであらうか。

この文全體の主眼點かういふと、南無不可思議光の七字である。この七字は卷頭の「佛者則是不可思議光如來」の略標に應じ、玆に上の十二光讃を結び、當卷に說き明さんとする我等の如來を一言にて最も典體的に示し給ふのである。十字の尊號と共に我が聖人の最も尊崇し給ふ九字の尊號は玆に據るのである。

然らば別讃龍樹の文と、續いて曇鸞大師が自ら信仰を告白し給ふ文とはいかなる引用の必要があるか、南無不可思議光の文字が必要ならば、その文字若しくば、その附近の文だけ引き給ふべきではないか。

云はく別讃龍樹の文はどうも、これといふ特別の引用の御覺召があるやうに思はれない「生安樂」と結んであるから、安樂といふ眞土の別名が必要なのかも知れない。又、歡喜地の聖者も轉迷開悟のためには、自力を離れて、安樂に生ずる外はないといふことを示す御覺召かも知れない。多分『和讃』に「像法のときの智人も、自力の諸敎をさしをきて、時機相應の法なれば、念佛門にぞいりたまふ」とある御心を示すのであらう。

曇鸞大師が信仰を告白し給ふ文は、その儘が必要なのであらう、卽ち、茲に便に依つて曇鸞大師の信仰を示し給ふ御覺召であらう。

第二項　善導大師の釋文

第一科『玄義分』の文

光明寺和尙云問曰彌陀淨國爲當是報是化也答曰是報非化

云何得知如大乘同性經說西方安樂阿彌陀佛是報佛報土又無量壽經云法藏比丘在世饒王佛所行菩薩道時發四十八願一一願言若我得佛十方衆生稱我名號願生我國下至十念若不生者不取正覺今既成佛卽是酬因之身也又觀經中上輩三人臨命終時皆言阿彌陀佛及與化佛來迎此人上然報身兼化共來授手故名爲與以此文證故知是報

【讀方】光明寺の和尙ののたまはく、問ていはく、彌陀淨國はばたこれ報なりやこれ化なりとやせん。答へていはく、これ報にして化にあらず。いかんが知ることなうる。大乘同性經にとくがごとし。西方の安樂阿彌陀佛はこれ報佛報土なりと。また無量壽經にのたまはく、法藏比丘、世饒王佛のみもとにまし〳〵て、菩薩の道を行したまひしとき、四十八願をおこして、一一の願に若しわれ佛をえたらんに、十方の衆生、わが名號を稱して我國に生ぜんと願ぜん。しも十念にいたるまで、もし生ぜずば正覺をとらじと。今すでに成佛したまへり。すなはちこれ酬因の身なり、また觀經のなかに、上輩三人臨命終時に、みな阿彌陀佛および化佛ともにこの人を來迎すと。しかるに報身、化を兼てともに來りて手をさづく。故になづけて與とす。この文證かもてのゆへに知んぬ、これ報なりと。

【字解】一。光明寺和尙　善導大師のこと。師が生涯の多くを長安(陝西省西安府)の西南なる光明寺

に過されしにより此名あり。

二。大乘同性經　二卷。又『一切佛行入智毗盧遮那藏說經』ともいふ。周宇文氏天竺三藏闍那耶舍譯。

三。世饒王佛　梵名ローケーシュヴラ、ラーヂャ(Lokeśvara-rāja)の譯。世自在王、世間自在王とも譯せらる。略して世王、饒王ともいふ。一切法に於いて自在を得、また世間に利益を施し、衆を饒むこと自在なる故に是等の名あり。阿彌陀佛の因位たる法藏比丘の師佛である。

四。上輩三人　『觀經』十六觀中の第十四觀、卽ち上品の三機を指す。上品上生、上品中生、上品下生の三種人ないふのである。

彌陀の淨土は報土ならば化土ならば

【文科】『玄義分』の文を引いて彌陀の淨土の報化を論定したまふ。

【講義】光明寺の和尙、善導大師の云く。問ふ、彌陀如來の淨土は、報土であるか、又は化土であるか、報土ならば法性の理に契うた究竟眞實の境地であるが、化土ならば未だ眞理の玄底に到り盡かぬ方便の化城に過ぎない。これは大問題である。

答ふ、彌陀の淨土は報土であつて化土ではない。それがどうして知れるかと云へば、先づ是を經文の上に求むれば、『大乘同性經』に說く、「西方の安樂淨土は報土である。卽ち其主佛たる阿彌陀如來は報身佛である」と。又『大無量壽經』には、彌陀如來の因位たる法藏比丘が、世饒王佛の所へ在して菩薩の修行に取りかゝらうとせらるゝ時に、四十八の大願を發されたが、その一々の願を攝め盡す所の第十八願には、「若し我佛となるであらう時、十方のあらゆる衆生が、我名號を稱へて、我淨土に往生したいと願ひ、下十聲乃至一聲でも稱へるならば必ず、往生することが出來るであらう。若し往生することが出來ないならば、我は證りを開かぬであらう。」この誓願により成佛せられた彌陀如來であるから、實に因位の本願に報い表はれた報身如來であることは明かである。卽ち一切衆生の成佛を御自身に引受けて、自己と同一視せられた誓願は、誠に全法界の底を叩いてをるのである。かやうな大願を滿たして成佛せられた如來であるから決して方便化身である筈がない。

更に他の證文を求むれば、『觀無量壽經』である。本經の散善三觀中、其上輩(上品上生、上品中生、上品下生)の三人が臨終の時一樣に『阿彌陀佛、及與二化佛一來二迎此人一』というてある。是は明かに阿彌陀佛が化佛を伴ひて來迎し行者に手を授けるといふ文であるから「與」字があそこに用ゐられたのである。卽ち其化佛を伴ふ阿彌陀佛は報佛にてましますことは言を俟たぬことである。

【餘義】一。これから、善導大師の文が引かれる。『玄義分』と、『序分義』と、『定善義』と『法事讚』の文である。『玄義分』の引文には三番の問答があり、法事讚の中からは短か

いけれども三文引用してある。

この中、『玄義分』の三番の問答は、彌陀如來が報身佛たることを證成し、『序分義』と『定善義』と『法事讃』の始めの二文は西方淨土の眞報土たることを證成し、『法事讃』の第三文は報身報土共に彌陀の果德にして、玆に正しく報身土たる意味を顯はすことを示し給ふのである。

二。玆に引用せられてゐる『玄義分』の文は、所謂古今楷定の妙判と稱せられるもので彌陀の淨土を是報非化と判定し、凡夫もその懷この報土に往生することを得る義を成立し給うたのである。

今日からすると、我等の欣求する淨土が報土であるとかないとかいふことは、さう大した心靈上の問題にならぬやうであるが、善導大師當時にあつては、實に重大な問題であつたのである。このことが非常に劇しく論義せられたのである。淨土が應土となつたり、又よし報土であつても、凡夫の往生を許されない樣な義理が立ては、玆に他力敎の成立は不可能に終り、救濟を要求する一般民衆の歸嚮點は全然失はれて仕舞はねばならない。こういふことは今日敎權の弛廢した、自主的精神の高い我々からは豫想以上の點があつたのである。私共は、聖道の諸敎の盛大な、そして敎權の極度に緊張してゐた當時にあつて、血の垂るやうな思をなしつゝ、奮鬪の結果、他力淨土敎を獨立せしめ自立せしめ給うた善導大師に對して無限の尊崇と感謝を拂はねばならぬのである。

おほよそ他力の一門においては、釋迦一代の說敎いまだその例なき通途の性相をはなれたる言語同斷の不思議といふは、凡夫の報土に生るゝを以てなり……『改邪鈔』

この『改邪鈔』の御語のやうに、もとより淨土敎の法相は全然聖道門のそれとは異なり、聖道門の敎權に服する必要は少しもないのであるが、然し實際上は高飛車にも出られないから、聖道の諸師に對して、その敎權に依つて、義を立て、理を推し、遂に古今を階定する妙判をなされたまでの困難と苦心は一方ならぬものであつたのである。

聖道門の諸師は多く彌陀如來の身土を應身應土としてゐる。諸師の見る所に依れば、彌陀の淨土は『大經』の所說に依つてみても、凡聖同居土たることは明白であるから、もしこれを報身報土とすれば、凡夫は往生すること能はず、從つて凡聖同居といふ事實が破れることになり、凡聖同居の事實ある以上は應身應土とせねばならぬといふのである。淨影大師、天台大師など、當時の敎界にあつて第一流の人がこの樣に判定してゐるのだから、

一寸動かすべからざる勢力となつてゐたのである。嘉祥大師は本迹二門を立てゝ迹門から論すれば酬因でないものはないから報土であり本門からいへば應現の土であると判せられたが、後に至つては應化土と定められてある。獨り慈恩大師は報身報土と判定せられたけれども、その代りに、凡夫はその土に往生することは出來ないときつぱりと斷わられてゐる。このやうな具合で、凡夫の往生を許す人は應身應土となし報身報土とする人は、凡夫の往生を許さないといふことになり、結果は同じいやうに、他力淨土敎の成立を見ることが出來なんだのである。これらの諸師はもとより、その學殖に於て、又識見に於て、當時のみならぬ。佛敎史上に卓越した位置を有してゐる人であるが、いかんせん、先入見が主となつて、自在な靈の眼が開き得ないために、他力敎の眞髓を捕へることが出來なんだのである。

この時に當つて猛然として立つて獅子吼せられたのが善導大師である。大師は遠くは三經の聖旨を得、龍樹天親曇鸞の祖意を受け、近くは西河道綽の義を相承して、卓然として是報非化、凡夫入報土の宣言をなされたのである。茲に淨土敎の綱格は成立して、民衆の歸嚮點は不動の位置を得たのである。『拾遺古德傳』にこの大師の功を左の樣に叙してある。

淨土宗を立るこゝろは、凡夫の報土に生ずることをあらはさんが爲めなり。その故は天台の敎相に依らば、凡夫の往生をゆるすと雖も、身土を判すること至つてあさし。若し法相によらば身土を判することふかしと雖も、凡夫の往生をゆるさず。諸宗の所談まことにたくみなりといへども、すべて凡夫の報土に生ずることを許さず、若し善導和尙の釋義によりて、淨土をたつる時、わづかに一世の念佛によりて、界內麁淺の凡夫たちまちに報土に生ずる義こゝにあきらけし。

然報應二身者眼目之異名前翻報作應後翻應作報凡言報者
因行不虛定招來果以果應因故名爲報又三大僧祇所修萬行
必定應得菩提今既道成卽是應身斯乃過現諸佛辨立三身除
斯已外更無別體縱使無窮八相名號塵沙刹體而論衆歸化攝
今彼彌陀現是報也

【讀方】しかるに報應二身は眼目の異名なり。ときには報を翻じて應となす。のちには應を翻じて報となす。おほよそ報といふは因行むなしからず、さだめて來果をまねく。果をもて因に應ず。かるがゆへに名て報とす。また三大僧祇の所修の萬行、必定して菩提をうべし。今すでに道成せり。すなはちこれ應身なり。これすなは

ち過現の諸佛三身を辨立す。斯を除きて已外はきらに別の體ましまさず。たとひ無窮の八相、名號塵沙なりとも、體を就して論ぜば、すべて化に歸して攝す。いまかの彌陀、現にこれ報なり。

【字解】一。三大僧祇　三大阿僧祇。三無數劫のこと、菩薩が佛果をうるまでに經る所の修行の年時。

この三無數劫の修行において佛果をうる因行を成就するのである。これを三祇の修行とも略稱す。

二。八相　佛及び菩薩がこの世界に出現して、一生の間に示し給ふ八種の相をいふ。これに大凡五說あり。(一)降兜率、託胎、降生、出家、降魔、成道、說法、涅槃。(二)受胎、降生、處宮、出家、成佛、降魔、說法、涅槃。(三)在天、處胎、初生、出家、座道場、成道、轉法輪、入涅槃。(四)生天、處兜率天、下天託胎、出胎、出家、降魔、轉法輪、入涅槃。(五)住胎、嬰孩、愛欲、樂苦行、降魔、成道、轉法輪、入滅。大同小異である。

【文科】『玄義分』の文によりて報應の釋譯の相違等を論じて彌陀の淨土を報土と決したまふ。

【講義】然るに或經文の中に佛身の三身を眞身、應身、化身と說いてあるのを、釋家の中には應身といふ文字に囚へられて、法報二身を眞身に攝め、觀經の阿彌陀佛はこの應身である、八相成道の應身佛であるなぞと判釋してゐるが、そは文字に固執する偏見の致す所である。應身といつても、或場合には報身と同意義である。卽ち眼と目は文字は違つてゐても、體は全く一であるやうなもので、前には報身のことを應身と譯し、後にはその意味の應身を譯して報身とした。これは全く飜譯の相違で體は全く報身である。

全體この「報」の意義は、因位の行が虛ならず、定めて來るべき果報を招くといふことで、之を逆に云へば、果をもつて因に應ずること、卽ち結果に相應する原因があつて、兩々相應するといふことである。之を報といふ。又應といふことは、三大阿僧祇の長い間

に修めた所の萬行の因が、屹度相違なく正覺を得べし(應)といふ確信の下に修行したのが今既に滿足して正覺が得られた。是が卽ち應身といふ意味である。この意味に於いて報と應とは全く同じである。

過去現在の諸佛が、佛身を辨別して建立せらるゝに三身門をもつてせられたのは全くこの意味である。この三身の外に決して別の佛體はましまさぬ。縱使八相成道に無限の樣式があり、そして其佛名は塵沙の如く限りないにしても、其を體に結歸して論ずれば、皆化身に攝まるのである。然るに今彌陀如來はこの世に八相成道せられた佛ではない、正しく因位の大願に酬い表はれた佛であるから報身佛にてましますのである。

【餘義】一。この「報應は眼目の異名」といふ下は、淨影大師が彌陀如來を應身とせらるゝを破したものである。そして報應が一の異名だといふのも翻譯に對する議論であつて三身門の應身が報身と一つだといふのではない。

『淨影大師觀經疏』末に、

次時去時、見レ佛不レ同、佛具二三身一、一者眞身、謂法與レ報、二者應身、八相現成、三者化身、隨レ機現起、依レ如二大經一上品之人見二佛應身一而來迎接一、中品見レ化、下品夢觀、不レ辨二化應一眞身常寂無二迎接相一

とあり、『觀經』上三品の來迎の文中、阿彌陀佛を應身とし、化佛を化身と判し、その應身といふは八相成道の佛であると定めたのである。ところが、この淨影大師の三身判の據處となるは『金光明經』と『梁攝論』であつて、『金光明經』の「三身品」には「一切如來有二三種一一者化身、二者應身、三者法身」とあり、『梁攝論』には、自性、應身、化身の判が出てゐる、尤も下卷には自性、受用、變化の三身判もあるのである。一應表面を見れば、應身といふは法報應三身判の應身のやうに見えるが、更にこれを翻譯の比較から見ると、この應身といふは報身のことで、淨影大師の誤謬なることが知れるといふのである。

翻譯の比較といふは、『攝論』には、後魏の佛陀扇多の二卷譯と、梁の眞諦三藏の三卷譯と、隋の笈多譯の天親の釋論十卷とあり、『魏の攝論』には、眞身、報身、應身と列ね、『梁の攝論』には先きにいうたやうに、自性、應身、化身となし、隋譯には、自性、受用、化身と譯出してゐる。それで今この善導大師の文中、前翻後翻といふは、どういふ對望になるのか、一寸解らない。魏梁對望と見る人と、梁隋對望と見る人と兩說に分れてゐる。魏梁對望でこの文を解する時は、前翻の報を(後翻では)應と爲し、後翻の應を(前翻で

は報となすとなるのである。然し穩かな見方は梁隋對望で、梁譯は應と譯出し、隋譯は受用（勿論報身のことである）と譯出し、同一の原語を違つて譯出したので、この法應化三身判の時は、應身といふは報身のこととなり、『金光明經』の應身とあるも、報身と解さねばならぬといふのが、善導大師の御意である。

問曰既言報者報身常住永無生滅何故觀音授記經說阿彌陀佛亦有入涅槃時此之一義若爲通釋答曰入不入義者唯是諸佛境界尙非三乘淺智所闚豈況小凡輙能知也雖然必欲知者敢引佛經以爲明證何者如大品經涅槃非化品中說云佛告須菩提於汝意云何若有化人作化人是化頗有實事不空者不須菩提言不也世尊佛告須菩提色卽是化受想行識卽是化乃至一切種智卽是化須菩提白佛言世尊若世間法是化出世間法亦是化所謂四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分三解脫門佛十力四無所畏四無礙智十八不共法幷諸法果及賢聖人所謂須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛菩薩摩訶薩諸佛世尊是法亦是化不

佛告須菩提一切法皆是化於是法中有聲聞法變化有辟支佛法變化有菩薩法變化有諸佛法變化有煩惱法變化有業因緣法變化以是因緣故須菩提一切法皆是化須菩提白佛言世尊是諸煩惱斷所謂須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道斷諸煩惱習皆是變化不

佛告須菩提若有法生滅相者皆是變化須菩提言世尊何等法非變化佛言若法無生無滅是非變化須菩提言何等是不生不滅非變化佛言無誑相涅槃是法非變化世尊如佛自說諸法平等非聲聞作非辟支佛作非諸菩薩摩訶薩作非諸佛作有佛無佛諸法性常空性空卽是涅槃云何涅槃一法非如化佛告須菩提如是如是諸法平等非聲聞所作乃至性空卽是涅槃若新發意菩薩聞是一切法皆畢竟性空乃至涅槃亦皆如化者心則驚怖爲是新發意菩薩故分別生滅者如化不生不滅者不如化耶

今既以斯聖教験知彌陀定是報也縱使後入涅槃其義無妨諸有智者應知

【讃方】問ていはく、すでに報といふは報身常住にしてながく生滅なし。なんがゆへぞ觀音授記經にとかく、阿彌陀佛また入涅槃の時ありと、この一義いかんが通釋せんや。答へていはく、入不入の義はたゞこれ諸佛の境界なり。なを三乘淺智のうかゝふところにあらず。あにいはんや小凡たやすく能知らんや。然といへども、必ず知らんとおもはゞ、あへて佛經をひきてもて明證とせん。いかんとならば、大品經の涅槃非化品の中に說きていふがごとし。佛、須菩提につげたまはく、汝が意においていかん、もし化人ありて化人をなす。この化すこぶる實事なりやいなや。空きものなりやいなや。須菩提まふさく、不なり、世尊、佛、須菩提につげたまはく、色すなはちこれ化なり。受想行識すなはちこれ化なり。乃至一切種智すなはちこれ化なり。須菩提、佛にまふしてまふさく、世尊、もし世間の法これ化なりや。出世間の法またこれ化なりや。いはゆる四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、三解脫門、佛十力、四無所畏、四無碍智、十八不共法、ならびに諸法の果および賢聖人、いはゆる須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩、諸佛世尊、この法またこれ化なりやいなや。

佛、須菩提につげたまはく、一切の法はみなこれ化なり。この法の中において聲聞法の變化あり。辟支佛法の變化あり。菩薩法の變化あり。諸佛法の變化あり。煩惱法の變化あり。業因緣法の變化あり。この因緣をもてのゆへに、須菩提、一切の法みなこれ化なりとのたまへり。須菩提、佛にまふしてまふさく、世尊、このもろもろの煩惱斷はいはゆる須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道はもろ〳〵の煩惱の習を斷ず。みなこれ變化なりやいなや。

佛、須菩提につげたまはく、もし法の生滅の相あるはみなこれ變化なりとのたまへり。須菩提まふさく、世尊なんらの法か變化にあらざると。佛のたまはく、もし法の無生無滅なる、これ變化にあらずと。須菩提まふさく、世尊なんらかこれ不生不滅にして變化にあらざると。佛のたまはく、諸相なき涅槃この法變化にあらずと。世尊佛みづからときたまふがごとく諸法は平等にして、聲聞の作にあらず、辟支佛の作にあらず、諸菩薩摩訶薩の作にあらず、諸佛の作にあらず。有佛無佛諸法の性つねに空なり。性空なるすなはちこれ涅槃なり。いかんぞ、涅槃の一法化のごとくにあらざると。佛、須菩提につげたまはく、是のごとし是のごとし。諸法は平等にして聲聞の所作にあらず、乃至性空なればすなはちこれ涅槃なり。もし新發意の菩薩、この一切の法みな畢竟して性空なり、乃至涅槃もまたみな化のごとしときかば、心すなはち驚怖しなん。この新發意の菩薩のために、ことさらに生滅のものは化のごとし、不生不滅のものは化のごとくにあらずと分別するなや。今すでにこの聖教をもて驗かにしんぬ。彌陀はさだめてこれ報なり。たとひ後に涅槃にいらんも、其義さまたげなし。もろ〳〵の有智のひと知るべし。

【字解】一。『觀音授記經』『觀世音菩薩授記經』の略。一卷。宋の曇無竭の譯。釋尊、華德藏菩薩に對せられ、觀世音菩薩、及び得大勢至菩薩の過去現在未來を說き、阿彌陀佛の滅後、觀世音成佛し、觀世音の

滅後、得大勢至成佛すべし等と說かれた經典である。

二。『大品經』　『大品般若經』の略。具には『大般若波羅蜜多經』といふ。六百卷。唐の玄奘三藏譯。諸法皆空の理と、是を見る智慧(般若)を廣說す。教誡教授、般若行相、讚大乘、讚般若等の諸品乃至眞如品、無邊際品、般若波羅蜜多品等の諸品あり。

三。須菩提　梵音スブフーチ(Subhūti)蘇部底、藪浮帝、須扶提等みな音譯である。善現、善吉、又は仁性と譯せられた。舍衞國の長者の子にして、釋尊の弟子となり、解空第一と稱せらる。

四。四念處　上八六頁を見よ。

五。四正勤　四善根位のうち、煖位にて修する行。四正斷ともいふ。已生惡法爲除斷、未生惡法不令生、未生善法爲令生、已生善法爲增長、の四事を一心に勤め修めること。

六。四如意足　四淨根位の頂位において修むる行。欲如意足(切に樂ひ欲すること)。念如意足(一心に專注すること)。精神如意足(絲間なく精進すること)。思惟如意足(他へ心を散らさず、專ら思考へること)。

この四事をもつて、意の如く所願を滿ず故に如意足といふ。

七。五根　三十七道品のうち、信根、精進根、念根、定根、慧根の稱。

八。五力　上の五根に同じであるが、今は之をもつて惡を排し去る意味に用ゐて五力といふ。

九。七覺支　七菩提分、七覺分、略して七覺ともいふ。皆同じ。道を修むる時、その眞僞善惡を觀察覺了する覺支と名く。擇法覺支、精進覺支、喜覺支、除覺支、捨覺支、定覺支、念覺支、の稱。

一〇。八聖道分　八正道、八正道支みな同じ。中正にして理に契ひ、涅槃に至る道なる故に正道、又は聖道といふ。八種に分れてをるから支といふ。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の稱。

一一。三解脫門　解脫をうる三種の方法。空解脫門(萬有の皆空なるを觀ずること)。無相解脫門(萬有に差別のすがたなしと觀ずること)無作解脫門(前の二門を根柢として其上に欲求の思ひを離るゝこと)の稱。

一二。十力　如來の十力をいふ。是處非處智力、過現未來業報智力、諸善解脫三昧智力、諸根勝劣智力、種々解智力、種々界智力、一切至處道智力、天眼無礙智力、宿命無漏智力、永斷習氣智力の稱。

一三。四無所畏　佛說法のとき怖畏の相なきこと。正等覺無畏(悟りを得てをるから畏れはない)、漏永盡無所畏、(煩惱を斷つてゐるから畏れはない)說障法無所畏(說りを妨げる法をとくに畏れはない)說出苦道無所畏(苦みを出づる道をとくに畏れはない)の稱。

一四。四無礙智　四無礙辨ともいふ。如來の四種の解智。法無礙辨(一切の法の名字に通達すること)、義無礙辨(一切の法の義理に通達すること)、詞無礙辨(一切の言語に通達すること)、樂說無礙辨(衆生の欲する所に隨ひて法を說くに自在なること)。

一五。十八不共法　如來の有したまふ十八種の獨特の法。身無失、口無失、念無失、無異想、無不定心、無不知已捨、欲無減、精進無減、念無減、慧無減、解脫無減、解脫智見無減、一切身業隨智慧行、智慧知過去世無礙、智慧知未來世無礙、智慧知現在世無礙の稱である。

一六。須陀洹　聲聞四果の一、初果である。梵語スローダーパンナ（Srotaḥpanna）。預流、入流、逆流と譯す。三界の見惑を斷じ盡して、初めて聖者の流類に預り入りし位をいふ。見道十五心の後、卽ち第十六心にして修道位に入つた位である。

一七。斯陀含　聲聞四果の第二果。サクリダーガーミン（Sakṛidagāmin）。一來果と譯す。欲界修惑の九品の中、上六品を斷じたる聖者をいふ。餘の下三品の惑力によりて、人天の各一生を感得する。故に人中に此果をうれば、必ず天上に往き、更に再び人界に生じて涅槃に入り、又若し天上に此果をうれば、先づ人中に生じ、再び天上に還生して涅槃する。かやうに必ず天上と人間に一往來する果であるから一往來果といふ。一來果は略稱である。

一八。阿那含　聲聞四果の第三果、梵語アナーガーミン（Anāgāmin）。阿那伽迦、阿那伽彌みな音譯である。不還不來と譯す。欲界修惑の九品を斷盡したる聖者をいふ。再び欲界に生を受くることがないから不還果といふ。五種不還、七種不還、九種不還等の別あり。

一九。阿羅漢　聲聞四果の第四果。上三八頁を見よ。

二〇。辟支佛　獨覺のこと。上二八頁「緣覺」の下を見よ。

二一。新發意菩薩　二菩薩の一。新に發心したる修道者のこと。初發心であるから、稍もすれば邪見に奔りて、上菩提を求むることが出來ず、下衆生を度することが出來ない恐れある菩薩である。

【文科】『玄義分』の文によつて、彌陀の報身報土を問答決著し玉ふ一段である。

【講義】問ふ、もし阿彌陀佛が報身であるといふならば、報身は常住に不變絕對にして生滅の境を超えてをるのである。然るに『觀音授記經』に阿彌陀佛にも亦入涅槃の時があるといふことを判然と說いてあるのは如何なる譯であるか、この一義をどうして通釋するか。

答ふ、諸佛の境界に於いて、涅槃に入るとか入らぬとかといふことは、實の處絕對界に屬することで、聲聞、緣覺、菩薩の三乘の人達の淺い智慧では窺ひ知ることが出來ないのである。況んや小さな凡夫の智慧では、螢火をもつて太陽の光りを測らうとするにも增して愚な仕業である。夫であるから一概に一經の文面をもつて正しい規矩とする譯にはゆかぬ。大體經典は、佛が機に應じて說かれたものであるから、吾々は之に對して、嚴密なる批判を下さなければならぬ。それは經典そのものを客觀的に批判するのではなく、稍もすれば經典の文字のまゝを固執せんとする淺薄な思想を打破することが重要なのである。

けれども兎に角一經の文面に彌陀の入涅槃が說いてあるのであるから、是に就いては尙一步進んで知らなければならぬことがある。そこで他の經典を引いて明確なる證據とするであらう。それは『大品般若經』涅槃非化品の文である。

佛、尊者須菩提に告げ給ふやう、須菩提よ、若し幻化の人が幻化の人を作る場合には、其作られた幻化は實在のものと思ふか、但しは空しいものと思うか、卿はそれを正く考へるか、須菩提答へて、世尊よ、それは實でもなければ、空でもありませぬ。

佛、須菩提に告げ給ふやう。色（物質）は化幻である。受想行識の四法も亦化幻である。即ち我々を組み立てゝゐる五蘊の法は皆化幻である。是は凡夫のみに限らず、聲聞、緣覺菩薩の三乘の聖者達の五蘊も、進んでは、一切諸佛の法に通じ、一切衆生の因種を知る所の佛の五蘊も亦化幻である。

須菩提、佛に申し上げて曰く、世尊よ、世間の一切の法は皆な化幻でありまするか。そして夫のみならず出世間の法も矢張り化幻でありまするか。出世間の法とは、所謂證りに至るまでの樣々の敎、樣々の智慧、樣々の威德、果位等のことであります。即ち四念處、四正勤、四如意、五根、五力、七覺分、八聖道分、等より進んでは三解脫門、佛の德である所の十力、四無畏、四無礙智、十八不共法、並に修行によりて獲る所の果位、及び預流果、一來果、不還果、阿羅漢果の聲聞、辟支佛、大菩薩、諸佛世尊も亦化幻でありまするか。

佛、須菩提に告げ給ふやう、一切の法は皆化幻である。是等の法の中に、聲聞に屬する變化の法あり、緣覺に屬する變化の法あり、菩薩の變化法、諸佛の變化法がある。以上は無漏淸淨の法であるが、更に有漏の煩惱の變化法、業力の因緣によりて生ずる化幻の法がある。是等の諸法は有漏無漏等樣々の差別があるが、要するに因緣和合によりて生ずる化幻の法である。須菩提よ、夫故に我は一切諸法をあげて因緣生の化幻であると說いたのである。

須菩提、佛に申して曰く、世尊よ、業煩惱等の法が化幻であることは會得することが出來まするが、是等の煩惱を斷つ所の智慧、卽ち預流、一來、不還、阿羅漢等の四果並びに緣覺の果をうる所の智慧は、よく諸の煩惱の繫を斷ち切るのである。然るに此智慧も變化と仰せられるのでありまするか。

佛、須菩提に告げ給ふやう、その法が智慧であらうと果位であらうと、苟も生滅の相のあるものならば、皆是れ變化と云はねばならぬ。

須菩提申すやう、世尊よ、然らば如何なる法が變化でないのでありまするか。佛答へて それは生ずることもなく、滅することもない堪然常住の法が夫である。

須菩提、重ねて、然らば如何なる法が不生不滅の常住なる非變化法でありまするか。佛答へて、それは詐の相を離れた實相常住の涅槃、一法丈である。これは不生不滅の法であるから變化のものではない。

須菩提曰く、世尊は先に諸法の平等なることを御說きになつて、一切諸法の自性は凡夫の見てゐるやうな千差萬別のものではない。その自性は堪然として平等不變のものである是は聲聞の作つたのでもなく、緣覺の作つたものでもなく、諸大菩薩、諸佛の作つたものでもない。如來出世の時も、如來の出世せられぬ時でも、諸法の本性は常に空不可得である。その本來の性空が卽ち涅槃である。世尊はかやうに諸法平等の理を說き給ひながら、何故に涅槃の一法丈を變化のないと說いて、他の一切法を變化と仰せられるのでありまするか。

佛、須菩提に告げ給ふやう、誠に汝の云ふ通りである。一切諸法は平等なもので、後天的に聲聞等の作つたものではない。それは先天的に常住の性空である。卽ち一切法の性が涅槃である。けれどもかやうな深遠微妙の法は、初めて道に志した修道者が、一切法はその根柢を叩けば本性空である、涅槃も亦空であると聞いたならば、その弱い心は驚きと怖れに嚙まれて、道を修めることが出來ないやうになるであらう。夫故にこの新發意の修道者の爲めに、殊更に一般に敎を下して、生滅の相を具へる法は化幻で、不生不滅の法は幻化の法でない、それのみが眞實であると說いたのである。故に若し此の敎說を聞いて敎の如く涅槃に住するならば、期せずして諸法平等の眞理を見ることが出來るのである。

今上に引いた此等の聖敎の指示によりて考へて見るに、彌陀如來の淨土は、明かに眞實報土であることが知れる。卽ち『大品經』に說く如くに佛には新發智の菩薩の爲めに方便を說くと云はれてあるから『觀音授記經』の中に縱假彌陀の入涅槃を說いてあつても、彌陀の淨土が眞報土であるといふことに差支へはないのである。道に忠實なる學者達は、能くこの理を會得することと信ずる。

問曰、彼佛及土既言報者、報法高妙、小聖難階、垢障凡夫云何得入。答曰、若論衆生垢障實難忻趣、正由託佛願以作強緣致使五乘齊入。

【讀方】問ていはく、かの佛および土、すでに報といはゞ、報法高妙にして小聖かなひがたし。垢障の凡夫いかんが入ることをえんや。答へていはく、もし衆生の垢障を論ずれば、實に忻趣しがたし。まさしく佛願に

託してもて強縁となるによりて、五乘をして齊く入らしむることを致す。

【字解】一。垢障凡夫　煩惱の垢、罪の障りある凡夫。

【文科】『玄義分』の文によりて五乘齊入の淨土を明す一段である。

【講義】問うて曰く、彼の阿彌陀如來は報身佛にして、其極樂淨土は報身土とするならば、絶妙不可思議の報身土の自然の法則として、あまりに高遠至妙なるが爲めに、小乘の聖者達でも其土に入ることは出來ない、況んや煩惱の垢と障に縛らるゝ凡夫の如きは、どうして往生することが出來やうぞ。答ふ、問のやうに菩提を妨げる所の衆生の煩惱のみに眼を注ぐならば、極樂に往生するといふことは忻趣い難いことである。併しながら今は彌陀如來の本願力に乘託するので、是が實に不可思議の强縁である。この誓願力によりて人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩等のあらゆる十方衆生をして、一樣に同一の資格で極樂へ往生することが出來るのである。

第二科　『序分義』の文

又云、從我今樂生彌陀已下、正明夫人別選所求。此明彌陀本國四十八願願皆發增上勝因依因起於勝行依行感於勝果依果感成勝報依報感成極樂依樂顯通悲化依於悲化顯開智慧之門。然悲心無盡智亦無窮。悲智雙行卽廣開甘露因茲法潤普攝群生也。諸餘經典勸處彌多。衆聖齊心皆同指讃。有此因緣致使如來密遣夫人別選也。

【讀方】又いはく、我今樂生彌陀より已下は、まさしく夫人別して所求をえらぶことをあかす。これ彌陀の本國は四十八願なり。願々みな增上の勝因を發す。因によりて勝行をおこす。行によりて勝果を感ず。果によりて勝報を感成す。報によりて極樂を感成す。樂によりて悲化を顯通す。悲化によりて智慧の門を顯開す。しかるに悲心無盡なり。智また無窮なり。悲智雙行してすなはちひろく甘露をひらく。これによりて法潤あまねく群生を攝す。諸餘の經典、勸處ひろくおほし。衆聖心を齊くして、みなおなじく指讃す。この因緣ありて如來ひそかに夫人をして別して選ばしむることを致すことをあかす。

【字解】甘露　甘露の法の略。甘露は梵語アムリタ(Amrta)。不死とも譯す。卽ち甘露は、不死の靈藥に喩ふ。

【文科】『序分義』の文によりて淨土と本願の關係等を顯示し給ふ。

【講義】又曰く『觀經』の序分に說かれてある「我今極樂世界の阿彌陀佛の所に生れんと願ふ」より以下は、正しく韋提夫人がこの平凡な人生にのみ注いだ眼を轉じて道を求め